

最終戰爭論・戰
爭史大觀

石原莞爾



最終戦争論

第一部 最終戦争論

第一章 戦争史の大観

第一節 決戦戦争と持久戦争

戦争は武力をも直接使用して国家の国策を遂行する行為であります。今アメリカは、ほとんど全艦隊をハワイに集中して日本を脅迫しております。どうも日本は米が足りない、物が足り

昭和十五年五月二十九日京都義方会に於ける講演速記
で同年八月若干追補した。

ないと言つて弱つてゐるらしい、もうひとおどし、おどせば日支問題も日本側で折れるかも知れぬ、一つ脅迫してやれというのでハワイに大艦隊を集中してゐるのであります。つまりアメリカは、かれらの対日政策を遂行するために、海軍力を盛んに使つてゐるのでありますが、間接の使用でありますから、まだ戦争ではありません。

戦争の特徴は、わかり切つたことでありますが、武力戦にあるのです。しかしその武力の価値が、それ以外の戦争の手段に對してどれだけの位置を占めるかということによつて、戦争に二つの傾向が起きて来るのであります。武力の価値が他の手段にくらべて高いほど戦争は男性的で力強く、太く、短くなるのであります。言い換えれば陽性の戦争——これを私は決戦戦争と命名しております。ところが色々の事情によつて、武力の価

値がそれ以外の手段、即ち政治的手段に対して絶対的でなくなる——比較的価値が低くなるに従つて戦争は細く長く、女性的に、即ち陰性の戦争になるのであります。これを持久戦争と言います。

戦争本来の真面目しんめんぽくは決戦戦争であるべきですが、持久戦争となる事情については、単一でありません。これがために同じ時代でも、ある場合には決戦戦争が行なわれ、ある場合には持久戦争が行なわれることがあります。しかし両戦争に分かれる最大原因は時代的影響でありまして、軍事上から見た世界歴史は、決戦戦争の時代と持久戦争の時代を交互に現出して参りました。戦争のこととなりますと、あの喧嘩好きの西洋の方が本場らしいのでございます。殊に西洋では似た力を持つ強国が多数、隣接しており、且つ戦場の広さも手頃でありますから、決戦・

持久面戦争の時代的変遷がよく現われております。日本の戦いは「遠からん者は音にも聞け……」とか何とか言つて始める。戦争やらスポーツやら分からぬ。それで私は戦争の歴史を、特に戦争の本場の西洋の歴史で考えて見ようと思ひます（六四頁の付表第一参照）。

第二節 古代および中世

古代——ギリシャ、ローマの時代は国民皆兵であります。これは必ずしも西洋だけではありません。日本でも支那でも、原始時代は社会事情が大体に於て人間の理想的形態を取っていることが多いのであります、戦争も同じことであります。ギリシャ、ローマ時代の戦術は極めて整然たる戦術であつたのであります。多くの兵が密集して方陣を作り、巧みにそれが進

退して敵を圧倒する。今日でもギリシャ、ローマ時代の戦術は依然として軍事学に於ける研究の対象たり得るのであります。国民皆兵であり整然たる戦術によつて、この時代の戦争は決戦的色彩を帯びておりました。アレキサンダーの戦争、シイザーの戦争などは割合に政治の掣肘せいちゆうを受けないで決戦戦争が行なわれました。

ところがローマ帝国の全盛時代になりますと、国民皆兵の制度が次第に破れて来て傭兵ようへいになった。これが原因で決戦戦争的色彩が持久戦争的なものに変化しつつあつたのであります。これは歴史的に考えれば、東洋でも同じことであります。お隣りの支那では漢民族の最も盛んであつた唐朝の中頃から、国民皆兵の制度が乱れて傭兵に墮落する。その時から漢民族の国家生活としての力が弛緩しております。今日まで、その状況がずつ

と継続しましたが、今次日支事変の中華民國は非常に奮発をして勇敢に戦っております。それでも、まだどうも眞の国民皆兵にはなり得ない状況であります。長年文を尊び武を卑しんで来た漢民族の悩みは非常に深刻なものでありますが、この事変を契機としまして何とか昔の漢民族にかえることを私は希望しています。

前にかえりますが、こうして兵制が乱れ政治力が弛緩して参りますと、折角ローマが統一した天下をやソの坊さんに実質的に征服されたのであります。それが中世であります。中世にはギリシャ、ローマ時代に発達した軍事的組織が全部崩壊して、騎士の個人的戦闘になつてしまいました。一般文化も中世は見方によつて暗黒時代であります。軍事的にも同じことであるます。

第三節 文芸復興

それが文芸復興の時代に入つて来る。文芸復興期には軍事的にも大きな革命がありました。それは鉄砲が使われ始めたことです。先祖代々武勇を誇っていた、いわゆる名門の騎士も、町人の鉄砲一発でやられてしまう。それでお侍のさむらい一騎打ちの時代は必然的に崩壊してしまい、再び昔の戦術が生まれ、これが社会的に大きな変化を招来して来るのであります。

当時は特に十字軍の影響を受けて地中海方面やライン方面に商業が非常に発達して、いわゆる重商主義の時代でありましたから、金が何より大事で兵制は昔の国民皆兵にかえらないで、ローマ末期の傭兵にかえたのであります。ところが新しく発達して来た国家は皆小さいものですから、常に沢山の兵隊を養つ

てはいられない。それでスイスなどで兵隊商売、即ち戦争の請負業ができて、国家が戦争をしようとしみますと、その請負業者から兵隊を傭って来るようになりました。そんな商売の兵隊では戦争の深刻な本性が発揮できるはずがありません。必然的に持久戦争に墮落したのであります。しかし戦争がありそうだから、あそこから三百人傭って来い、あつちからも百人傭って来い、なるたけ値切って傭って来いというような方式では頼りないのでありますから、国家の力が増大するにつれ、だんだん常備傭兵の時代になりました。軍閥時代の支那の軍隊のようなものであります。常備傭兵になりますと戦術が高度に技術化するのはです。くろうとの戦いになると巧妙な駆引の戦術が発達して来ます。けれども、やはり金で傭って来るのでありますから、当時の社会統制の原理であつた専制が戦術にもそのまま利用さ

れたのです。

その形式が今でも日本の軍隊にも残っております。日本の軍隊は西洋流を学んだのですから自然の結果であります。たとえば号令をかけるときに剣を抜いて「気を付け」とやります。「言うことを聞かないと切るぞ」と、おどしをかける。もちろん誰もそんな考えで剣を抜いているわけではありませんが、この指揮の形式は西洋の傭兵時代に生まれたものと考えます。刀を抜いて親愛なる部下に号令をかけるといふのは日本流ではない。日本では、まあ必要があれば采配を振るのです。敬礼の際「頭右」かしらみぎと号令をかけ指揮官は刀を前に投げ出します。それは武器を投ずる動作です。刀を投げ捨てて「貴方にはかないません」という意味を示した遺風であろうと思われまゝ。また歩調を取って歩くのは専制時代の傭兵に、弾雨の下を臆病心を押えつけて敵

に向つて前進させるための訓練方法だったので。

金で備われて来る兵士に対しては、どうしても専制的にやつて行かねばならぬ。兵の自由を許すことはできない。そういう関係から、鉄砲が発達して来ますと、射撃をし易くするためにも、味方の損害を減ずるためにも、隊形がだんだん横広くなつて深さを減ずるようになりましたが、まだ専制時代であつたので、横隊戦術から散兵戦術に飛躍することが困難だったのであります。

横隊戦術は高度の専門化であり、従つて非常に熟練を要するものです。何万という兵隊を横隊に並べる。われわれも若いときに歩兵中隊の横隊分列をやるのに苦心したものです。何百個中隊、何十個大隊が横隊に並んで、それが敵前で動くことは非常な熟練を要することであります。戦術が煩瑣はんさなものになつて

専門化したことは恐るべき墮落であります。それで戦闘が思う通りにできないのです。ちよつとした地形の障害でもあれば、それを克服することができない。

そんな関係で戦場に於ける決戦は容易に行なわれない。また長年養つて商売化した兵隊は非常に高価なものであります。それを濫費することは、君主としては惜しいので、なるべく斬り合ひはやりたくない。そういうような考えから持久戦争の傾向が次第に徹底して来るのです。

三十年戦争や、この時代の末期に出て来た持久戦争の最大名手であるフリードリヒ大王の七年戦争などは、その代表的なものであります。持久戦争では会戦、つまり斬り合ひで勝負をつけるか、あるいは会戦をなるべくやらないで機動によつて敵の背後に迫り、犠牲を少なくしつつ敵の領土を蚕食する。この二

つの手段が主として採用されるのであります。

フリードリヒ大王は、最初は当時の風潮に反して会戦を相当に使ったのでありますが、さすがのフリードリヒ大王も、多く血を見る会戦では戦争の運命を決定しかね、遂に機動主義に傾いて来たのであります。

フリードリヒ大王を尊敬し、大王の機動演習の見学を許されたこともあつたフランスのある有名な軍事学者は、一七八九年、次の如く言っております。「大戦争は今後起らないだろうし、もはや会戦を見ることはないだろう」。将来は大きな戦争は起きない。また戦争が起きても会戦などという血なまぐさいことはやらないで主として機動によりなるべく兵の血を流さないで戦争をやるようになるだろうという意味であります。

即ち女性的陰性の持久戦争の思想に徹底したのであります。

しかし世の中は、あることに徹底したときが革命の時なんです。皮肉にも、この軍事学者がそういう発表をしている一七八九年はフランス革命勃発の年であります。そういうふうには持久戦争の徹底したときにフランス革命が起りました。

第四節 フランス革命

フランス革命当時はフランスでも戦争には備い兵を使うのがよいと思われていた。ところが多数の兵を備うには非常に金がかかる。しかるに残念ながら当時、世界を敵とした貧乏国フランスには、とてもそんな金がありません。何とも仕様がないう国の滅亡に直面して、革命の意気に燃えたフランスは、とうとう民衆の反対があつたのを押し切り、徴兵制度を強行したのであります。そのために暴動まで起きたのでありますが、活気ある

フランスは、それを弾圧して、とにかく百万と称する大軍——
実質はそれだけなかったと言われているが——を集めて、
四方からフランスに殺到して来る熟練した職業軍人の連合軍に
対抗したのであります。その頃の戦術は先に申しました横隊で
す。横隊が余り窮屈なものですから、横隊より縦隊がよいとの
意見も出ていたのでありますが、軍事界では横隊論者が依然と
して絶対優勢な位置を占めておりました。

ところが横隊戦術は熟練の上にも熟練を要するので、急に狩
り集めて来た百姓に、そんな高級な戦術が、できっこはないので
す。善いも悪いもない。いけないと思いながら縦隊戦術を採つ
たのです。散兵戦術を採用したのです。縦隊では射撃はできま
せんから、前に散兵を出して射撃をさせ、その後方に運動の容
易な縦隊を運用しました。横隊戦術から散兵戦術へ変化したの

であります。決してよいと思つてやつたものではありません。やむを得ずやつたのです。ところがそれが時代の性格に最も良く合つていたのです。革命の時代は大体そういうものだと思われ
ます。

古くからの横隊戦術が、非常に価値あるもの高級なものと常識で信じられていたときに、新しい時代が来ていたのです。それに移るのがよいと思つて移つたのではない。これは低級なものだと思ひながら、やむを得ず、やらざるを得なくなつて、やつたのです。それが、地形の束縛に原因する決戦強制の困難を克服しまして、用兵上の非常な自由を獲得したのみならず、散兵戦術は自由にあこがれたフランス国民の性格によく適合しました。

これに加えて、傭兵の時代とちがい、ただで兵隊を狩り集め

て来るのですから、大将は国王の財政的顧慮などにしばられず、思い切った作戦をなし得ることとなったのであります。こういう関係から、十八世紀の持久戦争でなければならなかった理由は、自然に解消してしまいました。

ところが、そういうように変わっても、敵の大将はむろんのこと新しい軍隊を指揮したフランスの大将も、依然として十八世紀の古い戦略をそのまま使っていたのであります。土地を攻防の目標とし、広い正面に兵力を分散し、極めて慎重に戦いをやって行く方式をとっていたのです。このとき、フランス革命によって生じた軍制上、戦術上の変化を達観して、その直感力により新しい戦略を発見し、果敢に運用したのが不世出の軍略家ナポレオンであります。即ちナポレオンは当時の用兵術を無視して、要点に兵力を集めて敵線を突破し、突破が成功すれば逃げる敵

をどこまでも追っかけて行つて徹底的にやつつける。敵の軍隊を撃滅すれば戦争の目的は達成され、土地を作戰目標とする必要などは、なくなります。

敵の大將は、ナポレオンが一点に兵を集めて、しやにむに突進して来ると、そんなことは無理じゃないか、乱暴な話だ、彼は兵法を知らぬなどと言っている間に、自分はやられてしまった。だからナポレオンの戦争の勝利は対等のことをやっていたのではありません。在来と全く変つた戦略を巧みに活用したのであります。ナポレオンは敵の意表に出て敵軍の精神に一大電撃を加え、遂に戦争の神様になってしまったのです。白い馬に乗つて戦場に出て来る。それだけで敵は精神的にやられてしまった。猫ににらまれた鼠のように、立ちすくんでしまいました。

それまでは三十年戦争、七年戦争など長い戦争が当り前であつ

たのに、数週間か数カ月で大きな戦争の運命を一挙に決定する決戦戦争の時代になったのであります。でありますから、フランス革命がナポレオンを生み、ナポレオンがフランス革命を完成したと言うべきです。

特に皆さんに注意していただきたいのは、フランス革命に於ける軍事上の変化の直接原因は兵器の進歩ではなかったことでもあります。中世暗黒時代から文芸復興へ移るときに軍事上の革命が起つたのは、鉄砲の発明という兵器の関係でありました。けれどもフランス革命で横隊戦術から散兵戦術に、持久戦争から決戦戦争に移った直接の動機は兵器の進歩ではありません。フリードリヒ大王の使った鉄砲とナポレオンの使ったものとは大差がないのです。社会制度の変化が軍事上の革命を来たした直接の原因であります。このあいだ、帝大の教授がたが、この

ことについて「何か新兵器があつたでしょう」と言われますから「新兵器はなかつたのです」と言つて頑張りますと、「そんなら兵器の製造能力に革命があつたのでしょうか」と申されます。「しかし、そんなこともありませんでした」と答えざるを得ないのです。兵器の進歩によつてフランス革命を来たしたことになければ、学者には都合が悪いのですが、都合が悪くても現実は致し方ないのであります。ただし兵器の進歩は既に散兵の時代となりつつあつたのに、社会制度がフランス革命まで、これを阻止していたと見る事ができます。

プロイセン軍はフリードリヒ大王の偉業にうぬぼれていたのですが、一八〇六年、イエーナでナポレオンに徹底的にやられてから、はじめて夢からさめ、科学的性格を活かしてナポレオンの用兵を研究し、ナポレオンの戦術をまねし出しました。

さあそうとなると、殊にモスコー敗戦後は、遺憾ながらナポレオンはドイツの兵隊に容易には勝てなくなつてしまいました。世の中では末期のナポレオンは淋病で活動が鈍つたとか、用兵の能力が低下したとか、いい加減なことを言いますけれども、ナポレオンの軍事的才能は年とともに発達したのです。しかし相手もナポレオンのやることを覚えてしまったのです。人間はそんなに違うものではありません。皆さんの中にも、秀才と秀才でない人がありました。けれども大した違いではありません。ナポレオンの大成功は、大革命の時代に世に率先して新しい時代の用兵術の根本義をとらえた結果であります。天才ナポレオンも、もう二十年後に生まれたなら、コルシカの砲兵隊長ぐらゐで死んでしまったらと思います。諸君のように大きな変化の時代に生まれた人は非常に幸福であります。この幸福を感じ

謝せねばなりません。ヒットラーやナポレオン以上になれる特別な機会に生まれたのです。

フリードリヒ大王とナポレオンの用兵術を徹底的に研究したクラウゼウィッツというドイツの軍人が、近代用兵学を組織化しました。それから以後、ドイツが西洋軍事学の主流になります。そうしてモルトケのオーストリアとの戦争（一八六六年）、フランスとの戦争（一八七〇―七一年）など、すばらしい決戦戦争が行なわれました。その後シュリーフェンという参謀総長が長年、ドイツの参謀本部を牛耳っておりまして、ハンニバルのカンネ会戦を模範とし、敵の両翼を包囲し騎兵をその背後に進め敵の主力を包囲殲滅^{せんめつ}すべきことを強調し、決戦戦争の思想に徹底して、欧州戦争に向ったのであります。

第五節 第一次欧州大戦

シュリーフェンは一九一三年、欧州戦争の前に死んでおります。つまり第一次欧州大戦は決戦戦争発達の頂点に於て勃発したのです。誰も彼も戦争は至短期間に解決するのだと思つて欧州戦争を迎えたのであります。ほんくらまで、そう思つたときには、もう世の中は變つてゐるのです。あらゆる人間の予想に反して四年半の持久戦争になりました。

しかし今日、静かに研究して見ると、第一次欧州大戦前に、持久戦争に対する予感が潜在し始めていたことがわかります。ドイツでは戦前すでに「経済動員の必要」が論ぜられておりました。またシュリーフェンが参謀総長として立案した最後の対仏作戦計画である一九〇五年十二月案には、アルザス・ロートリンゲン地方の兵力を極端に減少してベルダン以西に主力を用

い、パリを大兵力をもつて攻囲した上、更に七軍団（十四師団）の強大な兵団をもつてパリ西南方から遠く迂回し、敵主力の背後を攻撃するという真に雄大なものでありました（二五頁の図参照）。ところが一九〇六年に参謀総長に就任したモルトケ大将の第一次欧州大戦初頭に於ける対仏作戦は、御承知の通り開戦初期は破竹の勢いを以てベルギー、北フランスを席捲して長驅マルヌ河畔に進出し、一時はドイツの大勝利を思惟したのでありました。が、ドイツ軍配置の重点はシュリーフェン案に比して甚だしく東方に移り、その右翼はパリにも達せず、敵のパリ方面よりする反撃に遇^あうともろくも敗れて後退のやむなきに至り、遂に持久戦争となりました。この点についてモルトケ大将は、大いに批難されているのであります。たしかにモルトケ大将の案は、決戦戦争を企図したドイツの作戦計画としては、甚

だ不徹底なものと言わねはなりません。シュリーフェン案を行する鉄石の意志と、これに対する十分な準備があつたならば、第一次欧州大戦も決戦戦争となつて、ドイツの勝利となる公算が、必ずしも絶無でなかつたと思われまゝ。

しかし私は、この計画変更にも持久戦争に対する予感が無意識のうちに力強く作用していたことを認めます。即ちシュリーフェン時代にはフランス軍は守勢をとると判断されたのに、その後、フランス軍はドイツの重要産業地帯であるザール地方への攻勢をとるものと判断されるに至つたことが、この方面への兵力増加の原因であります。また大規模な迂回作戦を不徹底ならしめたのは、モルトケ大将が、シュリーフェン元帥の計画では重大条件であつたオランダの中立侵犯を断念したことが、最も有力な原因となつてゐるものと私は確信いたします。ザール

鉱工業地帯の掩護^{えんじょ}、特にオランダの中立尊重は、戦争持久のための経済的考慮によつたのであります。即ち決戦を絶叫しつゝあつたドイツ参謀本部首脳部の胸の中に、彼らがはつきり自覚しない間に持久戦争的考慮が加わりつつあつたことは甚だ興味深いものと思ひます。

四年半は三十年戦争や七年戦争に比べて短いようでありますが緊張が違ふ。昔の戦争は三十年戦争などと申しまして中間に長い休みがあります。七年戦争でも、冬になれば傭兵を永く寒い所に置くと皆逃げてしましますから、お互に休むのです。ところが第一次欧州戦争には徹底した緊張が四年半も続きました。

なぜ持久戦争になつたかと申しますと、第一に兵器が非常に

進歩しました。殊に自動火器——機関銃は極めて防禦に適當な兵器であります。だからして簡単には正面が抜けない。第二にフランス革命の頃は、国民皆兵でも兵数は大して多くなかったのですが、第一次欧州戦争では、健康な男は全部、戦争に出る。歴史で未だかつてなかったところの大兵力となつたのです。それで正面が抜けない。さればと言つて敵の背後に迂回しようとする、戦線は兵力の増加によつてスイスから北海までのびているので迂回することもできない。突破もできなければ迂回もできない。それで持久戦争になつたのであります。

フランス革命のときは社会の革命が戦術に変化を及ぼして、戦争の性質が持久戦争から決戦戦争になつたのでしたが、第一次欧州大戦では兵器の進歩と兵力の増加によつて、決戦戦争から持久戦争に變つたのであります。

四年余の持久戦争でしたが、十八世紀頃の持久戦争のように会戦を避けることはなく決戦が連続して行なわれ、その間に自然に新兵器による新戦術が生まれました。

砲兵力の進歩が敵散兵線の突破を容易にするので、防者は数段に敵の攻撃を支えることとなり、いわゆる数線陣地となりましたが、それでは結局、敵から各個に撃破される危険があるため、逐次抵抗の数線陣地の思想から自然に面式の縦深防禦の新しい方式が出てきました。

二

すなわち自動火器を中心とする一分隊ぐらい（戦闘群）の兵力が大間隔に陣地を占め、さらにこれを縦深に配置するのであります（上図参照）。このような兵力の分散により敵の砲兵火力の効力を減殺するのみならず、この縦深に配置された兵力は互

に巧妙に助け合うことによつて、攻者は単に正面からだけでなく前後左右から不規則に不意の射撃を受ける結果、攻撃を著しく困難にします。

こうなると攻撃する方も在来のような線の敵兵では大損害を受けますから、十分縦深に疎開し、やはり面の戦力を發揮することにつとめます。横隊戦術は前に申しましたように専制をその指導精神としたのに対し、散兵戦術は各兵、各部隊に十分な自由を与え、その自主的活動を奨励する自由主義の戦術であります。しかるに面式の防禦をしている敵を攻撃するに各兵、各部隊の自由にまかせて置いては大きな混乱に陥るから、指揮官の明確な統制が必要となりました。面式防禦をするのには、一貫した方針に基づく統制が必要です。

即ち今日の戦術の指導精神は統制であります。しかし横隊戦

術のように強権をもつて各兵の自由意志を押えて盲従させるものとは根本に於て相違し、各部隊、各兵の自主的、積極的、独断的活動を可能にするために明確な目標を指示し、混雑と重複を避けるに必要な統制を加えるのであります。自由を抑制するための統制ではなく、自由活動を助長するためであると申すべきです。

右のような新戦術は第一次欧州大戦中に自然に発生し、戦後は特にソ連の積極的研究が大きな進歩の動機となりました。欧州大戦の犠牲をまぬがれた日本は一番遅れて新戦術を採用し、今日、熱心にその研究訓練に邁進しております。

また第一次欧州大戦中に、戦争持久の原因は西洋人の精神力の薄弱に基づくもので大和魂をもつてせば即戦即決が可能であるという勇ましい議論も盛んでありますが、真相が明らかに

なり、数年来は戦争は長期戦争・総力戦で、武力のみでは戦争の決がつかないというのが常識になり、第二次欧州大戦の初期にも誰もが持久戦争になるだろうと考えていましたが、最近ドイツ軍の大成功により大きな疑問を生じて参りました。

第六節 第二次欧州大戦

第二次欧州大戦では、ドイツのいわゆる電撃作戦がポーランド、ノールウェーのような弱小国に対し迅速に決戦戦争を強行し得たことは、もちろん異とするに足りません。しかし仏英軍との間には恐らくマジノ、ジークフリートの線で相對峙し、お互にその突破が至難で持久戦争になるものと考えたのであります。

ドイツがオランダ、ベルギーに侵入することはあつても、そ

れは英国に対する作戦基地を得るため、連合軍の主力との間に真の大決戦が行なわれるだろうとは考えられませんでした。しかるに五月十日以来のドイツの猛撃は瞬時にオランダ、ベルギーを屈伏せしめ、難攻と信ぜられたマジノ延長線を突破して、ベルギーに進出した仏英の背後に迫り、たちまち、これを撃滅し、更に矛を^{ほこ}転じてマジノ線以西の地区からパリに迫つてこれを抜き、オランダ侵入以来わずか五週間で強敵フランスに停戦を乞わしめるに至りました。即ち世界史上未曾有の大戦果を挙げ、フランスに対しても見事な決戦戦争を遂行したのであります。しからば、果してこれが今日の戦争の本質であるかと申せば、私は、あえて「否」と答えます。

第一次欧州大戦に於ては、ドイツの武力は連合軍に比し多くの点で極めて優秀でありましたが、兵力は遙かに劣勢であり、

戦意は双方相譲らない有様で大体互角の勝負でありました。ところがヒットラーがドイツを支配して以来、ドイツは真に挙国一致、全力を挙げて軍備の大拡充に努力したのに対し、自由主義の仏英は漫然これを見送ったために、空軍は質量共に断然ドイツが優勢であることは世界がひとしく認めていたのであります。今度いよいよ戦争の幕をあけて見ると、ドイツ機械化兵団が極めて精鋭且つ優勢であるのみならず、一般師団の数も仏英側に対しドイツは恐らく三分の一以上も優勢を保持しているらしいのです。しかも英雄ヒットラーにより全国力が完全に統一運用されているのに反し、数年前ドイツがライン進駐を執行したとき、フランスが断然ベルサイユ条約に基づきドイツに一撃を加えることを主張したのに対し英国は反対し、その後も作戦計画につき事毎に意見の一致を見なかつたと信ぜられます。フ

ランスの戦意はこんな関係で第一次欧州大戦のようではなく、マジノ延長線も計画に止まり、ほとんど構築されていなかったらしいのです。

戦力の著しく劣勢なフランスは、国境で守勢をとるべきだったと思われまゝ。恐らく軍当局はこれを欲したのでしようが、政略に制せられてベルギーに前進し、この有力なベルギー派遣軍がドイツの電撃作戦に遇^あつて徹底的打撃を受け、英軍は本国へ逃げかえりました。英国が本気でやる気なら、本国などは海軍に一任し全陸軍はフランスで作戦すべきであります。英仏の感情は恐らく極めて不良となつたことと考えられます。かくてドイツが南下するや、仏軍は遂に抵抗の実力なく、名将ペタン將軍を首相としてドイツに降伏しました。

このように考えますと、今次の戦争は全く互格の勝負ではな

く、連合側の物心両面に於ける甚だしい劣勢が必然的にこの結果を招いたのであります。そもそも持久戦争は大体互格の戦力を有する相手の間に於てのみ行なわれるものです。第一次欧州大戦では開戦初期の作戦はドイツの全勝を思惟させたのですが、マルヌで仏軍の反撃に敗れ、また最後の一九一八年のルーデンドルフの大攻勢では、北フランスに於ける戦場付近で仏英軍に大打撃を与え、一時は全く敵を中断して戦争の運命を決し得るのではないかとさえ見えたのでしたが、遂に失敗に終りました。両軍は大体互格で持久戦争となり、ドイツは主として経済戦に敗れて遂に降伏したのであります。

フィンランドはソ連に屈伏はしたものの、極めて劣勢の兵力で長時日ソ連の猛撃を支え、今日の兵器に対しても防禦威力の如何に大なるかを示しました。またベルギー戦線でも、まだ詳

細は判りませんが、ブリュッセル方面から敵の正面を攻めたドイツ軍は大きな抵抗に遇い、容易には敵線を突破できなかった様子です。現在は第一次欧州大戦に比べると、空軍の大進歩、戦車の進歩などがありますが、十分の戦備と決心を以て戦う敵線の突破は今日も依然として至難で、戦争持久に陥る公算が多く、まだ持久戦争の時代であると観察されます。

第二章 最終戦争

われわれは第一次欧州大戦以後、戦術から言えば戦鬪群の戦術、戦争から言えば持久戦争の時代に呼吸しています。第二次欧州戦争で所々に決戦戦争が行なわれても、時代の本質はまだ持久戦争の時代であることは前に申した通りであります。や

がて次の決戦戦争の時代に移ることは、今までお話した歴史的観察によつて疑いのないところであります。

その決戦戦争がどんな戦争であるだろうか。これを今までのことから推測して考えましょう。まず兵数を見ますと今日では男という男は全部戦争に参加するのでありますが、この次の戦争では男ばかりではなく女も、更に徹底すれば老若男女全部、戦争に参加することになります。

戦術の変化を見ますと、密集隊形の方陣から横隊になり散兵になり戦闘群になつたのであります。これを幾何学的に観察すれば、方陣は点であり横隊は実線であり散兵は点線であり、戦闘群の戦法は面の戦術であります。点線から面に來たのです。この次の戦争は体（三次元）の戦法であると想像されます。

それでは戦闘の指揮単位はどういうふうに変化したかと言う

と、必ずしも公式の通りではなかったものでありますが、理屈としては密集隊形の指揮単位は大隊です。今のように拡声器が発達すれば「前へ進め」と三千名の連隊を一斉に動かし得るかも知れませんが、肉声では声のよい人でも大隊が単位です。われわれの若いときに盛んにこの大隊密集教練をやったものであります。横隊になると大隊ではどんな声のよい人でも号令が通りません。指揮単位は中隊です。次の散兵となると中隊長ではとても号令は通らないので、小隊長が号令を掛けねばいけません。それで指揮単位は小隊になったのであります。戦闘群の戦術では明瞭に分隊——通常は軽機一挺と鉄砲十何挺ちようを持っている分隊が単位であります。大隊、中隊、小隊、分隊と逐次小さくなつて来た指揮単位は、この次は個人になると考えるのが至当であろうと思います。

単位は個人で量は全国民ということとは、国民の持っている競争力を全部最大限に使うことです。そうして、その戦争のやり方は体の戦法即ち空中戦を中心としたものでありましょう。われわれは体以上のもの、即ち四次元の世界は分らないのです。そういうものがあるならば、それは恐らく霊界とか、幽霊などの世界でしょう。われわれ普通の人間には分らないことです。要するに、この次の決戦戦争は戦争発達の極限に達するのであります。

戦争発達の極限に達するこの次の決戦戦争で戦争が無くなるのです。人間の闘争心は無くなりません。闘争心が無くならなくて戦争が無くなるとは、どういうことか。国家の対立が無くなる——即ち世界がこの次の決戦戦争で一つになるのであります。

これまでの私の説明は突飛だと思う方があるかも知れませんが、私は理論的に正しいものであることを確信いたします。戦争発達の極限が戦争を不可能にする。例えば戦国時代の終りに日本が統一したのは軍事、主として兵器の進歩の結果であります。即ち戦国時代の末に信長、秀吉、家康という世界歴史でも最も優れた三人の偉人が一緒に日本に生まれて来ました。三人の協同作業です。信長が、あの天才的な閃き^{ひらめ}で、大革新を妨げる堅固な殻を打ち割りました。割った後もあまり天才振りを発揮されると困ります。それで明智光秀が信長を殺した。信長が死んだのは用事が終わったからであります。それで秀吉が荒削りに日本の統一を完成し、朝鮮征伐までやって統一した日本の力を示しました。そこに家康が出て来て、うるさい婆さんのように万事キチンと整頓してしまった。徳川が信長や秀吉の考えた

ような皇室中心主義を實行しなかったのは遺憾千万ですが、この三人で、ともかく日本を統一したのであります。なぜ統一が可能であつたかと言え、種子島へ鉄砲が来たためです。いくら信長や秀吉が偉くても鉄砲がなくて、槍と弓だけであつたらば旨く行きません。信長は時代を達観して尊皇の大義を唱え、日本統一の中心点を明らかにしましたが、彼は更に今の堺から鉄砲を大量に買い求めて統一の基礎作業を完成しました。

今の世の中でも、もしもピストル以上の飛び道具を全部なくしたならば、選挙のときには恐らく政党は演壇に立つて言論戦なんかやりません。言論では勝負が遅い。必ず腕力を用いることになります。しかし警察はピストルを持っている。兵隊さんは機関銃を持っている。いかに剣道、柔道の大家でも、これではダメだ。だから甚だ迂遠な方法であるが、言論戦で選挙を争つ

ているのです。兵器の発達が世の中を泰平にしているのです。この次の、すごい決戦戦争で、人類はもうとても戦争をやることはできないということになる。そこで初めて世界の人類が長くあこがれていた本当の平和に到着するのであります。

要するに世界の一地方を根拠とする武力が、全世界の至るところに対し迅速にその威力を発揮し、抵抗するものを屈伏し得るようになれば、世界は自然に統一することとなります。

しからばその決戦戦争はどのような形を取るかを想像して見ます。戦争には老若男女全部、参加する。老若男女だけではない。山川草木全部、戦争の渦中に入ります。しかし女や子供まで全部が満州国やシベリヤ、または南洋に行つて戦争をやるのです。ありません。戦争には二つのことが大事です。

一つは敵を撃つこと——損害を与えること。もう一つは損害

に対して我慢することです。即ち敵に最大の損害を与え、自分の損害に堪え忍ぶことでもあります。この見地からすると、次の決戦戦争では敵を撃つものは少数の優れた軍隊であります。我慢しなければならぬものは全国民となるのです。今日の欧州大戦でも空軍による決戦戦争の自信力がありませんから、無防禦の都市は爆撃しない。軍事施設を爆撃したと言っており、ますけれども、いよいよ真の決戦戦争の場合には、忠君愛国の精神で死を決心している軍隊などは有利な目標でありません。最も弱い人々、最も大事な国家の施設が攻撃目標となります。工業都市や政治の中心を徹底的にやるのです。でありますから老若男女、山川草木、豚も鶏も同じにやられるのです。かくて空軍による真に徹底した殲滅戦争となります。国民はこの惨状に堪え得る鉄石の意志を鍛錬しなければなりません。また今日

の建築は危険極まりないことは周知の事実であります。国民の徹底した自覚により国家は遅くも二十年を目途とし、主要都市の根本的防空対策を断行すべきことを強く提案致します。官憲の大整理、都市に於ける中等学校以上の全廃（教育制度の根本革新）、工業の地方分散等により都市人口の大整理を行ない、必要な部分は市街の大改築を強行せねばなりません。

今日のように陸海軍などが存在しているあいだは、最後の決戦戦争にはならないのです。それ動員だ、輸送だなどと間ぬるいことではダメであります。軍艦のように太平洋をのろのろと十日も二十日もかかつては問題になりません。それかと言って今の空軍ではとてもダメです。また仮に飛行機の発達により今、ドイツがロンドンを大空襲して空中戦で戦争の決をつけ得るとしても、恐らくドイツとロシヤの間では困難であります。ロシ

ヤと日本の間もまた困難。更に太平洋をへだてたところの日本とアメリカが飛行機で決戦するのはまだまだ遠い先のことでもあります。一番遠い太平洋を挟んで空軍による決戦の行なわれる時が、人類最後の一大決勝戦の時であります。即ち無着陸で世界をぐるぐる廻れるような飛行機ができる時代であります。それから破壊の兵器も今度の欧州大戦で使っているようなものは、まだ問題になりません。もつと徹底的な、一発あたると何万人もがペチャンコにやられるところの、私どもには想像もされないような大威力のものができねはなりません。

飛行機は無着陸で世界をクルグル廻る。しかも破壊兵器は最も新鋭なもの、例えば今日戦争になって次の朝、夜が明けて見ると敵国の首府や主要都市は徹底的に破壊されている。その代り大阪も、東京も、北京も、上海も、廃墟になっておりましよ

う。すべてが吹き飛んでしまう……。それぐらいの破壊力のものであると思います。そうなると戦争は短期間に終る。それ精神総動員だ、総力戦などと騒いでいる間は最終戦争は来ない。そんななまぬるいのは持久戦争時代のこと、決戦戦争では問題にならない。この次の決戦戦争では降ると見て笠取るひまもなくやつつけてしまうのです。このような決戦兵器を創造して、この惨状にどこまでも堪え得る者が最後の優者であります。

第三章 世界の統一

西洋歴史を大観すれば、古代は国家の対立からローマが統一したのであります。それから中世はそれをキリスト教の坊さん

が引受けて、彼らが威力を失いますと、次には新しい国家が発生してまいりました。国家主義がだんだん発展して来て、フランス革命のときは一時、世界主義が唱導されました。ゲーテやナポレオンは本当に世界主義を理想としたのでありますが、結局それは目的を達しないで、国家主義の全盛時代になって第一次欧州戦争を迎えました。

欧州戦争の深刻な破壊の体験によって、再び世界主義である国際連盟の実験が行なわれることとなりました。けれども急に理想までは達しかねて、国際連盟は空文になったのです。しかし世界は欧州戦争前の国家主義全盛の時代までは逆転しないで、国家連合の時代になったと私どもは言っているのです。大体、世界は四つになるようであります。

第一はソビエト連邦。これは社会主義国家の連合体でありま

す。マルクス主義に対する世界の魅力は失われましたが、二十年来の経験に基づき、特に第二次欧州戦争に乘じ、独特の活躍をなしつつあるソ連の実力は絶対に軽視できません。第二は米州であります。合衆国を中心とし、南北アメリカを一体にしようとしつつあります。中南米の民族的関係もあり、合衆国よりもむしろヨーロッパ方面と経済上の関係が濃厚な南米の諸国に於ては、合衆国を中心とする米州の連合に反対する運動は相当強いのですけれども、しかし大勢は着々として米州の連合に進んでおります。

次にヨーロッパです。第一次欧州戦争の結果たるベルサイユ体制は、反動的で非常に無理があつたものですから遂に今日の破局を来しました。今度の戦争が起ると、「われわれは戦争に勝つたならば断じてベルサイユの体制に還すのではない。ナ

チは打倒しなければならぬ。ああいう独裁者は人類の平和のためには打倒して、われわれの方針である自由主義の信条に基づく新しいヨーロッパの連合体制を採ろう」というのが、英国の知識階級の世論だと言われております。ドイツ側はどうでありましたか。たしか去年の秋のことでした。トルコ駐在のドイツ大使フオン・パーペンがドイツに帰る途中、イスタンブールで新聞記者にドイツの戦争目的如何という質問を受けた。ナチでないのでありますから、比較的慎重な態度を採らなければならぬパーペンが、言下に「ドイツが勝ったならばヨーロッパ連盟を作るのだ」と申しました。ナチスの世界観である「運命協同体」を指導原理とするヨーロッパ連盟を作るのが、ヒットラーの理想であるだろうと思います。フランスの屈伏後に於けるドイツの態度から見ても、このことは間違いないと信ぜられます。第

一次欧州戦争が終りましてから、オーストリアのクーデンホーフが汎ヨーロッパということを唱導しまして、フランスのブリアン、ドイツのストレーゼマンという政治家も、その実現に熱意を見せたのでありますが、とうとうそこまで行かないでウヤムヤになったのです。今度の大破局に当ってヨーロッパの連合体を作るということが、再びヨーロッパ人の真剣な気持になりつつあるものと思われまゝす。

最後に東亜であります。目下、日本と支那は東洋では未だかつてなかった大戦争を継続しております。しかしこの戦争も結局は日支両国が本当に提携するための悩みなのです。日本はおぼろ気ながら近衛声明以来それを認識しております。近衛声明以来ではありません。開戦当初から聖戦と唱えられたのがそれでありまゝす。如何なる犠牲を払つても、われわれは代償を求め

るのではない、本当に日支の新しい提携の方針を確立すればそれでよろしいということは、今や日本の信念になりつつあります。明治維新後、民族国家を完成しようとして、他民族を軽視する傾向を強めたことは否定できません。台湾、朝鮮、満州、支那に於て遺憾ながら他民族の心をつかみ得なかつた最大原因は、ここにあることを深く反省するのが事変処理、昭和維新、東亜連盟結成の基礎条件であります。中華民国でも三民主義の民族主義は孫文時代のままではなく、今度の事変を契機として新しい世界の趨勢に即応したものに進展することを信ずるものであります。今日の世界的形勢に於て、科学文明に立ち遅れた東亜の諸民族が西洋人と太刀打ちしようとするならば、われわれは精神力、道義力によつて提携するのが最も重要な点でありますから、聡明な日本民族も漢民族も、もう間もなく大勢を達観し

て、心から諒解するようになるだろうと思います。

もう一つ大英帝国というブロックが現実にはあるのであります。カナダ、アフリカ、インド、オーストラリア、南洋の広い地域を支配しています。しかし私は、これは問題にならないと見ております。あれは十九世紀で終つたのです。強大な実力を有する国家がヨーロッパにしかない時代に、英国は制海権を確保してヨーロッパから植民地に行く道を独占し、更にヨーロッパの強国同士を絶えず喧嘩させて、自分の安全性を高めて世界を支配していたのです。

ところが十九世紀の末から既に大英帝国の鼎の軽重は問われつつあった。殊にドイツが大海軍の建設をはじめただけでなく、三B政策によつて陸路ベルリンからバグダッド、エジプトの方に進んで行こうとするに至つて、英国は制海権のみによつては

ドイツを屈伏させることが怪しくなつて来たのです。それが第一次欧州大戦の根本原因であります。幸いにドイツをやっつけました。数百年前、世界政策に乗り出して以来、スペイン、ポルトガル、オランダを破り、次いでナポレオンを中心とするフランスに打ち克つて、一世紀の間、世界の覇者となつていた英国は、最後にドイツ民族との決勝戦を迎えたのであります。

英国は第一次欧州戦争の勝利により、欧州諸国家の争覇戦に於ける全勝の名誉を獲得しました。しかしこの名誉を得たときが実は、おしまいであつたのです。まあ、やれやれと思つたときに東洋の一角では日本が相当なものになつてしまつた。それから合衆国が新大陸に威張つている。もう今日は英帝国の領土は日本やアメリカの自己抑制のおかげで保持しているのです。英国自身の實力によつて保持しているではありません。

カナダをはじめ南北アメリカの英国の領土は、合衆国の力に對して絶対に保持できません。シンガポール以東、オーストラリアや南洋は、英国の力をもつてしては、日本の威力に對して断じて保持できない。インドでもソビエトか日本の力が英国の力以上であります。本当に英国の、いわゆる無敵海軍をもつて確保できるのは、せいぜいアフリカの植民地だけです。大英帝国はもうベルギー、オランダなみに歴史的惰性と外交的駆引によつて、自分の領土を保持しているところの老獪極まる古狸でございます。二十世紀の前半期は英帝国の崩壊史だろうと私もも言つておつたのですが、今次欧州大戦では、驚異的に復興したドイツのために、その本幹に電撃を与えられ、大英帝国もいよいよ歴史的存在となりつつあります。

この国家連合の時代には、英帝国のような分散した状態では

いけないので、どうしても地域的に相接触したものが一つの連合体になることが、世界歴史の運命だと考えます。そして私は第一次欧州大戦以後の国家連合の時代は、この次の最終戦争のための準決勝戦時代だと観察しているのであります。先に話しました四つの集団が第二次欧州大戦以後は恐らく日、独、伊即ち東亜と欧州の連合と米州との対立となり、ソ連は巧みに両者の間に立ちつつも、大体は米州に多く傾くように判断されますが、われわれの常識から見れば結局、二つの代表的勢力となるものと考えられるのであります。どれが準決勝で優勝戦に残るかと言え、私の想像では東亜と米州だろうと思います。

人類の歴史を、学問的ではありませんが、しろうとを考えて見て見ると、アジアの西部地方に起った人類の文明が東西両方に分かれて進み、数千年後に太平洋という世界最大の海を境に

して今、顔を合わせたのです。この二つが最後の決勝戦をやる運命にあるのではないでしょうか。軍事的にも最も決勝戦争の困難なのは太平洋を挟んだ両集団であります。軍事的見地から言っても、恐らくこの二つの集団が準決勝に残るのではないかと私は考えます。

そういう見当で想像して見ますと、ソ連は非常に勉強して、自由主義から統制主義に飛躍する時代に、率先して幾多の犠牲を払い幾百万の血を流して、今でも国民に驚くべき大犠牲を強制しつつ、スターリンは全力を尽しておりますけれども、どうもこれは瀬戸物のようではないか。堅いけれども落とすと割れそうだ。スターリンに、もしものことがあるならば、内部から崩壊してしまうのではなからうか。非常にお気の毒ではありませんけれども。

それからヨーロッパの組はドイツ、イギリス、それにフランスなど、みな相当なものです。とにかく偉い民族の集まりです。しかし偉くても場所が悪い。確かに偉いけれどもそれが隣り合わせている。いくら運命協同体を作ろう、自由主義連合体を作ろうと言ったところで、考えはよろしいが、どうも喧嘩はヨーロッパが本家本元であります。その本能が何と言つても承知しない、なぐり合いを始める。因業な話で共倒れになるのじゃないか。ヒットラー統率の下に有史以来未曾有の大活躍をしている友邦ドイツに対しては、誠に失礼な言い方と思いますが、何となくこのように考えられます。ヨーロッパ諸民族は特に反省することが肝要と思います。そうなつて来ると、どうも、ぐうたらのような東亜のわれわれの組と、それから成金のようでキザだけれども若々しい米州、この二つが大体、決勝に残るので

はないか。この両者が太平洋を挟んだ人類の最後の大決戦、極端な大戦争をやります。その戦争は長くは続きません。至短期間でバタバタと片が付く。そうして天皇が世界の天皇で在らせらるべきものか、アメリカの大統領が世界を統制すべきものかという人類の最も重大な運命が決定するであろうと思うのであります。即ち東洋の王道と西洋の覇道の、いずれが世界統一の指導原理たるべきかが決定するのであります。

悠久の昔から東方道義の道統を伝持遊ばされた天皇が、間もなく東亜連盟の盟主、次いで世界の天皇と仰がれることは、われわれの堅い信仰であります。今日、特に日本人に注意して頂きたいのは、日本の国力が増進するにつれ、国民は特に謙讓の徳を守り、最大の犠牲を甘受して、東亜諸民族が心から天皇の御位置を信仰するに至ることを妨げぬよう心掛けねばならぬこ

とであります。天皇が東亜諸民族から盟主と仰がれる日こそ、即ち東亜連盟が真に完成した日であります。しかし八紘一字の御精神を拝すれば、天皇が東亜連盟の盟主、世界の天皇と仰がれるに至つても日本国は盟主ではありません。

しからば最終戦争はいつ来るか。これも、まあ占いのようなもので科学的だとは申しませんが、全くの空想でもありません。再三申しました通り、西洋の歴史を見ますと、戦争術の大きな変転の時期が、同時に一般の文化史の重大な変化の時期であります。この見地に立つて年数を考えますと、中世は約一千年くらい、それに続いてルネッサンスからフランス革命までは、まあ三百年乃至四百年。これも見方によつて色々の説もありましようが、大体こういう見当になります。フランス革命から第一次欧州戦争までは明確に百二十五年であります。千年、三百年、

百二十五年から推して、第一次欧州戦争の初めから次の最終戦争の時期までどのくらいと考えるべきであるか。千年、三百年、百二十五年の割合から言うとな度はどのくらいの見当だろうか。多くの人に聞いて見ると大体の結論は五十年内外だろうということになったのであります。これは余り短いから、なるべく長くしたい気分になり、最初は七十年と言いましたけれども結局、極く長く見て五十年内だろうと判断せざるを得なくなったのであります。

ところが第一次欧州戦争勃発の一九一四年から二十数年経過しております。今日から二十数年、まあ三十年内外で次の決戦戦争、即ち最終戦争の時期に入るだろう、ということになります。余りに短いようではありますが、考えてご覧なさい。飛行機が発明されて三十何年、本当の飛行機らしくなってから二十年

内外、しかも飛躍的進歩は、ここ数年であります。文明の急激な進歩は全く未曾有の勢いであり、今日までの常識で将来を推しはかるべきでないことを深く考えなければなりません。

今年はアメリカの旅客機が亜成層圏を飛ぶというのであります。成層圏の征服も間もなく実現することと信じます。科学の進歩から、どんな恐ろしい新兵器が出ないとも言えません。この見地から、この三十年は最大の緊張をもつて挙国一致、いな東亜数億の人々が一団となつて最大の能力を発揮しなければなりません。

この最終戦争の期間はどのくらい続くだろうか。これはまた更に空想が大きくなるのでありますが、例えば東亜と米州とで決戦をやると仮定すれば、始まったら極めて短期間で片付きます。しかし準決勝で両集団が残つたのでありますが、他にまだ

沢山の相当な国々があるので、本当に余震が鎮静して戦争がなくなり人類の前史が終るまで、即ち最終戦争の時代は二十年見当であらう。言い換えれば今から三十年内外で人類の最後の決勝戦の時期に入り、五十年以内に世界が一つになるだろう。こういうふうには私は算盤を弾いた次第であります。

第四章 昭和維新

フランス革命は持久戦争から決戦戦争、横隊戦術から散兵戦術に変わる大きな変革でありました。日本では、ちょうど明治維新時代がそれであります。第一次欧州大戦によって決戦戦争から持久戦争、散兵戦術から戦闘群の戦術に変化し、今日はフランス革命以後最大の革新時代に入り、現に革新が進行中であり

ます。即ち昭和維新であります。第二次欧州大戦で新しい時代が来たように考える人が多いのですが、私は第一次欧州大戦によつて展開された自由主義から統制主義への革新、即ち昭和維新の急進展と見るのであります。

三

昭和維新は日本だけの問題ではありません。本当に東亞の諸民族の力を総合的に發揮して、西洋文明の代表者と決勝戦を交える準備を完了するのであります。明治維新の眼目が王政復古にあつたが如く、廢藩置県にあつた如く、昭和維新の政治的眼目は東亞連盟の結成にある。滿州事變によつてその原則は発見され、今日ようやく国家の方針となろうとしています。

東亞連盟の結成を中心問題とする昭和維新のためには二つのことが大事であります（四七頁の図参照）。第一は東洋民族の新

しい道德の創造であります。ちようど、われわれが明治維新で藩侯に対する忠誠から天皇に対する忠誠に立ち返った如く、東亜連盟を結成するためには民族の鬭争、東亜諸国の対立から民族の協和、東亜の諸国家の本当の結合という新しい道德を生み出して行かなければならないのであります。その中核の問題は満州建国の精神である民族協和の実現にあります。この精神、この気持が最も大切であります。第二に、われわれの相手になるものに劣らぬ物質力を作り上げなければなりません。この立ち後れた東亜がヨーロッパまたは米州の生産力以上の生産力を持たなければならぬ。

以上の見地からすれば、現代の国策は東亜連盟の結成と生産力大拡充という二つが重要な問題をなしております。科学文明の後進者であるわれわれが、この偉大な生産力の大拡充を強行

するためには、普通の通り一遍の方式ではダメです。何とかして西洋人の及ばぬ大きな産業能力を発揮しなければならないのであります。

このごろ亀井貫一郎氏の『ナチス国防経済論』という書物を読んで非常に心を打たれました。ドイツは原料が足りない。ドイツがベルサイユ体制でいじめられて、いじめ抜かれたことが、ドイツを本当に奮発させまして、二十年この方、特に十年この方、ドイツには第二産業革命が発生していると言うのです。

私には、よくは理屈が判りませんが、要するに常温常圧の工業から高温高压工業に、電気化学工業に変遷をして来る、そうして今までの原料の束縛からまぬがれてあらゆる物が容易に生産されるに至る驚くべき第二産業革命が今、進行しているのであります。それに対する確信があつてこそ今度ドイツが大戦争

に突進できたのであらうと思います。われわれは非常に科学文明で遅れております。しかし頭は良いのです。皆さんを見ると、みな秀才のような顔をしております。断然われわれの全知能を総動員してドイツの科学の進歩、産業の発達を追い越して最新の科学、最優秀の産業力を迅速に獲得しなくてはならないのであります。これが、われわれの国策の最重要条件でなければなりません。ドイツに先んじて、むしろアメリカに先んじて、われわれの産業大革命を強行するのであります。

この産業大革命は二つの方向に作用を及ぼすと思う。一つは破壊的であります。一つは建設的であります。破壊的とは何かと言うと、われわれはもう既に三十年後の世界最後の決勝戦に向っているのです。自由主義が、今持っているピーピーの飛行機では問題にならない。自由に成層圏にも行動し得るすばらしい航

空機が速やかに造られなければなりません。また一挙に敵に殲滅的打撃を与える決戦兵器ができなければなりません。この産業革命によつて、ドイツの今度の新兵器なんか比較にならない驚くべき決戦兵器が生産されるべきで、それによつて初めて三十年後の決勝戦に必勝の態勢を整え得るのであります。ドイツが本当に戦争の準備をして数年にしかありません。皆さんに二十年の時間を与えます。十分でしょう、いや余り過ぎて困るではありませんか。

もう一つは建設方面であります。破壊も単純な破壊ではありません。最後の大決勝戦で世界の人口は半分になるかも知れないが、世界は政治的に一つになる。これは大きく見ると建設的であります。同時に産業革命の美しい建設の方面は、原料の束縛から離れて必要資材をどんどん造ることであり、われわれ

れにとって最も大事な水や空気は喧嘩の種になりません。ふんだんにありますから。水喧嘩は時々ありますが、空気喧嘩をしてなぐり合つたということは、まず無いのです。必要なものは何でも、驚くべき産業革命でどしどし造ります。持たざる国と持てる国の区別がなくなり、必要なものは何でもできることになるのです。

しかしこの大事業を貫くものは建国の精神、日本国体の精神による信仰の統一であります。政治的に世界が一つになり、思想信仰が統一され、この和やかな正しい精神生活をするための必要な物資を、喧嘩してまで争わなければならないことがなくなります。そこで真の世界の統一、即ち八紘一字が初めて実現するであろうと考える次第であります。もう病気はなくなりま

す。今の医術はまだ極めて能力が低いのですが、本当の科学の

進歩は病気をなくして不老不死の夢を実現するでしょう。

それで東亜連盟協会の「昭和維新論」には、昭和維新の目標として、約三十年内外に決勝戦が起きる予想の下に、二十年を目標にして東亜連盟の生産能力を西洋文明を代表するものに匹敵するものにしなければならいと言つて、これを経済建設の目標にしているのであります。その見地から、ある権威者が米州の二十年後の生産能力の検討をして見たところによりますと、それは驚くべき数量に達するのであります。詳しい数は記憶しておりませんが、大体の見当は鋼や油は年額数億トン、石炭に至つては数十億トンを必要とすることとなり、とても今のような地下資源を使つてやるところの文明の方式では、二十年後には完全に行き詰まります。この見地からも産業革命は間もなく不可避であり、「人類の前史將に終らんとす」という觀察は極

めて合理的であると思われるのであります。

第五章 仏教の予言

今度は少し方面を変えまして宗教上から見た見解を一つお話したいと思います。非科学的な予言への、われわれのあこがれが宗教の大きな問題であります。しかし人間は科学的判断、つまり理性のみを以てしては満足安心のできないものがあつて、そこに予言や見通しに対する強いあこがれがあるのであります。今の日本国民は、この時局をどういうふうにして解決するか、見通しが欲しいのです。予言が欲しいのです。ヒットラーが天下を取りました。それを可能にしたのはヒットラーの見通しであります。第一次欧州戦争の結果、全く行き詰まってしまつた

ドイツでは、何ぴともあの苦境を脱する着想が考えられなかつたときに、彼はベルサイユ条約を打倒して必ず民族の復興を果し得る信念を懷いたのです。大切なのはヒットラーの見通しであります。最初は狂人扱いをされましたが、その見通しが数年の間に、どうも本当でありそうだと国民が考えたときに、ヒットラーに対する信頼が生まれ、今日の状態に持つて来たのであります。私は宗教の最も大切なことは予言であると思います。

仏教、特に日蓮聖人の宗教が、予言の点から見て最も雄大で精密を極めたものであらうと考えます。空を見ると、たくさん星があります。仏教から言えは、あれがみんな一つの世界であります。その中には、どれか知れませんが西方極楽浄土というよい世界があります。もつとよいのがあるかも知れません。その世界には必ず仏様が一人おられて、その世界を支配してお

ります。その仏様には支配の年代があるのです。例えば地球では今は、お釈迦様の時代です。しかしお釈迦様は未来永劫この世界を支配するものではありません。次の後継者をちゃんと予定している。弥勒菩薩という御方が出て来るのだそうです。そうして仏様の時代を正法・しょうぼう像法・ぞうぼう末法の三つに分けます。正法と申しますのは仏の教えが最も純粹に行なわれる時代で、像法は大体それに似通った時代です。末法というのは読んで字の通りであります。それで、お釈迦様の年代は、いろいろ異論もあるそうでございますが、多く信ぜられているのは正法千年、像法千年、末法万年、合計一万二千年であります（五三頁の表参照）。

四

ところが^{だいしつぎょう}大集経というお経には更にその最初の二千五百年の詳細な予言があるのです。仏滅後（お釈迦様が亡くなってから

後）の最初の五百年が解脱げだつの時代で、仏様の教えを守ると神通力が得られて、靈界の事柄がよくわかるようになる時代であります。人間が純朴で直感力が鋭い、よい時代であります。大乘經典はお釈迦様が書いたものでない。お釈迦様が亡くなられてから最初の五百年、即ち解脱の時代にいろいろな人によつて書かれたものです。私はそれを不思議に思うのです。長い年月かかつて多くの人が書いたお経に大きな矛盾がなく、一つの体系を持つているということは、靈界に於て相通ずるものがあるから可能になったのだらうと思います。大乘仏教は仏の説でないとして大乘經を輕視する人もありますが、大乘經典が仏説でないことが却かえつて仏教の靈妙不可思議ぜんじょうを示すものと考えられます。

その次の五百年は禪定ぜんじょうの時代で、解脱の時代ほど人間が素直でなくありますから、座禪によつて悟りを開く時代であります。

以上の千年が正法です。正法千年には、仏教が冥想の国インドで普及し、インドの人間を救ったのであります。

その次の像法の最初の五百年は読誦多聞どくじゆたもんの時代であります。教学の時代であります。仏典を研究し仏教の理論を研究して安心を得ようとしたのであります。瞑想の国インドから組織の国、理論の国、支那に來たのはこの像法の初め、教学時代の初めなのです。インドで雑然と説かれた万巻のお経を、支那人の大陸的な根気によつて何回も何回も読みこなして、それに一つの体系を与えました。その最高の仕事をしたのが天台大師であります。天台大師はこの教学の時代に生まれた人です。天台大師が立てた仏教の組織は、現在でも多くの宗派の間で余り大きな異存はないのです。

その次の像法の後の五百年は多造塔寺たぞうとうじの時代、即ちお寺をた

くさん造った時代、つまり立派なお寺を建て、すばらしい仏像を本尊とし、名香を薫じ、それに綺麗な声でお経を読む。そういう仏教芸術の力によつて満足を得て行こうとした時代であります。この時代になると仏教は実行の国日本に入つて来しました。奈良朝・平安朝初期の優れた仏教芸術は、この時に生まれたのであります。

次の五百年、即ち末法最初の五百年は闘諍時代とうじょうであります。この時代になると闘争が盛んになつて普通の仏教の力はもうなくなつてしまうと、お釈迦様が予言しています。末法に入ると、叡山の坊さんは、ねじり鉢巻で山を降りて来て三井寺を焼打ちにし、遂には山王様のお神輿をかついで都に乱入するまでになりました。説教すべき坊さんが拳骨を振るう時代になつて来たのであります。予言の通りです。仏教では仏は自分の時代に現

われる、あらゆる思想を説き、その教えの広まって行く経過を予言していなければならぬのでありますが、一万年のお釈迦様が二千五百年でゴマ化しているのです。自分の教えは、この二千五百年でもうダメになつてしまふという無責任なことを言つて、大集経の予言は終つてゐるのです。

ところで、天台大師が仏教の最高經典であると言う法華経では、仏はその鬭争の時代に自分の使を出す、節刀將軍を出す、その使者はこれこれのことを履^ふみ行ない、こうこういう教えを広めて、それが末法の長い時代を指導するのだ、と予言しているのです。言い換えれば仏滅から数えて二千年前後の末法では世の中がひどく複雑になるので、今から一々言つておいても分からないから、その時になつたら自分が節刀將軍を出すから、その命令に服従しろ、と言つて、お釈迦様は亡くなつて

いるのです。末法に入ってから二百二十年ばかり過ぎたときに
仏の予言によつて日本に、しかもそれが承久の乱、即ち日本が
未曾有の国体の大難に際会したときに、お母さんの胎内に受胎
された日蓮聖人が、承久の乱に疑問を懷きまして仏道に入り、
ご自分が法華経で予言された本化上行菩薩であるという自覺に
達し、法華経に従つてその行動を律せられ、お経に述べてある
予言を全部自分の身に現わされた。そして内乱と外患があると
いう、ご自身の予言が日本の内乱と蒙古の襲来によつて的中し
たのであります。それで、その予言が実現するに従つて逐次、
ご自分の仏教上に於ける位置を明らかにし、予言の的中が全部
終つた後、みずから末法に遣わされた釈尊の使者本化上行だと
いう自覺を公表せられ、日本の大国難である弘安の役の終つた
翌年に亡くなられました。

そして日蓮聖人は将来に対する重大な予言をしております。日本を中心として世界に未曾有の大戦争が必ず起る。そのときに本化上行が再び世の中に出て来られ、本門の戒壇を日本国に建て、日本の国体を中心とする世界統一が実現するのだ。こういう予言をして亡くなられたのであります。

ここで、仏教教学について素人の身としては甚だ僭越であります。私の信ずるところを述べさせていだきたいと存じます。日蓮聖人の教義は本門の題目、本門の本尊、本門の戒壇の三つであります。題目は真つ先に現わされ、本尊は佐渡に流されて現わし、戒壇のことは身延でちよつと言われたが、時がまだ来ていない、時を待つべきであると言つて亡くなれました。と申しますのは、戒壇は日本が世界的な地位を占めるときになつて初めて必要な問題でありまして、足利時代や徳川時代には、

まだ時が来ていなかったのです。それで明治時代になりました。日本の国体が世界的意義を持ちだしたときに、昨年亡くなられた田中智学先生が生まれて来まして、日蓮聖人の宗教の組織を完成し、特に本門戒壇論、即ち日本国体論を明らかにしました。それで日蓮聖人の教え即ち仏教は、明治の御代になって田中智学先生によつて初めて全面的に、組織的に明らかにされたのであります。

ところが不思議なことには、日蓮聖人の教義が全面的に明らかになったときに大きな問題が起きて来たのです。仏教徒の中に仏滅の年代に対する疑問が出て来たのであります。これは大変なことで、日蓮聖人は末法の初めに生まれて来なければならぬのに、最近の歴史的研究では像法に生まれたらしい。そうすると日蓮聖人は予言された人でないということになります。

日蓮聖人の宗教が成り立つか否かという大問題が出現したというのに、日蓮聖人の門下は、歴史が曖昧で判らない、どれが本当か判らないと言つて、みずから慰めています。そういう信者は結構でしょう。そうでない人は信用しない。一天四海皆帰妙法は夢となります。

この重大問題を日蓮聖人の信者は曖昧にして過ごしているのです。観心本尊鈔に「当ニ知ルベシ此ノ四菩薩、折伏ヲ現ズル時ハ賢王ト成ツテ愚王ヲ誠責シ、カイシヤク 摂受ヲ行ズル時ハ僧ト成ツテ正法ヲ弘持スグジ」とあります。この二回の出現は経文の示すところによるも、共に末法の最初の五百年であると考えられます。そして摂受を行ずる場合の闘争は主として仏教内の争いと解すべきであります。明治の時代までは仏教徒全部が、日蓮聖人の生まれた時代は末法の初めの五百年だと信じていました。その時

代に日蓮聖人が、いまだ像法だと言ったって通用しない。末法の初めとして行動されたのは当然であります。仏教徒が信じていた年代の計算によりますと、末法の最初の五百年は大体、叡山の坊さんが乱暴し始めた頃から信長の頃までであります。信長が法華や門徒を虐殺しましたが、あの時代は坊さん連中が暴力を揮った最後ですから、大体、仏の予言が的中したわけであります。

折伏を現ずる場合の闘争は、世界の全面的戦争であるべきだと思います。この問題に関連して、今は仏滅後何年であるかを考えて見なければなりません。歴史学者の間ではむずかしい議論もあるらしいのですが、まず常識的に信じられている仏滅後二千四百三十年見当という見解をとって見ます。そうすると末法の初めは、西洋人がアメリカを発見しインドにやって来たと

き、即ち東西両文明の争いが始まりかけたときです。その後、東西両文明の争いがだんだん深刻化して、正にそれが最後の世界的決勝戦になろうとしているのであります。

明治の御世、即ち日蓮聖人の教義の全部が現われ了ったときに、初めて年代の疑問が起きて来たことは、仏様の神通力だろうと信じます。末法の最初の五百年を巧みに二つに使い分けをされたので、世界の統一は本当の歴史上の仏滅後二千五百年に終了すべきものであらうと私は信ずるのであります。そうなつて参りますと、仏教の考える世界統一までは約六、七十年を残されてゐるわけであります。私は戦争の方では今から五十年と申しましたが、不思議に大体、似たことになっております。あれだけ予言を重んじた日蓮聖人が、世界の大戦争があつて世界は統一され本門戒壇が建つという予言をしておられるのに、それ

が何時来るといふ予言はやっていないのです。それでは無責任と申さねばなりません。けれども、これは予言の必要がなかったのです。ちゃんと判っているのです。仏の神通力によって現われるときを待っていたのです。そうでなかったら、日蓮聖人は何時だといふ予言をしておられるべきものだと思ふのであります。

この見解に対して法華の専門家は、それは素人のいい加減なことじつげだと言われるだろうかと思ひますが、私の最も力強く感ずることは、日蓮聖人以後の第一人老である田中智学先生が、大正七年のある講演で「一天四海皆帰妙法は四十八年間に成就し得るといふ算盤を弾いている」（師子王全集・教義篇第一輯三六七頁）と述べていることです。大正八年から四十八年くらいで世界が統一されると言っております。どういふ算盤を弾かれ

たか述べてありませんが、天台大師が日蓮聖人の教えを準備された如く、田中先生は時来たつて日蓮聖人の教義を全面的に発表した——即ち日蓮聖人の教えを完成したところの予定された人でありますから、この一語は非常な力を持っていると信じます。

また日蓮聖人は、インドから渡来して来た日本の仏法はインドに帰って行き、永く末法の闇を照らすべきものだと言言しています。日本山妙法寺の藤井行勝師がこの予言を実現すべくインドに行つて太鼓をたたいているところに支那事変が勃発しました。英国の宣伝が盛んで、日本が苦戦して危いという印象をインド人が受けたのです。そこで藤井行勝師と親交のあつたインドの「耶羅陀耶」という坊さんが「日本が負けると大変だ。自分が感得している仏舍利があるから、それを日本に納めて貰

いたい」と行勝師に頼みました。行勝師は一昨年帰つて来てそれを陸海軍に納めたのであります。行勝師の話によると、セイロン島の仏教徒は、やはり仏滅後二千五百年に仏教国の王者によつて世界が統一されるといふ予言を堅く信じているそうで、その年代はセイロンの計算では間もなく来るのであります。

第六章 結 び

今までお話して来たことを総合的に考えますと、軍事的に見ましても、政治史の大勢から見ましても、また科学、産業の進歩から見ましても、信仰の上から見ましても、人類の前史は將に終ろうとしていることは確實であり、その年代は数十年後に切迫していると見なければならぬと思うのであります。今は

人類の歴史で空前絶後の重大な時期であります。

世の中には、この支那事変を非常時と思つて、これが終れば和やかな時代が来ると考えている人が今日もまだ相当にあるようです。そんな小つぽけな変革ではありません。昔は革命と革命との間には相当に長い非非常時、即ち常時があつたのです。フランス革命から第一次欧州大戦の間も、一時はかなり世の中が和やかでありました。第一次欧州大戦以後の革命時は、まだ安定しておりません。しかしこの革命が終ると引きつづき次の大変局、即ち人類の最後の大決勝戦が来る。今日の非常時は次の超非常時と隣り合わせであります。今後数十年の間は人類の歴史が根本的に変化するところの最も重大な時期であります。この事を国民が認識すれば、余りむずかしい方法を用いなくても自然に精神総動員はできると私は考えます。東亜が仮に準決

勝に残り得るとして誰と戦うか。私は先に米州じゃないかと想像しました。しかし、よく皆さんに了解して戴きたいことがあるのです。今は国と国との戦争は多く自分の国の利益のために戦うものと思っております。今日、日本とアメリカは睨み合いであります。あるいは戦争になるかも知れません。かれらから見れば蘭印を日本に独占されては困ると考え、日本から言えば何だアメリカは自分勝手のモンロー主義を振り廻しながら東亜の安定に口を入れるとは怪しからぬというわけで、多くは利害関係の戦争でありましょう。私はそんな戦争を、かれこれ言っているではありません。世界の決勝戦というのは、そんな利害だけの問題ではないのです。世界人類の本当に長い間の共通のあこがれであつた世界の統一、永遠の平和を達成するには、なるべく戦争などという乱暴な、残忍なことをしないで、やいば刃にちぬ衅

らずして、そういう時代の招来されることを熱望するのであり、それが、われわれの日夜の祈りであります。しかしどうも遺憾ながら人間は、あまりに不完全です。理屈のやり合いや道徳談義だけでは、この大事業は、やれないらしいのです。世界に残された最後の選手権を持つ者が、最も真面目に最も真剣に戦つて、その勝負によつて初めて世界統一の指導原理が確立されるでしょう。だから数十年後に迎えなければならぬと私たちが考えている戦争は、全人類の永遠の平和を実現するための、やむを得ない大犠牲であります。

われわれが仮にヨーロッパの組とか、あるいは米州の組と決勝戦をやることになつても、断じて、かれらを憎み、かれらと利害を争うのではありません。恐るべき惨虐行為が行なわれるのですが、根本の精神は武道大会に両方の選士が出て来て一生懸

命にやるのと同じことであります。人類文明の帰着点は、われわれが全能力を発揮して正しく堂々と争うことによつて、神の審判を受けるのです。

東洋人、特に日本人としては絶えずこの氣持を正しく持ち、いやしくも敵を侮辱するとか、敵を憎むとかいうことは絶対にやるべからざること、敵を十分に尊敬し敬意を持つて堂々と戦わなければなりません。

ある人がこう言うのです。君の言うことは本当らしい、本当らしいから余り言いふらすな、向こうが準備するからコッソリやれと。これでは東亜の男子、日本男子ではない。東方道義ではない。断じて皇道ではありません。よろしい、準備をさせよう、向こうも十分に準備をやれ、こつちも準備をやり、堂々たる戦いをやらなければならぬ。こう思うのであります。

しかし断わって置かなければならないのは、こういう時代の大きな意義を一日でも早く達観し得る聡明な民族、聡明な国民が結局、世界の優者たるべき本質を持っているということなのです。その見地から私は、昭和維新の大目的を達成するために、この大きな時代の精神を一日も速やかに全日本国民と全東亜民族に了解させることが、私たちの最も大事な仕事であると確信するものであります。

第二部 「最終戦争論」に関する質疑回答

昭和十六年十一

月九日於酒田脱

稿

第一問 世界の統一が戦争によってなされるということとは人類に対する冒涇であり、人類は戦争によらないで絶対平和の世界を建設し得なければならぬと思う。

答 生存競争と相互扶助とは共に人類の本能であり、正義に対するあこがれと力に対する依頼は、われらの心の中に併存する。昔の坊さんは宗論に負ければ袈裟をぬいで相手に捧げ、帰伏改宗したものと聞くが、今日の人間には思い及ばぬことであ

る。純学術的問題でさえ、理論闘争で解決し難い場面を時々見聞する。絶大な支配力のない限り、政治経済等に関する現実問題は、単なる道義観や理論のみで争いを決することは通常、至難である。世界統一の如き人類の最大問題の解決は結局、人類に与えられた、あらゆる力を集中した真剣な闘争の結果、神の審判を受ける外に途はない。誠に悲しむべきことではあるが、何とも致し方がない。

「鋒刃の威を仮らずして、坐ら^{いなが}天下を平げん」と考えられた神

武天皇は、遂に度々武力を御用い遊ばされ、「よもの海みなはらから」と仰せられた明治天皇は、遂に日清、日露の大戦を御決行遊ばされたのである。釈尊が、正法を護ることは単なる理論の争いでは不可能であり、身を以て、武器を執つて当らねばならぬと説いているのは、人類の本性に徹した教えと言わねばな

らない。一人二人三人百人千人と次第に唱え伝えて、遂に一天四海皆帰妙法の理想を實現すべく力説した日蓮聖人も、信仰の統一は結局、前代未聞の大闘争によつてのみ實現することを予言している。

刃に衅やいばちぬらずして世界を統一することは固より、われらの心から熱望するところであるが（六二頁）、悲しい哉、それは恐らく不可能であろう。もし幸い可能であるとすれば、それがために最高道義の護持者であらせられる天皇が、絶対最強の武力を御掌握遊ばされねばならぬ。文明の進歩とともに世は平和的にならないで闘争がますます盛んになりつつある。最終戦争の近い今日、常にこれに対する必勝の信念の下に、あらゆる準備に精進しなければならぬ。

最終戦争によつて世界は統一される。しかし最終戦争は、ど

こまでも統一に入るための荒仕事であつて、八紘一宇の発展と完成は武力によらず、正しい平和的手段によるべきである。

第二問 今日まで戦争が絶えなかつたように、人類の闘争心がなくならない限り、戦争もまた絶対になくならないのではな
いか。

答 しかり、人類の歴史あつて以来、戦争は絶えたことがない。しかし今日以後もまた、しかりと断ずるは過早である。明治維新までは、日本国内に於て戦争がなくなると誰が考えたであろうか。文明、特に交通の急速な発達と兵器の大進歩によつて、今日では日本国内に於ては、戦争の発生は全く問題とならなくなつた(三五頁)。文明の進歩により戦争力が増大し、その威力圏の拡大に伴つて政治的統一の範囲も広がつて来たのであるが、世界の一地方を根拠とする武力が全世界の至るところ

に対し迅速にその威力を発揮し、抵抗するものを迅速に屈伏し得るようになれば、世界は自然に統一されることとなる（三五頁）。

更に問題になるのは、たとい未曾有の大戦争があつて世界が一度は統一されても、間もなくその支配力に反抗する力が生じて戦争が起り、再び国家の対立を生むのではなからうかということである。しかしそれは、最終戦争が行なわれ得る文明の超躍的大進歩に考え及ばず今日の文明を基準とした常識判断に過ぎない。瞬間に敵国の中心地を潰滅する如き大威力（三七頁）は、戦争の惨害を極端ならしめて、人類が戦争を回避するに大きな力となるのみならず、かくの如き大威力の文明は一方、世界の交通状態を一変させる。数時間で世界の一周は可能となり、地球の広さは今日の日本よりも狭いように感ずる時代であるこ

とを考えるべきである。人類は自然に、心から国家の対立と戦争の愚を悟る。且つ最終戦争により思想、信仰の統一を来たし、文明の進歩は生活資材を充足し、戦争までして物資の取得を争う時代は過ぎ去り人類は、いつの間にやら戦争を考えなくなるであろう（四九―五一頁）。

人類の闘争心は、ここ数十年の間はもちろん、人類のある限り恐らくなくならないであろう。闘争心は一面、文明発展の原動力である。しかし最終戦争以後は、その闘争心を国家間の武力闘争に用いようとする本能的衝動は自然に解消し、他の競争、即ち平和裡に、より高い文明を建設する競争に転換するのである。現にわれわれが子供の時分は、大人の喧嘩を街頭で見ることが決して稀ではなかったが、今日ではほとんど見るべきでない。農民は品種の改善や増産に、工業者はすぐれた製品の

製作に、学者は新しい発見・発明に等々、各々その職域に応じ今日以上の熱を以て努力し、闘争的本能を満足させるのである。

以上はしかし理論的考察で半ば空想に過ぎない。しかし、日本国体を信仰するものには戦争の絶滅は確乎たる信念でなければならぬ。八紘一字とは戦争絶滅の姿である。口に八紘一字を唱え心に戦争の不滅を信ずるものがあるならば、真に憐むべき矛盾である。日本主義が勃興し、日本国体の神聖が強調される今日、未だに真に八紘一字の大理想を信仰し得ないものが少なくないのは誠に痛嘆に堪えない。

第三問 最終戦争が遠い将来には起るかも知れないが、僅々三十年内外に起るとは信じられない。

答 近い将来に最終戦争の来ることは私の確信である（三三―三五頁）。最終戦争が主として東亜と米州との間に行なわれ

るであろうということは私の想像である（四四頁）。最終戦争が三十年内外に起るであろうということは占いに過ぎない（四五頁）。私も常識を以てしては、三十年内外に起るとは、なかなか考えられない。

しかし最終戦争は実に人類歴史の最大関節であり、このとき、世界に超常識的大変化が起るのである。今日までの戦争は主として地上、水上の戦いであつた。障害の多い地上戦争の発達が急速に行かないことは常識で考えられるが、それが空中に飛躍するときは、真に驚天動地の大変化を生ずるのであろう。空中への飛躍は人類数千年のあこがれであつた。釈尊が法華経で本門の中心問題、即ち超常識の大法門を説こうとしたとき、インドリようじゆせん靈鷲山上の説教場を空中に移したのは、真に驚嘆すべき着想ではないか。通達無碍の空中への飛躍は、地上にあくせくする人々

の想像に絶するものがある。地上戦争の常識では、この次の戦争の大変化は容易に判断し難い。

戦争術変化の年数が千年→三百年→百二十五年と逐次短縮して来たことから、この次の変化が恐らく五十年内外に来るであろうとの推断は、固より甚だ粗雑なものであるが、全くのデタラメとは言えない。常識的には今後三十年内外は余りに短いようであるが、次の大変化は、われらの常識に超越するものであることを敬虔な気持で考えるとき、私は「三十年内外」を否定することはよろしくないと信ずるものである。もし三十年内外に最終戦争が来ないで、五十年、七十年、百年後に延びることがあつても、国家にとって少しも損害にならないのであるが、仮に三十年後には来ないと考えていたのに実際に来たならば、容易ならぬこととなるのである。

私は技術・科学の急速な進歩、産業革命の状態、仏教の予言等から、三十年後の最終戦争は必ずしも突飛とは言えないことを詳論した。更に、第一次欧州大戦までは世界が数十の政治的単位に分かれていたのがその後、急速に国家連合の時代に突入して、今日では四つの政治的単位になろうとする傾向が顕著であり、見方によつては、世界は既に自由主義と枢軸の二大陣営に対立しようとしている。準決勝の時期がそろそろ終ろうとするこの急テンポを、どう見るか。

また統制主義を人類文化の最高方式の如く思う人も少なくないうであるが、私はそれには賛成ができない。元来、統制主義は余りに窮屈で過度の緊張を要求し、安全弁を欠く結果となる。ソ連に於ける毎度の肅清工作はもちろん、ドイツに於ける突撃隊長の銃殺、副総統の脱走等の事件も、その傾向を示すも

のと見るべきである。統制主義の時代は、決して永く継続すべきものではないと確信する。今日の世界の大勢は各国をして、その最高能率を発揮して戦争に備えるために、否が応でも、また安全性を犠牲にしても、統制主義にならざるを得ざらしめるのである。だから私は、統制主義は武道選手の決勝戦前の合宿のようなものだと思う。

合宿生活は能率を挙げる最良の方法であるけれども、年中合宿して緊張したら、うんざりせざるを得ない。決戦直前の短期間にのみ行なわれるべきものである。

統制主義は、人類が本能的に最終戦争近しと無意識のうちに直観して、それに対する合宿生活に入るための産物である。最終戦争までの数十年は合宿生活が継続するであろう。この点からも、最終戦争はわれらの眼前近く迫りつつあるものと推断す

る。

第四問 東洋文明は王道であり、西洋文明は霸道であると言
うが、その説明をしてほしい。

答 かくの如き問題はその道の学者に教えを乞うべきで、私
如きものが回答するのは僭越極まる次第であるが、私の尊敬す
る白柳秀湖、清水芳太郎両氏の意見を拝借して、若干の意見を
述べる。

文明の性格は氣候風土の影響を受けることが極めて大きく、
東西よりも南北に大きな差異を生ずる。われら北種は東西を通
じて、おしなべて朝日を礼拝するのに、炎熱に苦しめられてい
る南種は同じく太陽を神聖視しながらも、夕日に跪伏する。回
教徒が夕日を礼拝するように仏教徒は夕日にあこがれ、西方に
金色の寂光が降りそそぐ弥陀の浄土があると考えている。日蓮

聖人が朝日を拝して立宗したのは、真の日本仏教が成立したことを意味する。

熱帯では衣食住に心を労することなく、殊に支配階級は奴隷経済の上に抽象的な形而上の瞑想にふけり、宗教の発達を來たした。いわゆる三大宗教はみな亜熱帯に生まれたのである。半面、南種は安易な生活に慣れて社会制度は全く固定し、インドの如きは今なお四千年前の制度を固持して政治的に無力となり、少数の英人の支配に屈伏せざるを得ない状態となった。

北種は元来、住みよい熱帯や亜熱帯から追い出された劣等種であつたろうが、逆境と寒冷な風土に鍛錬されて、自然に科学的方面の発達を來たした。また農業に発した強い国家意義と狩猟生活の生んだ寄合評定によつて、強大な政治力が養われ今日、世界に雄飛している民族は、すべて北種に属する。南種は専制

的で議会の運用を巧みに行ない得ない。社会制度、政治組織の改革は、北種の特徴である。アジアの北種を主体とする日本民族の歴史と、アジアの南種に属する漢民族を主体とする支那の歴史に、相当大的な相違のあるのも当然である。但し漢民族は南種と言つても黄河沿岸はもちろんのこと、揚子江沿岸でも亜熱帯とは言われず、ヒマラヤ以南の南種に比べては、多分に北種に近い性格をもっている。

清水氏は『日本真体制論』に次の如く述べている。

「……寒帯文明が世界を支配はしたけれども、決して寒帯民族そのものも真の幸福が得られなかった。力の強いものが力の弱いものを搾取するという力の科学の上に立つた世界は、人類の幸福をもたらさなかった。弱いものばかりでなくて、強いものも同時に不幸であつた。本当を言うと、熱帯文明の方が宗教的、芸術

的であつて、人間の目的生活にそうものである。寒帯文明は結局、人間の経済生活に役立つものであつて、これは人間にとって手段生活である。寒帯文明が中心となつてでき上がった人間の生活状態というものは、やはり主客転倒したものである。……

この二つのものは別々であつてよいかと言うに、これは一つにならなければならぬものである。インド人や支那人は、実に深遠な精神文化を生み出した民族であるが今日、寒帯民族のもつ機械文明を模倣し成長せしめることに成功していない。白色人種は、物質文化の行き詰まりを一面に於て唱えながらも、これを刷新せんとする彼らの案は、依然として寒帯文明の範疇を出ることができない。……

とにかく、日本民族は明白に、その特色をもっているのである。この熱帯文明と寒帯文明とが、日本民族によつて融合統一

され、次の新しい人間の生活様式が創造されなければならない。どうも日本民族において、他にこの二大文明の融合によつて第三文明を創造しうる能力をもつたものが、外にないと思われる。つまり、寒帯文明を手段として、東洋の精神文化を生かしうる社会の創造である。西洋の機械文明が、東洋の精神文明の手段となるときに、初めて西洋物質文化に意味を生じ、東洋精神文化も、初めて真の発達を遂げうるのである。」

寒帯文明に徹底した物質文明偏重の西洋文明は、即ち霸道文明である。これに対し熱帯文明が王道文明であるかと言えば、そうではない。王道は中庸を得て、偏してはならぬ。道を守る人生の目的を堅持して、その目的達成のための手段として、物質文明を十分に生かさねばならない。即ち、王道文明は清水氏の第三文明でなければならぬ。

同じ北種でも、アジアの北種とヨーロッパの北種には、その文明に大きな相異を来たしている。日本民族の主体は、もちろん北種である。科学的能力は白人種の最優秀者に優るとも劣らないのみならず、皇祖皇宗によつて簡明に力強く宣明せられた建国の大理想は、民族不動の信仰として、われらの血に流れている。しかも適度に円満に南種の血を混じて熱帯文明の美しさも十分に摂取し、その文明を莊嚴にしたのである。古代支那の文明は今日の研究では、南種に属する漢人種のものではなく、北種によつて創められたものらしいと言われているが、その王道思想は正しく日本国体の説明とすべきである。この王道思想が漢人種によつて唱導されたものでないにせよ、漢民族はよくこの思想を容れ、それを堅持して今日に及んだ。今日の漢民族は多くの北種の血を混じて南北両文明を協調するに適する素

質をもち、指導よろしきを得れば、十分に科学文明を活用し得る能力を備えていると信ずる。

西洋北種は古代に於て果して、東洋諸民族の如き大理想を明確にもつていたであろうか。仮にあつたにせよ、物質文明の力に圧倒され、かれらの信念として今日まで伝えられるだけの力はなかつたのである。ヒットラーは古代ゲルマン民族の思想信仰の復活に熱意を有すると聞くが、ヒットラーの力を以てしても、民族の血の中に真生命として再生せしめることは至難であろう。ヨーロッパの北種はフランスを除けば、イギリスの如き地理的關係にあつても南種の混血は比較的少なく、ドイツその他の北欧の諸民族は、ほとんど北種間のみの混血で、現実主義に偏する傾向が顕著である。殊にヨーロッパでは強力な国家が狭小な地域に密集して永い間、深刻な闘争をくり返し、科学文

明の急速な進歩に大なる寄与をなしたけれども、その覇道的弊害もますます増大して今日、社会不安の原因をなし、清水氏の主張の如く、これも根本的に刷新することが不可能である。

西洋文明は既に覇道に徹底して、みずから行き詰まりつつある。王道文明は東亜諸民族の自覚復興と西洋科学文明の摂取活用により、日本国体を中心として勃興しつつある。人類が心から現人神あらひとがみの信仰に悟入したところに、王道文明は初めてその真価を発揮する。

最終戦争即ち王道・覇道の決勝戦は結局、天皇を信仰するものと然らざるものの決勝戦であり、具体的には天皇が世界の天皇とならせられるか、西洋の大統領が世界の指導者となるかを決定するところの、人類歴史の中で空前絶後の大事件である。

第五問 最終戦争が数十年後に起るとすれば、その原因は経

済の争いで、観念的な王道・覇道の決勝戦とは思われない。

答 戦争の原因は、その時代の人類の最も深い関心を有するものに存する。昔は単純な人種間の戦争や、宗教戦争などが行なわれ、封建時代には土地の争奪が戦争の最大動機であった。土地の争奪は経済問題が最も大きな働きをなしている。近代の進歩した経済は、社会の関心を経済上の利害に集中させた結果、戦争の動機は経済以外に考えられない現状である。

自由主義時代は経済が政治を支配するに至ったのであるが、統制主義時代は政治が経済を支配せねばならぬ。世の中には今や大なる変化を生じつつある。しかし僅々三十年後にはなお、社会の最大関心事が依然として経済であり、主義が戦争の最大原因となるとは考えられない。けれども最終戦争を可能にする文明の飛躍的進歩は、半面に於て生活資材の充足を来たし、次

第に今日のような経済至上の時代が解消するであろう。経済はどこまでも人生の目的ではなく、手段に過ぎない。人類が経済の束縛からまぬがれ得るに従つて、その最大関心は再び精神的方面に向けられ、戦争も利害の争いから主義の争いに変化するのは、文明進化の必然的方向であると信ずる。即ち最終戦争時代は、戦争の最大原因が既に主義となる時代に入りつつあるべきはずである。

文明の実質が大変化をしても、人類の考えは容易にそれに追従できないために、数十年後の最終戦争に於ける最初の動機は、依然として経済に関する問題であろう。しかし戦争の進行中に必ず急速に戦争目的に大変化を来たして、主義の争いとなり、結局は王覇両文明の雌雄を決することとなるものと信ずる。日蓮聖人が前代未聞の大闘争につき、最初は利益のために戦いつ

つも争いの深刻化するに従い、遂に頼るべきものは正法のみであることを頓悟して、急速に信仰の統一を来すべきことを説いているのは、最終戦争の本質をよく示すものである。

第一次欧州大戦以来、大国難を突破した国が逐次、自由主義から統制主義への社会的革命を実行した。日本も満州事変を契機として、この革新即ち昭和維新期に入ったのであるが、多くの知識人は依然として内心では自由主義にあこがれ、また口に自由主義を非難する人々も多くは自由主義的に行動していた。しかるに支那事変の進展中に、高度国防国家建設は、たちまち国民の常識となつてしまった。冷静に顧みれば、平時には全く思い及ばぬ驚異的变化が、何の不思議もなく行なわれてしまったのである。最終戦争の時代をおおむね二十年内外と空想したが（四六頁）、この期間に人類の思想と生活に起る変化は、全く

想像の及ばぬものがある。経済中心の戦争が徹底せる主義の争いに變化するとの判断は、決して突飛なものとは言われない。

第六問 数十年後に起る最終戦争によつて世界の政治的統一が一挙に完成するとは考えられない。

答 最終戦争は人類歴史の最大関節であり、それによつて世界統一即ち八紘一字実現の第一歩に入るのである。しかし真に第一歩であつて、八紘一字の完成はそれからの人類の永い精進によらねばならない。この点で質問者の意見と私の意見は大体一致していると信ずるが、それに関する予想を述べて見ることにする。

諸民族が長きは数千年の歴史によつてその文化を高め、人類は近時急速にその共通のあこがれであつた大統一への歩みを進めつつある。明治維新は日本の維新であつたが、昭和維新は正

しく東亜の維新であり、昭和十三年十二月二十六日の第七十四回帝国議会開院式の勅語には「東亜ノ新秩序ヲ建設シテ」と仰せられた。更にわれらは数十年後に近迫し来たつた最終戦争が、世界の維新即ち八紘一字への関門突破であると信ずる。

明治維新は明治初年に行なわれ、明治十年の戦争によつて概成し、その後の数十年の歴史によつて真に統一した近代民族国家としての日本が完成したのである。昭和維新の眼目である東亜の新秩序即ち東亜の大同は、満州事変に端を發し支那事変で急進展をなしつつあるが、その完成には更に日本民族はもちろん、東亜諸民族の正しく深い認識と絶大な努力を要する。

今日われらは、まず東亜連盟の結成を主張している。東亜連盟は満州建国に端を發したのであり当時、在満日本人には一挙に天皇の下に東亜連邦の成立を希望するものも多かつたが、漢

民族は未だ時機熟せずとして、日滿華の協議、協同による東亞連盟で満足すべしと主張し、遂に東亞新秩序の第一段階として採用されるに至った。

東亞の新秩序は、最終戦争に於て必勝を期するため、なるべく強度の統一が希望される。東亞諸民族の疑心暗鬼が除去されたならば、一日も速やかに少なくとも東亞連邦に躍進して、東亞の総合的威力の増進を計らねばならぬ。更に各民族間の信頼が徹底したならば、東亞の最大能力を発揮するために諸国家は、みずから進んで国境を撤廃し、その完全な合同を熱望し、東亞大同国家の成立即ち大日本の東亞大拡大が実現せられることは疑いない。特に日本人が「よもの海みなはらから」「西ひがしむつみかわして栄ゆかん」との大御心のままに諸民族に対するならば、東亞連邦などを經由することなく、一挙に東亞大同国家

の成立に飛躍するのではなからうか。

われらは、天皇を信仰し心から皇運を扶翼ふよくし奉るものは皆われらの同胞であり、全く平等で天皇に仕え奉るべきものと信ずる。東亜連盟の初期に於て、諸国家が未だ天皇をその盟主と仰ぎ奉るに至らない間は、独り日本のみが天皇を戴いているのであるから、日本国は連盟の中核的存在即ち指導国家とならなければならぬ。しかしそれは諸国家と平等に提携し、われらの徳と力により諸国家の自然推挙によるべきであり、紛争の最中に、みずから強権的にこれを主張するのは、皇道の精神に合しないことを強調する。日本の実力は東亜諸民族の認めるところである。日本が真に大御心を奉じ、謙譲にして東亜のために進んで最大の犠牲を払うならば、東亜の諸国家から指導者と仰がれる日は、案外急速に来ることを疑わない。日露戦争当時、既

にアジアの国々は日本を「アジアの盟主」と呼んだではないか。東亜連盟は東亜新秩序の初歩である。しかも指導国家と自称せず、まず全く平等の立場において連盟を結成せんとするわれらの主張は世人から、ややもすれば軟弱と非難される。しかし、確かにいわゆる強硬ではない。しかし八紘一字の大理想必成を信ずるわれらは絶対の大安心に立つて、現実其自然の順序よき発展によるべきことを忘れず、最も着実な実行を期するものである。下手に出れば相手はつけあがるなどと恐れる人々は、八紘一字を口にする資格がない。

最終戦争と言え、いかにも突飛な荒唐無稽の放談のように考え、また最終戦争論に賛意を表するものには、ややもすればこの戦争によつて人類は直ちに黄金世界を造るよう考える人々が多いらしい。共に正鵠を得ていない。最終戦争は近く必ず行

なわれ、人類歴史の最大関節であるが、しかしそれを体験する人々は案外それほど激変と思わず、この空前絶後の大変動期を過ごすことは、過去の革命時代と大差ないのではなからうか。

最終戦争によつて世界は統一する。もちろん初期には幾多の余震をまぬがれないであろうが、文明の進歩は案外早くその安定を得て、武力をもつて国家間に行なわれた闘争心は、人類の新しい総合的大文明建設の原動力に転換せられ、八紘一宇の完成に邁進するであろう。日本の有する天才の一人である清水芳太郎氏は『日本真体制論』の中に、その文明の発展について種々面白い空想を述べている。

植物の一枚の葉の作用の秘密をつかめたならば、試験管の中で、われわれの食物がほとんど作られるようになり、一定の土地から今の恐らく千五百倍ぐらいの食料が製造できる。また豚

や鶏を飼う代りに、繁殖に最も簡単なバクテリアを養い、牛肉のような味のするバクテリアや、鶏肉の味のバクテリア等を発見して、極めて簡単に蛋白質の食物が得られるようになる。これは決して夢物語ではなく、既に第一次欧州大戦でドイツはバクテリアを食べたのである。

次に動力は貴重な石炭は使わなくとも、地下に放熱物体——ラジウムとかウラニウム——があつて、地殻が熱くなっているのであるから、その放熱物体が地下から掘り出されるならば、無限の動力が得られるし、また成層圈の上には非常に多くの空中電気があるから、これを地上にもつて来る方法が発見できれば、無限の電気を得ることになる。なお成層圈の上の方には地上から発散する水素が充満している。その水素に酸素を加えると、これがすばらしい動力資源になる。従つて飛行機でそこま

で上昇し、その水素を吸い込んでこれを動力とすれば、どこまでも飛べる。そして降りるときには、その水素を吸い込んで来て、次に飛び上がるときにこれを使用する。このようにして世界をぐるぐる飛び廻ることは極めて容易である。

この時代になると不老不死の妙法が発見される。なぜ人間が死ぬかと言えば、老廃物がたまつて、その中毒によるのである。従つてその老廃物をどしどし排除する方法が採られるならば生命は、ほとんど無限に続く。現にバクテリアを枯草の煮汁の中に入れると、極めて元気に猛烈な繁殖をつづける。暫くして自分の排出する老廃物の中毒で次第に繁殖力が衰えてゆくが、また新しい枯草の汁の中に持つてゆくと再び活気づいて来る。かくして次々と煮汁を新しくしてゆけば何時までも生きてゐる。即ち不老不死である。

しからば人間が不老不死になると、人口が非常に多くなり世界に充満して困るではないかということを心配する人があるかも知れない。しかしその心配はない。自然の妙は不思議なもので、サンガー夫人をひっぱって来る必要がない。人間は、ちょうどよい工合に一人が千年に一人ぐらい子供を産むことになる。これは接木や挿木をくりかえして来た蜜柑には種子がなくなると同じである。早く死ぬから頻繁に子供を産むが、不老不死になると、人間は淡々として神様に近い生活をするに至るであろう。

また時間というものは結局温度である。人を殺さないで温度を変える。物を壊さないで温度を上げることができれば、十年を一年にちぢめることは、たやすいことである。逆に温度を下げて零下二百七十三度という絶対温度にすると、万物ことごと

く活動は止まってしまう。そうなると浦島太郎も夢ではない。真に自由自在の世界となる。

更に進んで突然変異を人工的に起すことによつて、すばらしい大飛躍が考えられる。即ち人類は最終戦争後、次第に驚くべき総合的文明に入り、そして遂には、みずから作る突然変異によつて、今の人類以上のものが、この世に生まれて来るのである。仏教ではそれを弥勒菩薩みろくの時代というのである。

清水氏の空想の如き時代となれば、人類がその闘争本能を戦争に求めることは到底考えることができない。要は質問者の言う如く、世界の政治的統一は決して一挙に行なわれるのではなく、人類の文明は、すべて不断の発展を遂げるのである。しかし文明の発展には時に急湍がある。われらは最終戦争が人類歴史上の最大急湍であることを確認し、今からその突破にあらゆ

る準備を急がねばならぬ。

第七問 戦争の発達を東洋、特に日本戦史によらず、単に西洋戦史によるのは公正でないと思う。

答 「戦争史大観の由来記」に白状してある通り、私の軍事学に関する知識は極めて狭く、専門的にやや研究したのは、フランス革命を中心とする西洋戦史の一部分に過ぎない（一四四頁）。これが最終戦争論を西洋戦史によった第一の原因である。有志の方々が東西古今の戦争史により、更に広く総合的に研究されることを切望する。必ず私と同一結論に達することを信ずるものである。

過去数百年は白人の世界征服史であり今日、全世界が白人文明の下にひれ伏している。その最大原因は白人の獲得した優れた戦争力である。しかし戦争は断じて人生や国家の目的ではな

く、その手段にすぎない。正しい根本的な戦争観は西洋に存せずして、われらが所有する。

三種の神器の剣は皇国武力の意義をお示し遊ばされる。国体を擁護し皇運を扶翼ふよくし奉るための武力の発動が皇国の戦争である。

最も平和的であると信ぜられる仏教に於ても、涅槃經ねはんに「善男子正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せずして刀劍弓箭鉾きゅうせんぼうさくを持すべし」「五戒を受持せん者あらば名づけて大乘の人となすことを得ず。五戒を受けざれども正法を護るをもつて乃ち大乘と名づく。正法を護る者は正に刀劍器仗を執持すべし」と説かれてあり、日蓮聖人は「兵法劍形の大事もこの妙法より出たり」と断じている。

右のような考え方が西洋にあるかないかは無学の私は知らない

いが、よしあつたにせよ、今日のかれらに対しては恐らく無力であろう。戦争の本義は、どこまでも王道文明の指南にまつべきである。しかし戦争の実行方法は主として力の問題であり、霸道文明の発達した西洋が本場となつたのは当然である。

日本の戦争は主として国内の戦争であり、民族戦争の如き深刻さを欠いていた。殊に平和的な民族性が大きな作用をして、敵の食糧難に同情して塩を贈った武将の心事となり、更に戦の間に和歌のやりとりをしたり、あるいは那須の与一の扇の的となつた。こうなると戦やらスポーツやら見境いがつかないくらいである。武器がすばらしい芸術品となつたことなどにも日本武力の特質が現われている。

東亜大陸に於ては漢民族が永く中核的存在を持続し、数次にわたり、いわゆる北方の蕃族に征服されたものの、強国が真剣

に相對峙したことは西洋の如くではない。殊に蕃族は軍事的に支那を征服しても、漢民族の文化を尊重したのである。また東亞に於ては西洋の如く民族意識が強烈でなく、今日の研究でも、いかなる民種に属するかさえ不明な民族が、歴史上に存在するのである。しかも東亞大陸は土地廣大で戦争の深刻さを緩和する。

ヨーロッパは元來アジアの一半島に過ぎない。あの狭い土地に多数の強力な民族が密集して多くの国家を営んでいる。西洋科学文明の発達はその諸民族鬭争の所産と言える。東洋が王道文明の伝統を保ったのに対し、西洋が霸道文明の支配下に入つた有力な原因は、この自然的環境の結果と見るべきである。霸道文明のため戦争の本場となり、且つ優れた選手が常時相對しており、戦場も手頃の広さである關係上、戦争の発達は西洋に

於て、より系統的に現われたのは当然である。私の知識の不十分から、研究は自然に西洋戦史に偏したのであるが、戦争の形態に関する限り甚だしい不合理とは言えないと信ずる。

私の戦争史が西洋を正統的に取扱つたからとて、一般文明が西洋中心であると言うのではないことを特に強調する。

第八問 決戦・持久両戦争が時代的に交互するとの見解は果して正しいか。

答 ナポレオンはオーストリア、プロイセン等の国々に対しては見事な決戦戦争を強行したのであるが、スペインに対しては実行至難となり、またロシヤに対しては彼の全力を以てしても、ほとんど不可能であつた。第二次欧州大戦で新興ナチス・ドイツはポーランド、オランダ、ユーゴ、ギリシャ等の弱小国家のみならず、フランスに対しても極めて強力に決戦戦争を強

制した。ソ連に対しては開戦当初の大奇襲によつて肝心の緒戦に大成功を収めながら、そう簡単には行かない状況にある。またナポレオンも英国に対しては十年にわたる持久戦争を余儀なくされたが、ヒットラーも英国に決戦戦争を強制することは至難である。

右の如く同一時代に於て、ある時には決戦戦争が行なわれ、ある所では持久戦争となつたのである。決戦・持久両戦争が時的的に交互するとの見解は十分に検討されなければならない。

如何なる時、如何なる所に於ても、両交戦国の競争力に甚だしい懸隔があるときは持久戦争とはならないのは、もちろんであり、第二次欧州大戦に於けるドイツと弱小国家との間の如き、これである。戦争本来の面目はもちろん決戦戦争にあるが、競争力がほぼ相匹敵している国家間に持久戦争の行なわれる原因

は次の如くである。

1 軍隊価値の低下

文芸復興以来の傭兵は全く職業軍人である。生命を的とする職業は少々無理があるために、如何に訓練した軍隊でも、徹底的にその武力を運用することは困難であつた。これがフランス革命まで持久戦争となつていた根本原因である。フランス革命の軍事的意義は職業軍人から国民的軍隊に歸つたことである。近代人はその愛国の赤誠によつてのみ、真に生命を犠牲に供し得るのである。

支那に於ては、唐朝の全盛時代に於て国民皆兵の制度が破れて以来、その民族性は、極端に武を卑しめ、今日なお「好人不当兵」の思想を清算し得ないで、武力の真価を發揮しにくい状態にある。

日本の戦国時代に於ける武士は、日本国民性に基づく武士道によつて強烈な戦闘力を發揮したのであるが、それでもなお且つ買収が行なわれ当時の戦争は、いわゆる謀略中心となり、必要の前には父母、兄弟、妻子までも利益のために犠牲としたのである。戦国時代の日本武将の謀略は、中国人も西洋人も三舎を避けるものがあつた。日本民族はどの途にかけても相当のものである。今日、謀略を振り廻しても余り成功しないのは、徳川三百年の太平の結果である。

2 防禦威力の強大

戦争に於ける強者は常に敵を攻撃して行き、敵に決戦戦争を強制しようとするのである。ところが、そのときの戦争手段が甚だしく防禦に有利な場合には、敵の防禦陣地を突破することができないで、攻者の武力が敵の中枢部に達し得ず、やむなく

持久戦争となる。

フランス革命以来、決戦戦争が主として行なわれたのであるが、第一次欧州大戦に於ては防禦威力の強大が戦争を持久せしめるに至った。第二次欧州大戦では戦車の進歩と空軍の大発達が増加して、敵線突破の可能性を増加し、第一次欧州大戦当時に比し、決戦戦争の方向に傾きつつある。

戦国時代の築城は当時の武力をもつてしては力攻することが困難で、それが持久戦争の重大原因となった。謀略が戦争の極めて有力な手段となったのは、それがためである。

ナポレオンは十年にわたるイギリスとの持久戦争を余儀なくされ、遂に敗れた。イギリスはその貧弱な陸上兵力にかかわらず、ドーバー海峡という恐るべき大水濠の掩護によつて、ナポレオンの決戦戦争を阻止したのである。今日のナチス・ドイツ

に対する頑強な抵抗も、ドーバー海峡に依存している。イギリスのナポレオン及びヒットラーに対する持久戦争は、ドーバー海峡による防禦威力の強大な結果と見るべきである。

3 国土の広大

攻者の威力が敵の防禦線を突破し得るほど十分であつても、攻者国軍の行動半径が敵国の心臓部に及ばないときは、自然に持久戦争となる。

ナポレオンはロシヤの軍隊を簡単に撃破して、長駆モスコーまで侵入したのであるが、これはナポレオン軍隊の堅実な行動半径を越えた作戦であつたために、そこに無理があつた。従つてナポレオン軍の後方が危険となり、遂にモスコー退却の惨劇を演じて、大ナポレオン覇業の没落を来したのである。ロシヤを護つた第一の力は、ロシヤの武力ではなく、その広大な国

土であつた。

第二次欧州大戦に於て、ソ連はドイツに対する唯一の強力な全体主義国防国家として、強大な武力をもつていた。統帥よろしきを得たならば、スターリン陣地を堅持して、ドイツと持久戦争を交え得る公算も、絶無ではなかつたろうと考えられるが、ドイツの大奇襲にあい、スターリン陣地内に大打撃を受けて作戦不利に陥り、まさにモスコーをも失おうとしつつある。しかしスターリンが決心すれば、その広大な国土によつて持久戦争を継続し得るものと想像される。

今次事変に於ける蒋介石の日本に対する持久戦争は中国の広大な土地に依存している。

右三つの原因の中、3項は時代性と見るべきでなく、国土の広大な地方に於ては両戦争の時代性が明確となり難い。ただし

時代の進歩とともに、決戦戦争可能の範囲が逐次拡大することは当然であり、ある武力が全世界の至るところに決戦戦争を強制し得るときは、即ち最終戦争の可能性が生ずるときである。

1項は一般文化と不可分であり、2項は主として武器や築城に制約される問題であつて、時代性と密接な関係がある。ただし海軍により海を以て完全な障害となし得る敵に対しては、今日までは決戦戦争が不可能であつた。空軍が真の決戦軍隊となるとき、初めてその障害が全く力を失うのである。

即ち土地の広漠な東洋に於ては、両戦争の時代性が明確であると言ひ難いが、強国が相隣接し国土も余り広くなく、しかも霸道文明のために戦争の本場である欧州に於ては、両戦争が時代性と密に関連し、従つて両戦争が交互に現われる傾向が顕著であつた。特に現代の西欧では、軍隊の行動半径に対し土地の

広さはますます小さくなり、しかも兵力の増加は敵正面の迂回を不可能にするため、戦争の性質は緊密に兵器の威力に関係し、全く時代の影響下に入ったものと言ふべきである。

第九問 攻撃兵器が飛躍的に進歩しても、それに応じて防禦兵器もまた進歩するから、徹底した決戦戦争の出現は望み難いのではないか。

答 武器が攻防いずれに有利であるかが、戦争の性質が持久・決戦いずれになるかを決定する有力な原因である。

刀槍は裸体の個人間の闘争には決戦的武器であるが、鎧の進歩によつてその威力は制限され、殊に築城に拠る敵を攻撃することは甚だしく困難となる。

小銃は攻撃よりも防禦に適する点が多い。殊に機関銃の防禦威力は、すこぶる大きい。これに対し、火砲は小銃に比し攻撃

を有利にするが、その威力も築城と防禦方法の進歩により掣肘せいちゆうされる。即ち近時の機関銃の出現と築城の進歩とは防禦威力を急速に高めたが、大口徑火砲の大量使用は一時、敵線の突破を可能ならしめた。しかるに陣地が巧みに分散するに従つて、火砲の支援による敵線の突破は再び至難となつた。

戦車は攻撃的兵器である。第一次欧州大戦に於ける戦車の出現は、戦術界に大衝動を与えたが、その質と量とは未だ持久戦争から決戦戦争への変化を起させるまでには至らなかつた。爾来二十数年、第二次欧州大戦に於ける戦車の数と質の大進歩は、空軍の威力と相俟つて、ドイツ軍が弱小国及びフランスに果敢な決戦戦争を強制し得た原因の一つである。しかし真剣な努力を以てすれば、戦車の整備に対し対戦車砲の整備は却つて容易であり、戦車による敵陣地の突破は、十分に準備した敵に対し

ては今日といえども必ずしも容易とは言えない。

しかるに飛行機となると、戦車が地上兵器としては極めて決戦的であるのに対しても、全く比較を絶する決戦的兵器である。地上の戦闘では土地が築城に利用され、場所によつてはそのまま強い障害ともなり、防禦に偉大な力となる。水上では土地の如き利用物がなく、防禦戦闘は至難であり、防ぐ唯一の手段は攻めることである。更に空中戦に於ては、防禦は全く成立しない。

海上よりの攻撃に対する陸上の防禦は比較的容易である。大艦隊をもつてしても、時代遅れの海岸要塞を攻略することの不可能であつた歴史が多い。しかも海上から陸上を攻撃し得る範囲は極めて狭い。しかるに空中からの陸上や海上に対する攻撃の威力は極めて大きいのに對し、防空は至難である。対空射撃

その他の防空戦闘の方法は進歩しても、成層圏にも行動し速度のますます大となる飛行機に対しては、小さな目標はとにかく、大都市の如き大目標防衛のための地上よりする防禦戦闘は、制空権を失えば、ほとんど不可能に近い。空軍のこの威力に対し、あらゆるものを地下に埋没しようとしても実行は至難であり、仮に可能としても、各種の能力を甚だしく低下させることは、まぬかれ難い。

空軍に対する国土の防衛は、ますます困難となるであろう。成層圏を自由自在に駆ける驚異的航空機、それに搭載して敵国の中枢部を破壊する革命的兵器は、あらゆる防禦手段を無効にして、決戦戦争の徹底を来たし、最終戦争を可能ならしめる。

第十問 最終戦争に於ける決戦兵器は航空機でなく、殺人光線や殺人電波等ではなからうか。

答 小銃や大砲は直接敵を殺傷する兵器ではない。それによつて撃ち出される弾丸が、殺傷破壊の威力を発揮するのである。軍艦の艦体即ち「ふね」は敵を撃破する能力はない。これに搭載される火砲や発射管から撃ち出される弾丸や魚雷によつて敵艦を打ち沈める。

飛行機も軍艦と同様である。飛行機によつて敵をいためるのではない。迅速に、遠距離に爆弾等を送り得ることが、飛行機の兵器としての価値である。

もし殺人光線、殺人電波その他の恐るべき新兵器が数千、数万キロメートルの距離に猛威をほしいままにし得るに至つたならば、航空機が兵器としての絶対性を失い、空軍建設の必要がなくなるわけである。しかし最終戦争に用いられる直接敵を撃滅する兵器が、みずからかくの如き遠距離に威力を発揮し得な

い限り、将来ますます行動力の飛躍的發展を見るべき航空機によることが必要であり、空軍が決戦軍隊として最終戦争に活用されなければならない。即ち破壊兵器として今日の爆弾に代る恐るべき大威力のものが発明されることと信ずるが、これを遠距離に運んで、敵を潰滅するために航空機が依然として必要であらう。

第十一問 最終戦争に於ける戦闘指揮単位は個人だと言うが、将来の飛行機はますます大型となり指揮単位が個人と言うのは当らないのではないか。

答 指揮単位が個人になるとの判断は、今日までの大勢、即ち大隊→中隊→小隊→分隊と分解して来た過程から推察して次は個人となるだろうというので、考えには無理がないようであるが、次に来たるべき戦闘方法に対する判断がつかないため、

私としても質問者と同様、具体的に考えると何となく割り切れないものがある。最終戦争の実体は、われらの常識では想像し難い点が多く、決戦は空軍によると言っても、その空軍は今日の飛行機とは全く異なったものの出現が条件である。ここでは折角の質問に対し、私の常識的想像を述べることにする。決して権威ある回答ではない。

戦闘機は燃料の制限を受けて行動半径が小さいのみでなく、飛行機の進歩に伴い、余り小型のものは、いろいろな掣肘を受け、大型機の数増加に対して在来の如き優位の保持が困難となるし、大型爆撃機の巧妙な編隊行動と武装の向上によって、戦闘機の価値は逐次低下するものと判断されたのである。しかるに支那事変及び第二次欧州大戦の経験によれば、制空権獲得のためには戦闘機の価値は依然として極めて高い。

敵に爆弾を投ずる爆撃機の任務は固より重大であるが、将来とも空中戦の主体は依然として戦闘機であるとも考えられる。動力の大革命が行なわれ小型戦闘機の行動半径が大いに飛躍すれば、戦闘機は空中戦の花形として、ますます重要な位置を占める可能性がある。大型機は編隊行動と火力のみでなく、装甲等による防禦をも企図するであろうが、空中では水上のような重量の大きな防禦設備は望み難く、小型機はその攻撃威力を十分に發揮できる。空中戦の優者が戦争の運命を左右し、空中戦の勝負は主として小型戦闘機で決せられるものとせば、指揮單位が個人と言うのが正しいこととなる。

第十二問 最終戦争に於ける戦闘指導精神はどうなると思うか。

答 現時の持久戦争から次の決戦戦争即ち最終戦争への変転

は再三強調したように、真に超常識の大飛躍である。地上に於ける発達と異なり、想像に絶するものがある。数学的発達をなす兵数（全男子より全国民）、戦闘隊形の幾何学的解釈（面より体）、戦闘指揮単位（分隊より個人）は別として、運用に関する戦闘隊形が戦闘群の次にどんなものになるかは、戦闘方法が全く想像もつかないのであるから判断ができない。同じく運用に関する戦闘指導精神が統制の次に、いかなるものであるかも、全く判断に苦しむ。それでこの二つは正直に白欄にしてあるのであるが、敢えて大胆に意見を述べることにする。

統制には、混雑と力の重複を避けるために必要の強制即ち專制的威力を用いると同時に、各兵、各部隊の自主的独断的活動は更に多くを要求されるのである。專制的強制は自由活動を助長するためである（二八頁）。即ち統制は自由から專制への後退

ではなく、自由と専制を巧みに総合、発展させた高次の指導精神でなければならぬ。

専制は封建時代に於ける社会の指導精神であり、封建はすべての優秀民族が一度は経験したところである。文化のある時期には封建を必要とするのである。朝鮮の近世の衰微は、過早に郡県政治が行なわれ、官吏の短い在職期間に、できるだけ多く搾取しようとした官僚政治により、遂に国民の生産的、建設的企図心を根底的に消磨し、生活し得る最小限度の生産が、人民の経済活動の目標となつた結果であつた。封建君主がその領土、人民を子孫に伝えるため、十分にこれを愛惜する専制政治は、その時代には最もよい制度であつたのである。しかし人智の進歩は遂に専制下では十分にその進歩的能力を活用し得ないようになり、フランス革命前後に優秀諸民族の間に自由主義革命が

逐次実行され、澆刺たる個人の創意が尊重されて、文明は驚異的進歩を見た。

しかし、ものにはすべて限度がある。個人自由の放任は社会の進歩とともに各種の摩擦を激化し、今日では無制限の自由は社会全体の能率を挙げ得ない有様となった。統制はこの弊害を是正し、社会の全能率を発揮させるために自然に発生して来た新時代の指導精神に外ならない。戦闘指導精神が自由から統制に進んだと同一理由である（二八頁）。

新しく統制に入るには、自由主義時代に行き過ぎた私益中心を抑えるために、最初は反動的に専制即ち強制を相当強く用いなければならないのは、やむを得ないことである。殊に社会的訓練の経験に乏しいわが国に於て、ややもすれば統制が自由からの進歩ではなく自由から統制への後退であるが如き場面をも

生じたのは、自然の勢いと言わねばならぬ。しかし統制によつて社会、国家の全能力を遺憾なく發揮するためにも、個人の創意、個人の熱情が依然として最も重要であるから、無益の摩擦、不経済な重複を回避し得る範囲内に於て、ますます自由を尊重しなければならぬ。元来、理想的統制は心の統一を第一とし、法律的制限は最小限に止めるべきである。官憲統制よりも自治統制の範囲を拡大し得るようになることが望ましい。即ち統制訓練の進むに従つて、専制的部面は逐次縮小されるべきである。

準決勝戦時代の統制訓練により、最終戦争時代の社会指導精神は、今日の統制より遙かに自由を尊重して、更に積極的に国家の全能力を發揮し得るものに進歩するであろう。「戦争史大観」では、兵役がフランス革命までの傭兵時代に於ては「職業」であつたのに、フランス革命以後「義務」となつたが、最終戦

争時代は更に「義務」から「義勇」に進むものと予断している（二一八頁及び付表第二）。英米の傭兵を義勇兵と訳するのは適當でない。ここに言う「義勇」は皇運扶翼のために進んで一身を捧げる真の義勇兵である。

フランス革命後、兵力が激増し殊に準決勝時代である今日の持久戦には、全健康男子が戦線に動員される。かくの如き大動員は義務を必要とする。最終戦争では、敵の攻撃を受けて堪え忍ぶ消極的戦争参加は全国民となるが、攻勢的軍隊は少数の精鋭を極めたものとなるであろう（三六―三七頁）。

かくの如き軍隊には公平に徴募する義務兵では適當と言えぬ。義務はまだ消極的たるをまぬがれない。人も我也許す真に優れた人々の義勇的参加であることが最も望ましい。ナチスの突撃隊、ファッショの黒シャツ隊等は、この傾向に示唆を与えてい

るのではなからうか。

戦闘指導精神も兵役と同一の方向をとり、最終戦争時代の社会指導精神と同じく、今日の統制よりも更に多くの自由を許すことにより、戦闘能力の積極的發揮に努めることとなるであろう。即ち自由と統制との総合發展ではなからうか。

更に最終戦争終了後、即ち八紘一宇の建設期に入れば、人々の自由は更に高度に尊重され、全人類一致精進の中にも、各人は精鍊された自由の精神を以て、自主的に良心的にその全能力を發揮するような社会状態となるであろう。

統制主義の今日は、人類歴史中最も緊張した時代であり、少々の無理があつても最短期間に最大効果を挙げようとする合宿時代である。

第十三問 日本が最終戦争に於て必勝を期し得るといふ客観

的条件が十分に説明されていない。単なる信仰では安心できないと思う。

答 われらは三十年内外に最終戦争が来るものとして、二十年を目標に東亜連盟の生産力をして米州の生産力を追い越させようとするのである。たしかに驚くべき計画であり、空想と笑われても無理はない。われらも決して樂觀してはいない。難事中の至難事である。しかし天皇の御為め全人類のために、何としてもこれを実現せねばならぬ。

この頃の日本人は口に精神第一を唱えながら、資源獲得にのみ熱狂している。ドイツの今日は資源貧弱の苦境を克服するための努力が科学、技術の進歩をもたらしたのである。ドイツを尊敬する人は、まずこの点を学ぶべきである。特に最終戦争と不可分の関係にある、いわゆる第二産業革命に直面しつつある

今日、この点が最も肝要である。

資源もある程度は必要である。しかるに日満支だけでも実に莫大な資源を蔵している。世界無比の日本刀を鍛えた砂鉄は八十億トン、あるいは百億トンと言われている。これだけでも鉄について日本は世界一の資源を持つていえる。ただ砂鉄の少ない西洋の製鉄法を模倣して来た日本は、まだ砂鉄精錬に完全な成功を収めなかった。最近純日本式の卓抜な方法が成功しつつある。檜崎式の如き、それである。満州国の鉄の埋蔵量もすばらしい。石炭は日本内にも相当にあるが、満州国の東半分は、どこを掘つても豊富な石炭が出て来る。更に山西に行けば世界衆知の大資源がある。石油は日本国内にも、まだまだある。熱河から陝西、甘肅、四川、雲南を経てビルマに至るアジアの大油脈があることは確実らしく、蘭印の石油はその末端

と言われる。現に熱河には石油が発見され、陝西、甘肅、四川に油の出ることは世人の知るところである。大規模な試掘を強行せねばならぬ。石炭液化も今日まで困難な路を歩んで来たが、そろそろ純日本式の簡単で優秀な世界無比の能率よい方式が成功しつつある。前記の檜崎式の成功は、われらの確信するところである。その他の資源も決して恐れるに足りない。山西、陝西、四川以西の地は、ほとんど未踏査の地方で、いかなる大資源が出るかも計り難い。

東亜の最大強味は人的資源である。生産の最大重要要素は今日以後は特に人的資源である。日本海、支那海を湖水として日満支三国に密集生活している五億の優秀な人口は、真に世界最大の宝である。世人は支那の教育不振を心配するが、大したことはない。支那人は驚くべき文化人である。世界の驚異である

美術工芸品を造ったあの力を活用し、速やかに高い能力を発揮し得ることを疑わない。

ただ問題となるのは、この人的物的資源を僅々二十年内に大動員し得るかである。固より困難な大作業である。しかし革命によつて根底的に破壊したソ連が、資源は豊富であるにせよ、広大な地域に資源も人も分散している不利を克服し、あの蒙昧な人民を使用して五年、十年の間に成功した生産力の大拡張を思うとき、われらは断じて成功を疑うことができない。ただし偉大な達見と強力な政治力が必要だ。一億一心も滅私奉公も、明確なこの大目標に力強く集中されて初めて真の意義を発揮する。特に私の強調したいのは、西洋人が物質文明に耽溺しているのに、われらは数千年来の父祖の伝統によつて、心から簡素な生活に安んじ得る点である。日本の一万トン巡洋艦が同じアメ

リカの甲級巡洋艦に比べて、その戦闘力に大きな差異があるのは、主として日本の海軍軍人の剛健な生活のためである。先日、私は秋田県の石川理紀之助翁の遺跡を訪ねて、無限の感にうたれた。翁は十年の長い年月、草木谷という山中の四畳半ぐらいの草屋に単身起居し、その後、後嗣の死に遇い、やむなく家に帰った後も、極めて狭い庵室で一生を送った。この簡素極まる生活の中に数十万首の歌を詠み、香を薫じ、茶をたてつつ、誠に高い精神生活を営み、且つ農事その他に驚くべく進歩した科学的研究、改善を行なったのである。この東洋的日本の精神を生かし、生活を最大級に簡素化し、すべてを最終戦争の準備に捧げることにより、西洋人の全く思い及ばぬ力を発揮し得るのである。日本主義者は空論するよりも率先してこれを実行せねばならぬ。この簡素生活は目下国民の頭を悩ましつつある困難

な防空にも、大きな光明を与えるものと信ずる。

困難ではあるが、われらは必ず二十年以内に米州を凌駕する戦争力を養い得るだろう。ここで注意すべきことは、持久戦争時代の勝敗を決するものは主として量の問題であるが、決戦戦争時代には主として質が問題となることである。しかし、われらが断然新しい決戦兵器を先んじて創作し得たならば、今日までの立遅れを一举に回復することも敢えて難事ではない。時局が大急転するときは、後進国が先進者を追い越す機会を捉えることが比較的容易である。科学教育の徹底、技術水準の向上、生産力の大拡充が、われらの奮闘の目標であるが、特に発明の奨励には国家が最大の関心を払い、卓抜果敢な方策を強行せねばならぬ。

発明奨励のために国民が第一に心掛けねばならないのは、発

明を尊敬することである。日本に於ける天才の一人である大橋為次郎翁は、皇紀二千六百年記念として、明治神宮の近くに発明神社を建て、東西古今を通じて、卓抜な発明によつて人類の生活に大きな幸福を与えてくれた人々を祭りたいと、熱心に運動していた。私は極めて有意義な計画と信ずるが、残念ながら創立できなかった。願わくば全国民が胸の中に発明神社を建てて頂きたい。この重大時期に於て天才はややもすれば社会的重圧の下に葬られつつある。

発明奨励の方法は官僚的では絶対にいけない。よろしく成金を動員すべきである。独断で思い切った大金を投げ出し得るものでなければ、発明の奨励はできない。発明がある程度まで成功すれば、その発明家に重賞を与えらるゝとともに、その発明を保護したものに対しては勲章を賜わるようお願いする。現在では

勲章は主として官吏に年功によつて授けられる。自由主義時代ならば、国家の統制下にある官吏が特別の恩賞に浴するのは当然であろうが、統制時代には、真に国家に積極的な功績のあつたものに、職域等にこだわらず、公正に恩賞を賜わることが肝要である。発明の価値によつては、その保護者に授爵も奏請すべきである。更に一代の内に儲けた財産に対しては極めて高い相続税を課する等の方法を講じたならば、成金は自分の儲けた全部を発明奨励に出すことになるだろう。自分の力によつて儲けた富を最終戦争準備の発明奨励に捧げることは、昭和時代の成金の名誉であり、誇りでなければならぬ。

成功の確実な見込がついた発明は、これを国家の研究機関で総合的学術の力によつて速やかに工業化する。大研究機関の新設は固より必要であるが、全日本の研究機関を、形式的でなく

有機的に統一し、その全能力を自主積極的に發揮させるべきである。

最終戦争のためには、どれだけの地域をわが協同範囲としなければならぬかは一大問題である。作戦上及び資源関係よりすれば、なるべく広い範囲が希望されるのであるが、同時に戦争と建設とはなかなか両立し難く、大建設のためにはなるべく長い平和が希望される。徒らに範囲拡大のために力を消耗することは、慎重に考えねばならぬ。このことについても持久戦争時代と異なり、決戦戦争に徹底する最終戦争に於ては、必ずしも広い地域を作戦上絶対的に必要とはしないのである。優秀な武力が一挙に決戦を行ない得るからである。

以上の如く、われらが最終戦争に勝つための客観的条件は固より樂觀すべきではないが、われらの全能力を総合運用すれば、

断じて可能である。そしてこの超人的事業を可能にするものは、国民の信仰である。八紘一宇の大理想達成に対する国民不動の信仰が、いかなる困難をも必ず克服する。苦境のどん底に落ちこんでも泰然、敢然と邁進する原動力は、この信仰により常に光明と安心とを与えられるからである。日本国体の靈力が、あらゆる不足を補つて、最終戦争に必勝せしめる。

第十四問 最終戦争の必然性を宗教的に説明されているが、科学的に説明されない限り現代人には了解できない。

答 この種の質問を度々受けるのは、私の実は甚だ意外とするところである。私は日蓮聖人の信者として、聖人の予言を確信するものであり、この信仰を全国民に伝えたい熱望をもっている。しかし「最終戦争論」が決して宗教的説明を主とするものでないことは、少しく丁寧に読まれた人々には直ちに理解さ

れることと信ずる。この論は私の軍事科学的考察を基礎とするもので、私の予言は政治史の大勢、科学・産業の進歩とともに、私の軍事研究を傍証するために挙げた一例に過ぎない。

私の軍事科学の説明が甚だ不十分であることは、固より自認するところである。しかしかくの如き総合的社会現象を完全に科学をもつて証明することは不可能のことである。科学的とみずから誇るマルクス主義に於てすら、資本主義時代の後に無産者独裁の時代が来るとの判断は結局、一つの推断であつて、決して科学的に正確なものとは言えない。この見地に立てば、不完全な私の最終戦争必至の推断も相当に科学的であるとも言ひ得るではなからうか。日本の知識人は今日まで軍事科学の研究を等閑にし、殊に自由主義時代には、歴史に於て戦争の研究を、ことさらに軽視していた。戦争は人類の有するあらゆる力を瞬

間的に最も強く総合運用するものであるから、その歴史は文明発展の原則を最も端的に示すものと言ふべきである。また戦争は多くの社会現象の中で最も科学的に検討し易いものではないだろうか。

近時、宗教否定の風潮が強いのに乗じ、『最終戦争論』に予言を述べているのは穩当を欠く。予言の如きは世界を迷わすものである」と批難する人が多い由を耳にする。人智がいかに進んでも、脳細胞の数と質に制約されて一定の限度があり、科学的検討にも、おのずから限度がある。そしてそれは宇宙の森羅万象に比べては、ほんの局限された一部分に過ぎない。宇宙間には靈妙の力があり、人間もその一部分をうけている。この靈妙な力を正しく働かして、科学的考察の及ばぬ秘密に突入し得るのは、天から人類に与えられた特権である。人もし宇宙の靈妙

な力を否定するならば、それは天御中主神の否定であり、日本国体の神聖は、その重大意義を失う結果となる。天照大神、神武天皇、釈尊の如き聖者は、よく数千年の後を予言し得る強い靈力を有したのである。予言を批難しようとする科学万能の現代人は、「天壤無窮」「八紘一字」の大予言を、いかに拝しているのか。皇祖皇宗のこの大予言は実にわれらが安心の根底である。

第十五問 産業大革命の必然性についての説明が不十分であると思う。

答 全くその通りである。私の知識は軍事以外は皆無に近い。「最終戦争論」は、信仰によって直感している最終戦争を、私の専門とする軍事科学の貧弱ながら良心的な研究により、やや具体的に解釈し得たとの考えから、敢えて世に発表したのである。

その際、軍事は一般文明の発展と歩調を同じくするとの原則に基づき、各方面から観察しても同一の結論に達するだろうとの信念の下に、若干の思いつきを述べたに過ぎない。

この質疑回答の中にも、私の分を越えた僭越な独断が甚だ多いのは十分承知しており、誠にお恥ずかしい極みである。志ある方々が、思想・社会・経済等あらゆる方面から御検討の上、御教示を賜わらんことを切にお願い申上げる次第である。「東亜連盟」誌上の橘樸氏の発表に対しては、私は心から感激している。

戦争史大観

序 文

昨年の末感ずるところあり、京都で御世話になった方々及び部下の希望者に「戦争史大観」を説明したい気持になり、年末年始の休みに要旨を書くつもりであつたが果さなかつた。正月に入つて主として出張先の宿屋で書きつづけ二月十二日辛うじて脱稿した。

二月末高木清寿氏来訪、原稿をお貸ししたところ、執拗に出版を強要せられ遂に屈伏してしまった。そこで読み直して見ると前後重複するところもあり、補修すべき点も少くないが、現役最後の思い出として取敢えずこのまま世に出すこととした。

昭和十六年四月八日

於東京

石原莞爾

第三部 戦争史大観

第一篇 戦争史大観

昭和四年七月長春
に於ける講話要領
昭和十三年五月新
京に於て訂正
昭和十五年一月京
都に於て修正

第一 緒 論

一 戦争の進化は人類一般文化の発達と歩調を一にす。即ち、一般文化の進歩を研究して、戦争発達の状態を推断し得べきとともに、戦争進化の大勢を知るときは、人類文化発達の方
向を判定するために有力なる根拠を得べし。

二 戦争の絶滅は人類共通の理想なり。しかれども道義的立場のみよりこれを実現するの至難たることは、数千年の歴史の証明するところなり。

戦争術の徹底せる進歩は、絶対平和を余儀なからしむるに最も有力なる原因となるべく、その時期は既に切迫しつつあるを思わしむ。

三 戦争の指導、会戦の指揮等は、その有する二傾向の間を

交互に動きつつあるに對し、戦闘法及び軍の編成等は整然たる進歩をなす。

即ち、戦闘法等が最後の発達を遂げ、戦争指導等が戦争本来の目的に最もよく合する傾向に徹底するときは、人類争闘力の最大限を発揮するときにして、やがてこれ絶対平和の第一歩たるべし。

第二 戦争指導要領の変化

一 戦争本来の目的は武力を以て徹底的に敵を圧倒するにあり。しかれども種々の事情により武力は、みずからすべてを解決し得ざることも多し。前老を決戦戦争とせば後者は持久戦争と称すべし。

二 決戦戦争に在りては武力第一にして、外交・財政は第二義的価値を有するに過ぎざるも、持久戦争に於ては武力の絶対的位置を低下するに従い、財政・外交等はその地位を高む。即ち、前者に在りては戦略は政略を超越するも後者に在りては逐次政略の地位を高め、遂に将帥は政治の方針によりその作戦を指導するに至ることあり。

三 持久戦争は長期にわたるを通常とし、武力価値の如何により戦争の状態に種々の変化を生ず。即ち、武力行使に於ても、会戦を主とするか小戦を主とするか、あるいは機動を主とするか等各種の場合を生ず。しかして持久戦争となる主な原因次の如し。

I 軍隊の価値低きこと。

十七、八世紀の傭兵、近時支那の軍閥戦争等。

II 軍隊の運動力に比し戦場の広きこと。

ナポレオンの露国役、日露戦争、支那事変等。

III 攻撃威力が当時の防禦線を突破し得ざること。

欧州大戦等。

四 両戦争の消長を觀察するに、古代は国民皆兵にして決戦戦争行なわれたり。用兵術もまた暗黒時代となれる中世を経て、ルネッサンスとともに新用兵術生まれしが、重金思想は傭兵を生み、その結果、持久戦争の時代となれり。フリードリヒ大王は、この時代の用兵術発展の頂点をなす。

大王歿後三年にして起れるフランス革命は、傭兵より国民皆兵に変化せしめて戦術上に大変化を来たし、ナポレオンにより殲滅戦略の運用開始せられ、決戦戦争の時代となれり。モルトケ、シュリーフェン等により、ますますその発展を見

たるも、防禦威力の増加は、南阿戦争、日露戦争に於て既に殲滅戦略運用の困難なるを示し、欧州大戦は遂に持久戦争に陥り、タンク、毒ガス等の使用により、各交戦国は極力この苦境より脱出せんと努力せるも、目的を達せずして戦争を終れり。

五 長期戦争は現今、戦争の常態なりと一般に信ぜられあるも、歴史は再び決戦戦争の時代を招来すべきを暗示しつつあり。しかして将来戦争は恐らくその作戦目標を敵国民となすべく、敵国の中心に一拳致命的打撃を加うることにより、真に決戦戦争の徹底を来たすべし。

第三 会戦指揮方針の変化

一 会戦指揮の要領は、最初より会戦指導の方針を確立し、その方針の下に一挙に迅速に決戦を行なうと、最初はずなべく敵に損害を与えつつ、わが兵力を愛惜し、機を見て決戦を行なうとの二種に分かつを得べし。

二 しかして両者いずれによるべきやは、将帥及び軍隊の特性と当時の武力の強靱性いかんによる。

ギリシャのファランクスは前者に便にして、ローマのレギオンは後者に便なり。これ主として両国国民性の然らしむるところ。ギリシャ民族に近きドイツと、ローマ民族に近きフランスが、欧州大戦初期に行なえる会戦指導方針と対比し、ここに面白き対照を与う。また、その使用せる武力の性質によりしといえども、ドイツ民族より前者の達人たるフリードリヒ大王を生じ、ラテン民族より後者の名手たるナポレオン

を生じたるは、必ずしも偶然とのみ称し難きか。

三 横隊戦術に於ては前者を有利とするに對し、ナポレオン時代の縦隊戦術は兵力の梯次的配置により戦鬪力の靱強性を増加し、且つ側面の強度を増せるため自然、後者を有利とすること多し。

爾後、火器の発達により正面堅固の度を増すに従い、戦鬪正面の拡大を來たし逐次、横隊戦術に近似するに至れり。欧州大戦初期に於けるドイツ軍のフランス侵入方法は、ロイテン会戦指導原理と相通ずるものあり。欧州大戦に於て敵翼包囲不可能となるや、強固なる正面突破のため深き縦長を以て攻撃を行ない、会戦指揮は、またもや第二線決戦を主とするに至れり。

第四 戦闘方法の進歩

一 古代の密集戦術は「点」の戦法にして単位は大隊なり。横隊戦術は「実線」の戦法にして単位は中隊、散兵戦術は「点線」の戦法にして単位は小隊を自然とす。戦闘の指導精神は横隊戦術に於ては「専制」にして、散兵戦術にありては「自由」なり。

日露戦後、射撃指揮を中隊長に回収せるは苦労性なる日本人の特性を表わす一例なり。もし散兵戦闘を小隊長に委すべからずとせば、その民族は既にこの戦法時代に於ける落伍者と言わざるべからず。

戦闘群戦術は「面」の戦法にして単位は分隊とす。その戦闘指導精神は統制なり。

二 實際に於ける戦闘法の進歩は右の如く単一ならざりしも、この大勢に従いしことは否定すべからず。

三 将来の戦術は「体」の戦法にして、単位は個人なるべし。

第五 戦争参加兵力の増加と国軍の編成

一 職業者よりなる傭兵時代は兵力大なる能わず。国民皆兵の徹底により逐次兵力を増加し、欧州大戦には全健康男子これに加わるに至れり。

二 将来、戦闘員の採用は恐らく義務より義勇に進むべく、戦争に当りては全国民が殺戮の渦中に投入せらるべし。

三 国軍の編制は兵力の増加に従い逐次拡大せり。特に注目に値するは、ナポレオンの一八一二年役に於て、実質に於て

三軍を有しながら、依然一軍としての指揮法をとり、非常なる不便を嘗めたりしが、欧州大戦前のドイツ軍は既に思想的には方面軍を必要としありしも遂に、ここに着意する能わずして、第一・第二・第三軍を第二軍司令官に指揮せしめ、国境会戦にてフランス第五軍を逸する一大原因をなせり。

戦史の研究に熱心なりしドイツ軍にして然り。人智の幼稚なるを痛感せずんばあらず。

第六 将来戦争の予想

一 欧州戦争は欧州諸民族の決勝戦なり。「世界大戦」と称するは当らず。

第一次欧州大戦後、西洋文明の中心は米国に移りつつあり。

次いで来るべき決戦戦争は日米を中心とするものにして真の世界大戦なるべし。

二 前述せる戦争の発達により見るときは、この大戦争は空軍を以てする決戦戦争にして、次に示す諸項より見て人類争闘力の最大限を用うるものにして、人類の最後の大戦争なるべし。即ち、この大戦争によりて世界は統一せられ、絶対平和の第一歩に入るべし。

I 真に徹底せる決戦戦争なり。

II 吾人は体以上のものを理解する能わず。

III 全国民は直接戦争に参加し、且つ戦闘員は個人を単位とす。即ち各人の能力を最大限に発揚し、しかも全国民の全力を用う。

三 しからばこの戦争の起る時機いかん。

I 東亞諸民族の団結、即ち東亞連盟の結成。

II 米国が完全に西洋の中心たる位置を占むること。

III 決戦用兵器が飛躍的に發達し、特に飛行機は無着陸にて容易に世界を一周し得ること。

右三条件はほとんど同速度を以て進みあるが如く、決して遠き将来にあらざることと思わしむ。

第七 現在に於ける我が国防

一 天皇を中心と仰ぐ東亞連盟の基礎として、まず日滿支協同の完成を現時の国策とす。

二 国防とは国策の防衛なり。即ち、わが現在の国防は持久戦争を予期して次の力を要求す。

I ソ国の陸上武力と米国の海上武力に対し東亜を守り得る武力。

II 目下の協同体たる日満両国を範圍とし自給自足をなし得る経済力。

三 満州国の東亜連盟防衛上に於ける責務真に重大なり。特にソ国の侵攻に対しては、在大陸の日本軍とともに断固これを撃破し得る自信なかるべからず。

第二篇 戦争史大観の序説（別名・戦争史大観の由来記）

昭和十五年十二月三

十一日於京都脱稿

昭和十六年六月号「東

亜連盟」に掲載

私が、やや軍事学の理解がつき始めてから、殊に陸大入校後、最も頭を悩ました一問題は、日露戦争に対する疑惑であつた。日露戦争は、たしかに日本の大勝利であつた。しかし、いかに考究しても、その勝利が僥倖の上に立っていたように感ぜられる。もしロシヤが、もう少し頑張つて抗戦を持続したなら、日本の勝利は危なかつたのではなからうか。

日本陸軍はドイツ陸軍に、その最も多くを学んだ。そしてドイツのモルトケ將軍は日本陸軍の師表として仰がれるに至った。日本陸軍は未だにドイツ流の直訳を脱し切っていない。例えば兵營生活の一面に於ても、それが顕著に現われている。服裝が洋式になったのは、よいとしても、兵營がなお純洋式となつてゐるのは果して適當であらうか。脱靴だけは日本式であるが、田舎出身の兵隊に、慣れない腰掛を強制し、また窮屈な寢台に押し込んでゐる。兵の生活様式を急變することは、かれらの度胆を抜き、不慣れの集團生活と絶対服従の規律の前に屈伏させる一手段であるかも知れないが、しかし国民の兵役に対する自覚が次第に立派なものに向上して來た今日では、その生活様式を国民生活に調和させることが必要である。のみならず更にあらゆる点に、積極的考慮が払われるべきではないだろうか。

軍事学については、戦術方面は体験的であるため自然に日本式となりつつあるものの、大戦略即ち戦争指導については、いかに見てもモルトケ直訳である。もちろん今日ではルーデンドルフを経てヒットラー流(?)に移ったが、依然としてドイツ流の直訳を脱してはいない。

日露戦争はモルトケの戦略思想に従い「主作戦を満州に導き、敵の主力を求めて遠くこれを北方に撃攘し、艦隊は進んで敵の太平洋艦隊を撃破し以て極東の制海権を獲得する……」という作戦方針の下に行なわれたのである。武力を以て迅速に敵の屈伏を企図し得るドイツの対仏作戦ならば、かくの如き要領で計画を立てて置けば充分である。元来、作戦計画は第一会戦までしか立たないものである。

しかしながら日本のロシヤに対する立場はドイツのフランス

に對するそれとは全く異なっている。日本の對露戦争には單に作戰計画のみでなく、戦争の全般につき明確な見通しを立てて置かねばならないのではないか。これが私の青年時代からの大きな疑問であつた。

日露戦争時代に日本が對露戦争につき真に深刻にその本質を突き止めていたなら、あるいは却つてあのように蹶起する勇氣を出し得なかつたかも知れぬ。それ故にモルトケ戰略の鵜呑みが國家を救つたとも言える。しかし今日、世界列強が日本を嫉視している時代となつては、正しくその真相を捉え根底ある計画の下に国防の大方針を確立せねばならぬ。これは私の絶えざる苦悩であつた。

陸大卒業後、半年ばかり教育總監部に勤務した後、漢口の中支那派遣隊司令部付となつた。當時、漢口には一個大隊の日本

軍が駐屯していたのである。漢口の勤務二個年間、心ひそかに研究したことは右の疑問に対してであつた。しかし読書力に乏しい私は、殊に適當と思われる軍事学の書籍が無いため、東亜の現状に即するわが国防を空想し、戦争を決戦的と持続的との二つに分け、日本は当然、後者に遭遇するものとして考察を進めて見た。

ロシヤ帝国の崩壊は日本の在来の対露中心の研究に大変化をもたらした。それは実に日本陸軍に至大の影響を及ぼし、様々に形を変えて今日まで、すこぶる大きな作用を為している。ロシヤは崩壊したが同時に米国の東亜に対する関心は増大した。日米抗争の重苦しい空気は日に月に甚だしくなり、結局は東亜の問題を解決するためには対米戦争の準備が根底を為すべきなりとの判断の下に、この持続的戦争に対する思索に漢口時代の

大部分を費やしたのであった。当時、日本の国防論として最高権威と目された佐藤鉄太郎中将の『帝国国防史論』も一読した。この史論は、明治以後に日本人によつて書かれた軍事学の中で最も価値あるものと信ぜられるが、日本の国防と英国の国防を余りに同一視し、両国の間に重大な差異のあることを見遁している点は、遺憾ながら承服できなかった。かくて私は当時の思索研究の結論として、ナポレオンの対英戦争が、われらの最も価値ある研究対象であるとの年来の考えを一層深くしたのであった。明治四十三年頃、韓国守備中に、箕作博士の『西洋史講話』を読んで植え付けられたこの点に関する興味が、不断に私の思索に影響を与えつつあったのである。

ただ、箕作博士の所論もマハン鵜呑みの点がある。後年、箕作博士が陸軍大学教官となつて来られた際、一度この点を抗議

して博士から少しく傾聴せられ来訪をすすめられたが、遂に訪ねる機会も無くそのままとなつたのは、未だに心残りである。

大正十二年、ドイツに留学。ある日、安田武雄中将（当時大尉）から、ルーデンドルフ一党とベルリン大学のデルブリュック教授との論争に関する説明をきき、年来の研究に対し光明を与えられしことの大なるを感知して、この方面の図書を少々読んだのであるが、語学力が不充分で、読書力に乏しい私は、あるいは半解に終つたかとも思われるが、ともかくデルブリュック教授の殲滅戦略、消耗戦略の大体を会得し得て盛んにこの言葉を使用し、陸軍大学に於ける私の欧州古戦史の講義には、戦争の二大性質としてこの名称を用いたのであつた。

ドイツに赴く途中、シンガポールに上陸の際、国柱会こくちゅうかいの人々から歓迎された席上に於て、私はシンガポールの戦略的重要性を

強調し、英国はインドの不安を抑え、豪州防衛のために戦略的側面陣地価値ある同地を、近く要塞化すべきを断じたのであったが、この後、間もなく実現したので、当時列席した人から感慨深い挨拶状を受けたことがあった。

ドイツ留学の二年間は、主として欧州大戦が殲滅戦略から消耗戦略に変転するところに興味を持って研究したのであるが、語学力の不充分と怠慢性のため充分に勉強したと言えず、誠にお恥ずかしい次第である。欧州大戦につき少しく研究するとともに、デルブリュックとドイツ参謀本部最初の論争戦であったフリードリヒ大王の研究を必要とし、且つかねての宿望であったナポレオンを研究し、大王の消耗戦略からナポレオンの殲滅戦略への変化は欧州大戦の変化とともに軍事上最も興味深い研究なるべしと信じ、両名将の研究に要する若干の図書を買集

めたのであった。

明治の末から大正の初めにかけての会津若松歩兵第六十五連隊は、日本の軍隊中に於ても最も緊張した活気に満ちた連隊であつた。この連隊は幹部を東北の各連隊の嫌われ者を集めて新設されたのであつたが、それが一致団結して訓練第一主義に徹底したのである。明治四十二年末、少尉任官とともに山形の歩兵第三十二連隊から若松に転任した私は、私の一生中で最も愉快な年月を、大正四年の陸軍大学入校まで、この隊で過ごしたのである。いな、陸軍大学卒業までも、休みの日に第四中隊の下士官を根城として兵とともに過ごした日は、極めて幸福なものであつた。

私自身は陸大に受験する希望がなかったのであるが、余り私を好かぬ上官たちも、連隊創設以来一名も陸大に入学した者が

ないので、連隊の名誉のためとて、比較的士官学校卒業成績の良かった私を無理に受験させたのである。私の希望通り陸大に入校しなかったならば、私は自信ある部隊長として、真に一介の武人たる私の天職に従い、恐らく今日は屍を馬革に包み得ていたであろう。しかるに私は入学試験に合格した。これには友人たちも驚いて「石原は、いつ勉強したか、どうも不思議だ」とて、多分、他人の寝静まった後にでも勉強したものと思つていたらしい。余り大人気ないので私は、それに対し何も言つたことはなかったが、起床時刻には連隊に出ており、消灯ラッパを通常は将校集会所の入浴場で聞いていた私は、宿に帰れば疲れ切つて軍服のまま寝込む日の方が多かったのである。あのころは記憶力も多少よかつたらしいが、入学試験の通過はむしろ偶然であつたろうと思う。しかしこれは連隊や会津の人々には

大きな不思議であつたらしい。

山形時代も兵の教育には最大の興味を感じていたのであるが、会津の数年間に於ける猛訓練、殊に銃剣術は今でも思い出の種である。この猛訓練によつて養われて来たものは兵に対する敬愛の念であり、心を悩ますものは、この一身を真に君国に捧げている神の如き兵に、いかにしてその精神の原動力たるべき国体に関する信念感激をたたき込むかであつた。私どもは幼年学校以来の教育によつて、国体に対する信念は断じて動揺することはないと確信し、みずから安心しているものの、兵に、世人に、更に外国人にまで納得させる自信を得るまでは安心できないのである。一時は^{かけい}算博士の「古神道大義」という私にはむずかしい本を熱心に読んだことも記憶にあるが、遂に私は日蓮聖人に到達して真の安心を得、大正九年、漢口に赴任する前、国

柱会の信行員となつたのであつた。殊に日蓮聖人の「前代未聞の大闘諍とうじょう一閻浮提えんぶだいに起るべし」は私の軍事研究に不動の目標を与えたのである。

戦闘法が幾何学的正確さを以て今日まで進歩して来たこと、即ち戦闘隊形が点から線に、更に面になつたことは陸軍大学在学当時の着想であつた。いな恐らくその前からであつたらしい。大正三年夏の「偕行社記事別冊」として発表された恐らく曾田中將の執筆と考えられる「兵力節約案」は、面の戦術への世界的先駆思想であると信ずるが、私がこの案を見て至大の興味を感じたことは今日も記憶に明らかである。教育総監部に勤務した頃、当時わが陸軍では散兵戦術から今日の戦闘群の戦法に進むことに極めて消極的であつたのであるが、私が自信を以て積極的意見を持っていたのは、この思想の結果であつた。

私の最終戦争に対する考えはかくて、

1 日蓮聖人によって示された世界統一のための大戦争。

2 戦争性質の二傾向が交互作用をなすこと。

3 戦闘隊形は点から線に、更に面に進んだ。次に体となること。

の三つが重要な因子となつて進み、ベルリン留学中には全く確信を得たのであつた。大正何年か忘れたが、緒方大将一行が兵器視察のため欧州旅行の途中ベルリンに來られたとき、大使館武官の招宴があり、私ども駐在員も末席に連なつたのであるが、補佐官坂西少将（当時大尉）が五分間演説を提案し最初に私を指名したので私は立つて、「何のため大砲などをかれこれ見て歩かれるのか。余り遠からず戦争は空軍により決せられ世界は統一するのだから、国家の全力を挙げて最優秀の飛行機を製作

し得るよう今日から準備することが第一」というようなことを述べたのであるが、これは緒方大将を少々驚かしたらしく数年後、陸軍大臣官邸で同大将にお目にかかったとき、特に御挨拶があった。大正十四年秋、シベリヤ経由でドイツから帰国の途中、ハルビン哈爾賓で国柱会の同志に無理に公開演説に引出された。席上で「大震災により破壊した東京に十億の大金をかけることは愚の至りである。世界統一のための最終戦争が近いのだから、それまでの数十年はバラックの生活をし戦争終結後、世界の人々の献金により世界の首都を再建すべきだ」といったようなことを言つて、あきれられたことも覚えている。

ドイツから帰国後、陸軍大学教官となつたが、大正十五年初夏、故筒井中将から、来年の二年学生に欧州古戦史を受け持てとの話があり、一時は躊躇したが再三の筒井中将の激励があり、

もともと私の最も興味をもっていた問題であつたため、遂に勇を鼓してお受けすることになった。

かくて同年夏、会津の川上温泉に立て籠もり日本文の参考資料に熱心に目を通した。もちろん泥縄式の甚だしいものであつたが、講義の中心をなす最終戦争を結論とする戦争史観は脳裡に大体まとまっていたので、とりあえず何とか片付け、大正十五年暮から十五回にわたる講義を試みたのであつた。「近世戦争進化景況一覧表」(一二二頁参照)はそのときに作られたのである。

昭和二年の同二年学生に対する講義は三十五回であつたが、今度は少し余裕があつたため、ドイツから持ち帰った資料を勉強し、更にドイツにいた原田軍医少将(当時少佐)、オーストリア駐在武官の山下中将をもわずらわして不足の資料を収集し

た。昭和元年から二年への冬休みは、安房^{あわ}の日蓮聖人の聖蹟で整頓した頭を以て、とにかく概略の講義案を作成した。もちろん、根本理論は前年度のものとは変化はないのである。当時、陸軍大学幹事坂部少将から熱心な印刷の要望があつたが、充分に検討したものでもないのです、これに応ずる勇氣も無く、現在も私の手元に保存してある次第である。

昭和三年度のためには、前年の講義録を再修正する前に、私の年来最大の関心事であるナポレオンの対英戦争の大陸封鎖の項に当面し、全力を挙げて資料を整理し、昭和二年から三年への年末年始は、これを携えて伊豆の日蓮聖人の聖蹟に至り、構想を整頓して正月中頃から起草を始めようとしたとき、流感にかかり中止。その後、再び着手しようとするとう今度は猛烈な中耳炎に冒されて約半歳の間、陸軍軍医学校に入院し、遂に目的

を達せずして終ったのであつた。その後もこの研究、特に執筆を始めると不思議にも必ず病氣にかかるので「アメリカの神様が必死に邪魔をするんだろう」などと冗談を言うような有様であつた。

昭和二年の晩秋、伊勢神宮に参拝のとき、国威西方に燦然として輝く靈威をうけて帰来。私の最も尊敬する佐伯中佐にお話したところ余り良い顔をされなかつたので、こんなことは他言すべきでない、誰にも語つたことも無く、そのままに秘して置いたのであるが、当時の嚴肅な気持は今日もなお私の脳裏にきょうこ鞏固に焼き付いている。

昭和三年十月、関東軍参謀に転補。当時の関東軍参謀は今日考えられるように人々の喜ぶ地位ではなかつた。旅順で関東庁と関東軍幹部の集会をやる場合、関東庁側は若い課長連が出る

のに軍では高級参謀、高級副官が止まりで、私ども作戰主任参謀などは列席の光榮に浴し得なかつた。満鉄の理事などにも同席は不可能なことで、奉天の兵營問題で当時の満鉄の地方課長から散々に油をしぼられた経験は、今日もなお記憶に残っている。

關東軍に転任の際も、今後とも欧州古戦史の研究を必ず続ける意気込みで赴任した。特に万難を排しナポレオンの対英戦争を書き上げる決心であつた。しかし中耳炎病後の影響は相当にひどく、何をやっても疲れ勝ちで遂に初志を貫きかねた。漢口駐屯時代に徐州で木炭中毒にかかり、それ以来、脈搏に結滯を見るようになり、一時は相当に激しいこともあり、また漢口から帰国後、マラリヤにかかったなどの關係上、爾後の健康は昔日の如くでなく、且つ中年の中耳炎は根本的に健康を破壊し、

殊に満州事変当時は大半、横臥して執務した有様であつた。

かような関係で族順では遂に予定の計画を果し得なかつたが、しかし陸大教官二個年間の講義は未消化であり、特にデルブリュックの影響強きに失し、戦争指導の両方式即ち戦争の性質の両面を「殲滅戦略」「消耗戦略」と命名していたのは、どうも適當でないとの考えを起し、この頃から戦争の性質を「殲滅戦争」「消耗戦争」の名を用いて、戦略に於ける「殲滅戦略」「消耗戦略」との間の区別を明らかにすることにした。

「殲滅戦争」「消耗戦争」の名称を「決戦戦争」「持久戦争」に改めたのは満州事変以後のことである。

昭和四年五月一日、関東軍司令部で各地の特務機関長らを集め、いわゆる情報会議が行なわれた。当時の軍司令官は村岡中将で、河本大佐はその直前転出し、板垣征四郎大佐が着任した

ばかりであつた。奉天の秦少将、吉林の林八大佐らがいたように覚えてゐる。この会議はすこぶる重大意義を持つに至つた。

ちようさくりん

それは張作霖爆死以後の状況を見ると、どうも満州問題もこのままでは納まりそうもなく今後、何か一度、事が起つたなら結局、全面的軍事行動となる恐れが充分にあるから、これに対する徹底せる研究が必要だとの結論に達したのであつた。その結果、昭和四年七月、板垣大佐を総裁官とし、関東軍独立守備隊、ちゆうさつ駐劄師団の参謀らを以て、哈爾賓、チハル齊々哈爾、ハイラル海拉爾、マンチュウリ満州里方面に参謀演習旅行を行なつた。

演習第一日は車中で研究を行ない長春に着いた。車中で研究のため展望車の特別室を借用することについて、満鉄囑託将校に少なからぬ御迷惑をかけたことなど思い出される。第二日の研究は私の「戦争史大観」であり、その説明のための要旨を心覺

えに書いてあつたのが「戦争史大観」の第一版である。第三日は吟爾賓に移り研究を続け、夜中に便所に起きたところ北満ホテルの板垣大佐の室に電灯がともっている。入って見ると、板垣大佐は昨日の私の講演の要点の筆記を整理しているのに驚いた。板垣大佐の数字に明るいのは兵要地誌班出身のためとのみ思っていた私は、この勉強があるのに感激した次第であつた。

この頃から満蒙問題はますますむずかしくなり、私も大連で二、三度、私の戦争観を講演し、「今日は必要の場合、日本が正しいと信ずる行動を断行するためには世界の圧迫も断じて恐れる必要がない」旨を強調したのであつた。時勢の逼迫ひつぱくが私の主張に耳を藉かす人も生じさせていたが、事変勃発後、私の「戦争史大観」が謄写刷りにされて若干の人々の手に配られた。こんな事情で満州建国の同志には事変前から知られ、特に事変勃発

後は「太平洋決戦」が逐次問題となり、事変前から唱導されていた伊東六十次郎君^{むそじろう}の歴史観と一致する点があつて、特に人々の興味をひき爾来、満州建国、東亜連盟運動の世界観に若干の影響を与えつつ十年の歳月を経て、遂に今日の東亜連盟協会の宣言にまで進んで来たのである。

昭和七年夏、私は満州国を去り、暮には国際連盟の総会に派遣されてジュネーブに赴いた。ジュネーブでは別にこれという仕事もなかったので、フリードリヒ大王とナポレオンに関する研究資料を集め、昭和八年の正月はベルリンに赴いて坂西武官室の一室を宿にし、石井（正美）補佐官の協力により資料の収集につとめた。帰国後も石井補佐官並びに宮本（忠孝）軍医少佐には、資料収集について非常にお世話になった。固より大したものではないが、前に述べた人々の並々ならぬ御好意に依つて、

フランス革命を動機とする持久・決戦両戦争の変転を研究するための、即ち稀代の名将フリードリヒ大王並びにナポレオンに関する軍事研究の資料は、日本では私の手許に最も良く集まっている結果となった。私は先輩、友人の御好意に対し必ず研究を続ける決心であつたが、その後の健康の不充分と職務の關係上、遂に無為にして今日に及んでいる。資料もまた未整理のままである。今日は既に記憶力が甚だしく衰え且つドイツ語の読書力がほとんどゼロとなつて、一生私の義務を果しかねると考えられ、誠に申訳のない次第である。有志の御研究を待望する。

支那事変勃発当時、作戦部長の重職にあつた私は、到底その重責に堪えず十月、関東軍に転任することとなつた。文官ならこのときに当然辞職するところであるが軍人にはその自由がない。昭和十三年、大同学院から国防に関する講演を依託されて

「戦争史大観」をテキストとすることとなり若干の修正を加えた。

「将来戦争の予想」については、旧稿は日米戦争としてあったのを、「東亜」と西洋文明の代表たる「米国」たるべきことを明らかにしたが、「現在に於ける我が国防」は根本的に書き換えたのである。昭和四年の分は次の如くであった。

1 欧州大戦に於けるドイツの敗戦を極端ならしめたるは、ドイツ参謀本部が戦争の本質を理解せざりしこと、また有力なる一原因なり。学者中には既に大戦前これに関する意見の一端を発表せるものあり、デルブリュック氏の如きこれなり。

2 日露戦争に於ける日本の戦争計画は「モルトケ」戦略の直訳にて勝利は天運によりしもの多し。

目下われらが考えおる日本の消耗戦争は作戦地域の広大

なるために来たるものにして、欧州大戦のそれとは根本を異にし、むしろナポレオンの対英戦争と相似たるものあり。いわゆる国家総動員には重大なる誤断あり。もし百万の軍を動かさざるべからずとせば日本は破産の外なく、またもし勝利を得たりとするも戦後立つべからざる苦境に陥るべし。

3 露国の崩壊は天与の好機なり。

日本は目下の状態に於ては世界を相手とし東亜の天地に於て持久戦争を行ない、戦争を以て戦争を養う主義により、長年月の戦争により、良く工業の独立を完うし国力を充実して、次いで来るべき殲滅戦争を迎うるを得べし。

昭和四年頃はソ連は未だ混沌たる状態であり、日本の大陸経営を妨げるものは主として米国であつた。昭和六年「満蒙問題解決のための戦争計画大綱」を起案している。固より簡単至極

のものであるが当時、未だ「戦争計画」というような文字は使用されず、作戦計画以外の戦争に関する計画としては、いわゆる「総動員計画」なるものが企画せられつつあったが、内容は戦争計画の真の一部分に過ぎず、しかもその計画は第一次欧州大戦の経験による欧州諸国の方針の鵜呑みの傾向であつたから、多少戦争の全体につき思索を続けていた私には記念すべき思い出の作品である。

昭和十三年には東亜の形勢が全く変化し、ソ連は彪大なその東亜兵備を以て北滿を圧しており、米国は未だその鋒鏑ほうぼうを充分に現わしてはいなかったが、滿州事変以来努力しつつあつたその軍備は、いつ態度を強化せしむるかも計り難い。即ち日本は十年前の如く露国の崩壊に乘じ、主として米国を相手とし、戦争を以て戦争を養うような戦争を予期できない状態になつてい

たのである。

そこで持久戦争となるべきを予期して、米・ソを中心とする総合的圧力に対する武力と経済力の建設を国防の目標とする如く書き改めた。

「若し百万の軍を動かさざるべからずとせば日本は破産の外なく……」というような古い考えは、自由主義の清算とともに一掃されねばならないことは言うまでもない。

昭和十年八月、私は参謀本部課長を拝命した。三宅坂の勤務は私には初めてのことであり、いろいろ予想外の事に驚かされるが多かった。満州事変から僅かに四年、満州事変当初の東亜に於ける日・ソの戦争力は大体平衡がとれていたのに、昭和十一年には既に日本の在満兵力はソ連の数分の一に過ぎず、殊に空軍や戦車では比較にならないことが世界の常識となりつ

つあつた。

日本の対ソ兵備は次の二点については何人も異存のないことである。

1 ソ連の東亜に使用し得る兵力に対応する兵備。

2 ソ連の東亜兵備と同等の兵力を大陸に位置せしめる。

私はこの簡単明瞭な見地から在満兵備の増加を要望した。しかしそのときの考えは余りに消極的であつたことが今となれば恥ずかしい極みである。小胆ものだから自然に日本の現状即ち政治的關係に左右されたわけである。しかし世間では石原はド偉い要求を出すとの評判であつたらしい。

その頃ちょうど上京中であつた星野直樹氏（私は未だ面識が無かつた）から、大蔵省の局長達が日本財政の実情につき私に説明したい希望だと伝えられたが、私はその必要はない旨を返

答したところ、重ねて日本の国防につき、できるだけのことを承りたいとのことであつたので遂に承諾し、山王ホテルの星野氏の室で会見した。先方は星野氏の他に賀屋、石渡、青木の三氏がおられた。賀屋氏が、まず日本財政につき説明された。それは約束と違ふと思つたが私も耐えて終るまで待つており、私の国防上の見地を軍機上許す限り私としては赤誠を以て説明した積りである。終ると先方から、「現在の日本の財政では無理である」「無い袖は振られない」というようないろいろの抗議的説明や質問があつたが、私は「私ども軍人には明治天皇から『世論に惑わず政治に拘らず只一途に己が本分』を尽すべきお諭さとしがある。財政がどうであろうと皆様がお困りであろうと、国防上必要最少限度のことは断々固として要求する」旨お答えして辞去した。

私のこういう態度主張を、世の中には一種の駆引のように考える向きもあつたらしいが、断じてそんなことはあり得ない。いやしくも軍人がお勅諭を駆引に用いることがあり得るだろうか。

世はいよいよ国防国家の必要を痛感して来た。国防国家とは軍人の見地から言えば、軍人が作戦以外のことに少しも心配しなくともよい状態であることで、軍としては最も明確に国家に對して軍事上の要求を提示しなければならない。私は世人の誤解に抗議するとともに、私のこの態度だけは、わが同僚並びに後輩の諸君に私のようにせられることを、おすすめるものである。

私は一試案を作つてそれに要する戦費を、その道に明るい一友人に概算して貰つた。友人の私に示した案は私の立案の心理

状態と同一で、どうやら内輪に計算されているらしい。

私の考えでは軍は政府に軍の要求する兵備を明示する。政府はこの兵備に要する国家の経済力を建設すべきである。しかし当時の自由主義の政府は、われらの軍費を鵜呑みにしてもこれに基づく経済力の建設は到底、企図する見込みがないところから、軍事予算は通過しても戦備はできない。考え抜いた結果、何とかして生産力拡充の一案を得て具体的に政府に迫るべきだと考え、板垣関東軍参謀長と松岡満鉄総裁の了解を得て、満州事変前から満鉄調査局勤務のため関東軍と密接な連絡があり事変後は満鉄経済調査会を設立した宮崎正義氏に、「日満経済財政研究会」を作ってもらい、まず試みに前に述べた私案に基づき日本経済建設の立案をお願いしたのである。誠に無理な要求であり、立案の基礎条件は甚だ曖昧を極めていたにかかわらず、宮

崎氏の多年の経験と、そのすぐれた智能により、遂に昭和十一年夏には日満産業五個年計画の最初の案ができたのである。真に宮崎氏の超人的活動の賜物である。この案はもちろん宮崎氏の一試案に過ぎないし、その後、軍備の大拡充が行なわれた結果、日本の生産拡充計画も自然大きくなったことと信ずるが、いずれにせよ宮崎氏の努力は永く歴史に止むべきものである。宮崎氏は後に参謀本部嘱託となり幾多の有益な計画を立て、国策の方向決定に偉大な功績を樹てられたことと信ずる。

この宮崎氏の研究の要領を聴き、私も数年前自由主義時代・帝政ロシヤ崩壊時代に、「百万の軍隊を動かさざるべからずとせば日本は破産の外なく……」と日本の戦争力を消極的に見ていた見地を心から清算した。即ち日本は断固として統制主義的建設により、東亜防衛のため米・ソの合力に対抗し得る実力を養

成することを絶対条件と信じ、国家が真に自覚すればその達成は必ず可能なるを確信するに至ったのである。

経済力が極めて貧弱で、重要産業はほとんど英米依存の現状に在った日本は、至急これを脱却して自給自足経済の基礎を確立することが第一の急務なるを痛感し、外交・内政の総てをこの目的達成に集中すべく、それが国防の根本であることを堅く信じて来たのであるが、満州国は十二年から計画経済の第一歩を踏み出したものの、日本は遂にこれに着手するに至らないで支那事変を迎えたのである。国家は戦争・建設同時強行との、えらい意気込みであつたが、日本としてこの二大事業の同時遂行は残念ながら至難なことが、戦争の経験によつて明らかとなつた。しかし、いかなることが起るとも米・ソ両国の実力に対抗し得る力なき限り、国防の安定せざることを明らかにしたのが

昭和十三年の訂正である。

昭和十四年、留守第十六師団長中岡中将の命により、京都衛戍講話に「戦争史大観」を試みたが、その後、人々の希望により、昭和十五年一月印刷するに当り、既に第二次欧州大戦が勃発したため、若干の小修正を加えたのが現在のものである。

九

フランス革命から第一次欧州戦争の間が決戦戦争の時代であり、この期間は百二十五年である。その前の持久戦争時代は大体三、四百年と見ることができる。もちろんこの時代の区分や、その年数については、簡単に断定することに無理はあるが、大勢は推断することができると信ずる。第一次欧州大戦から次の大変換即ち最終戦争までの持久戦争期間は、この勢いで見れば、すこぶる短いように考えられる。同時に私の信仰から言えば、

その決勝戦に信仰の統一が行なわれねばならぬ。僅か数十年の短い年月で一天四海皆帰妙法は可能であろうか。最終戦争までの年数予想は恐ろしくて発表の勇氣なく、ただ案外近しとのみ称していた。

昭和十三年十二月、舞鶴要塞司令官に転任。舞鶴の冬は毎日雪か雨で晴天はほとんどない。しかし旅館清和楼の一室に久し振りに余り来訪者もなく、のどかに読書や空想に時間を過ごし得たのは誠に近頃にない幸福の日であつた。

この静かな時間を利用して東洋史の大筋を一度復習して見たい気になり、中学校の教科書程度のもので読んでいる中に突如、一大電撃を食らった。私は大正八年以来、日蓮聖人の信者である。それは日蓮聖人の国体観が私を心から満足せしめた結果であるが、そのためには日蓮聖人が真に人類の思想信仰を統一す

べき靈格者であることが絶対的に必要である。仏の予言の適中の妙不可思議が私の日蓮聖人信仰の根底である。難しい法門等は、とうてい私には分かりかねる。しかるに東洋史を読んで知り得たことは、日蓮聖人が末法の最初の五百年に生まれられたものとして信じられているのであるが、実は末法以前の像法に生まれられたことが今日の歴史ではどうも正確らしい。私はこれを知ったとき、真に生まれて余り経験のない大衝撃を受けた。この年代の疑問に対する他の日蓮聖人の信者の解釈を見ても、どうも腑に落ちない。そこで私は日蓮聖人を人格者・先哲として尊敬しても、靈格として信仰することは断然止むべきだと考えたのである。

このことに悩んでいる間に私は、ほんげじようぎよう本化上行が二度出現せらるべき中の僧としての出現が、教法上のことであり觀念のことで

あり、賢王としての出現は現実の問題であり、仏は末法の五百年を神通力を以て二種に使い分けられたとの見解に到達した。日蓮教学の先輩の御意見はどうもこれを肯定しないらしいが、私の直感、私の信仰からは、これが仏の思召にかなっていると思ふに至つたのである。そして同時に世界の統一は仏滅後二千五百年までに完成するものとの推論に達した。そうすると軍事上の判断と甚だ近い結論となるのである。

昭和十四年三月十日、病氣治療のため上京していた私は、協和会東京事務所で若干の人々の集まりの席上で戦争論をやり、右の見解からする最終戦争の年代につき私の見解を述べた。この講演の要領が人々によつて印刷され、誰かが「世界戦争観」と命名している。

昭和十五年五月二十九日の京都義方会に於ける講演筆記（第

二次欧州大戦の急進展により同年八月印刷に付する際その部分を少し追補した）の出版されたのが、立命館版『世界最終戦争論』である。要するにこれは私の三十年ばかりの軍人生活の中に考え続けて来たことの結論と云うべきである。空想は長かったが、前に述べた如く真に私が学問的に戦史を研究したのは、主としてフリードリヒ大王とナポレオンだけであり、しかもその期間も大正十五年夏から昭和三年二月までの約一年半に過ぎないのである。研究は大急ぎで素材を整理したくらいのところ、まだまだ消化したものではなく、殊に私の最も関心事であったナポレオンの対英戦争は、その最重要点の研究がまとまらずにいるのである。最終戦争論に論じてあるフリードリヒ大王以前のことは真に常識的なものに過ぎない。

私は常に人様の前で「軍事学については、いささか自信があ

る」と広言しているが、このように真相を白状すれば誠に恥ずかしい次第である。日本に於ける軍事学の研究がドイツやソ連の軍事研究に比し甚だ振わないことは、遺憾ながら認めざるを得ない。私は、戦友諸君はもちろんのこと、政治・経済等に関心を有する一般の人士も、軍事につき研究されることを切望して止まないものである。

満州問題で国際連盟の総会に出張したときに、ある日ジュネーブで伊藤述史公使が私に、「日本には日本独特の軍事学があるでしょうか」と質問されたが、私は「いや、伊藤さん、どうも遺憾ながら明治以後には、さようなものは未だできていない」と答えると伊藤氏は青くなつて、「それは大変だ。一つ東京に帰つたらお互に軍事研究所を作ろうではないか」と提案された。なぜ、さようなことを伊藤氏が言つたかと聞いて見ると、伊藤氏

がフランス大使館の書記生の時代に、田中義一大将がフランスに廻つて来て盛んに外交官の無能を罵倒したらしい。それで伊藤氏は大いに憤慨したが、軍人はともかく政治・経済の若干を知っているのに、外交官は軍事学を知っていないことに気がつき、フランスの友人から軍事学の先生を探して貰つた。それが当時陸軍大学の教官であつたフォッシュ少佐で、同少佐から主としてナポレオン戦争の講義を聞いたのである。第一次欧州大戦後、フォッシュ元帥から「フランスを救つたものはフランス独特の軍事学であつた。独特の軍事学なき国民は永遠の生命なし」との意見を聞き、伊藤公使の脳裡に深い印象を与えているらしい。フランスが第二次欧州大戦によつてこんなふう打ちのめされた今日、フォッシュ元帥のこの言葉は素人には恐らく大きな魅力を失つたであらうが、この中に含むある真理はわれ

らも充分に玩味すべきである。伊藤氏はそのときの講義録を私にくれるとてパリの御宅を再三探して下さったが遂に発見できなかった。私はあきらめかねてなおも若し見付かったらと御願いして置いたが、パリを引払われた後も何らの御通知がないから、遂に発見されなかったのであろう。

世人は、軍が軍事上のことを秘密にするから軍事の研究ができないようなことを言うが、それはとんでもないことである。もちろん前述の通り軍人間の軍事学の研究も不振であるから、日本語の軍事学の図書は残念ながら西洋列強諸国に比して余りに貧弱である。しかし公刊の戦史その他の出版物が相当にあるのだから、研究しようとするなら必ずできる。私は少なくとも政治・経済の大学には軍事学の講座を設くべしと多年唱導して来た。配属将校は軍事学を講義すべきものではなく、また多くの

人はそんな力は持っていない。西洋人の軍事学の常識に比し、日本知識人のそれはあまりに劣っている。ドイツの中産以上の家庭には通常、ヒンデンブルグやルーデンドルフの回想録は所有されており、広く読まれている。これらの図書は立派な戦史書である。一家の主婦すら相当に軍事的知識を持っていることは私の実見せるところである。

（昭和十五年十二月三十一日）

第三篇 戦争史大観の説明

第一章 緒論

第一節 戦争の絶滅

東西古今、総ての聖賢の共同理想であり、全人類の憧憬である永久の平和は、現実問題としては夢のように考えられて来たのである。しかし時来たつて必ず全人類の希望が達成せられるべきを信ずる。固より人類の闘争本能を無くすることは不可能であるから、この希望は世界の統一に依つてのみ達成せらるるであらう。最近文明の急速な進歩はその可能を信ぜしむるに至つ

た。

世界統一の条件として考えられるものは大体次の三つである。

1 思想信仰の統一。

2 全世界を支配し得る政治力。

3 全人類を生活せしむるに足る物資の充足。

心と物は「人」に於て渾然一体である。その正しき調和を無視して一方に偏重し、いわゆる唯心とか唯物とかいう事はむづかしい理屈の分からぬ私どもにも一方的理屈である事が明らかである。しかし心と物は平等の結合ではなく、どこまでも心が主であり物が従である。思想や信仰の観念的力をもつてして人類の戦争を絶滅する事が不可能である事は数千年の歴史の証明するところであるが、戦争の絶滅に思想信仰の統一が絶対に必要であり、しかもそれが最も根本的の問題である事は疑うべか

らざるところである。

ただしこの統一も単なる觀念の論議のみでは恐らく至難で、現実の諸問題の進展と理論の進歩の間には微妙なる関連が保たるべきものと信ずる。すなわち思想の統一は自然、人格的中心を要求する。ソ連でさえマルクスだけでなくレーニン、スターリン等を神格化しているではないか。

我らの信仰に依れば、人類の思想信仰の統一は結局人類が日本国体の靈力に目醒めた時初めて達成せられる。更に端的に云えば、現人神あらひとがみたる天皇の御存在が世界統一の靈力である。しかも世界人類をしてこの信仰に達せしむるには日本民族、日本国家の正しき行動なくしては空想に終る。

かつ、人類が正しきこの信仰に達するには日本民族、日本国家等の正しき思想、正しき行為だけでは不可能であり、正義を

守る実力が伴わねばならぬ。結局文明の進歩により、力の発展により逐次政治的統一の範囲を拡大し、今日は四個の集団に凝結せんとする方向にある人類はやがて二つ、すなわち天皇を信奉するものとしからざるものの二集団に分かれ、真剣な戦いに依つて統一の中心点が決定し、永久平和の第一歩に入り戦争の絶滅を見るに至るであろう。

人類歴史は政治的統一範囲を逐次拡大して来たのであるが、それは文明の進歩に依り主権の所有する武力が完全にその偉力を發揮し得る範囲をもつて政治的統一の限度とする。すなわち将来主権者の所有する武力が必要に際し全世界到るところにある反抗を迅速に潰滅し得るに至った時、世界は初めて政治的に統一するものと信ぜられる。

そして世界が統一した後も内乱的戦争は絶滅しないだろうと

考えらるるだろう。それには前に述べた信仰の統一が強い力であることが必要であるが、同時に武力が原始的で、何人も簡単にこれを所有し得た時は内乱は簡単に行なわれたのであるが、武器が高度に進歩する事が内乱を困難にして来た事も明らかに認めねばならない。刀や槍が主兵器であつたならば、今日の思想信仰の状態でも世界の文明国と云われる国でさえ内乱の可能性は相当に多いのであるが、今日の武器に対しては軍隊が参加しない内乱は既に不可能である。

しかし私は信仰の統一と武力の発達のほか、一般文明の進歩に依り全人類の公正なる生活を保証すべき物資が大体充足せらるる事が必要であると考える。すなわち人類の精神的生活が向上して無益なる浪費を自然に掣肘し、かつ科学の進歩が生活物資の生産能率を高むる事が必要であつて、物欲のための争いを

せいちゆう

無限に放置されていた今日までの如き状態は解消せらるべきだと信ずる。これは信仰の統一、武力の発達の間に自然に行なわれる事であろう。

第二節 戦争史の方向

戦争は人類文明の総合的運用である。戦争の進歩が人類文明の進歩と歩調を一にしているのは余りに自然である。

武力の発達すなわち戦争術の進歩が人類政治の統一を逐次拡大して来た。世界の完全なる統一すなわち戦争の絶滅は戦争術がその窮極的発達に達した時に実現せらるるものと考えねばならぬ。この見地よりする戦争の発達史および将来への予見が本研究の眼目である。

戦闘は軍事技術の進歩を基礎として変化して来た。また国軍

が逐次増加し、それに伴つてその編制も大規模化されて来た。こういうものは一定方向に対し不断の進歩をして来ているのである。

しかるにその国軍を戦場で運用する会戦（会戦とは国軍の主力をもつてする戦鬪を云う）はこれを運用する武将の性格や国民性に依つて相当の特性を認めらるるけれども、軍隊発達の段階に依つて戦鬪に持久性の大小を生じ、自然会戦指揮は或る二つの傾向の間を交互に動いて来た。また武力の戦争に作用し得る力もまた歴史の進展過程に於て消極、積極の二傾向の間を交互し、決戦戦争、持久戦争はどうも時代的傾向を帯びている。

以上の見地から戦鬪法や軍の編制等が最後の発達を遂げ、会戦指揮や戦争指導が戦争本来の目的に合する武力本来価値の發揮傾向に徹底する時、人類争鬪力の最大限を發揮する時であつ

て、これが世界統一の時期となり、永久平和の第一歩となる事と信ぜられる。

第三節 西洋戦史に依る所以

この研究は主として西洋近世戦史に依る。

第二篇に於て述べたように私の軍事学の研究範囲は極めて狭く、フリードリヒ大王、ナポレオンを大観しただけと云うべく、それもやつと素材の整理をした程度である。東洋の戦史については真に一般日本人の常識程度を越えていないために、この研究は主として西洋の近世史を中心として進められたのである。誠に不完全な方法であるが、しかし戦争はどうも西洋が本場らしく、私が誠に貧弱なる西洋戦史を基礎として推論する事にも若干言い分があると思ふ。

今日文明の王座は西洋人が占めており、世界歴史はすなわち西洋史のように信ぜられている。しかしこれは余りにも一方に偏した観察である。西洋文明は物質中心の文明で、この点に於て最近数世紀の間西洋文明が世界を風靡しつつあるは現実であるが、私どもは人類の総合的文明はこれから大成せらるべくその中心は必ずしも西洋文明でないと確信する。

東洋文明は天意を尊重し、これに恭従である事をもつて根本とする。すなわち道が文明の中心である。

西洋人も勿論道を尊んでおり、道は全人類の共通のものである。り、古今に通じてあやま謬らず、中外に施してもと悖らざるものである。

しかも西洋文明は自然と戦いこれを克服する事に何時しか重点を置く事となり、道より力を重んずる結果となり今日の科学文明発達に大きな成功を来したのであつて、人類より深く感謝

せらるべきである。しかしこの文明の進み方は自然に力を主として道を従とし、道徳は天地の大道に従わん事よりもその社会統制の手段として考えられるようになって来たのでないであらうか。彼らの社会道徳には我らの学ぶべき事が甚だ多い。しかし結局は功利的道徳であり、真に人類文明の中心たらしむるに足るものとは考えられぬ。

東洋が王道文明を理想として来たのに自然の環境は西洋をして覇道文明を進歩せしめたのである。覇道文明すなわち力の文明は今日誠に人目を驚かすものがあるが、次に来たるべき人類文明の総合的大成の時には断じてその中心たらしむべきものではない。

戦争についてもその最も重大なる事すなわち「戦」の人生に於ける地位に関して王道文明の示すところは、私の知っている

範圍では次のようなものである。

1 三種神器に於ける劍。

国体を擁護し皇運を扶翼ふよくし奉る力、日本の武である。

2 「善男子正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せずして刀劍弓箭鋒槊きゆうせんぼうさくを持すべし。」

「五戒を受持せん者あらば名づけて大乘の人となすことを得ず。五戒を受けざれども正法を護るをもつて乃ち大乘と名づく。正法を護る者は正に刀劍器械を執持すべし。」（涅槃經）

3 「兵法劍形けんぎようの大事もこの妙法より出たり。」（日蓮聖人）

このような考え方は西洋にあるか無いかは知らないが、よしんばあつても今日の彼らの文明に対しては恐らく無力であろう。戦争の本義はどこまでも王道文明の指南まに俟つべきである。し

かし戦争の実行は主として力の問題であり、霸道文明の発達せる西洋が本場となつたのは当然である。

近時の日本人は全力を傾注して西洋文明を学び取り摂取し、既にその能力を示した。しかし反面西洋霸道文明の影響甚だしく、今日の日本知識人は西洋人以上に功利主義に趨^{はし}り、日本固有の道德を放棄し、しかも西洋の社会道德の体得すらも無く道德的に最も危険なる状態にあるのではないか。世界各国、特に兄弟たるべき東亜の諸民族からも蛇蝎^{だかつ}の如く嫌われておるのは必ずしも彼らの誤解のためのみでは無い。これは日本民族の大反省を要すべき問題であり、東亜大同を目標とすべき昭和維新のためよろしくこの混乱を整理して新しき道德の確立が最も肝要である。

しかしこれ程に西洋化した日本人も真底の本性を換える事は

出来ない。外交について見れば最もよく示している。霸道文明に徹底せるソ連の外交は正確なる数学的外交である事は極めて明らかであるのに、日本人の一部は日本が南洋進出のため今日の如き対ソ国防不完全のままソ連と握手しようと主張している。誠に滑稽であるが、しかもこれは日本人の本質はお人好しである事を示しているのである。

日英同盟廃棄数年後になつても日本人は英国が日英同盟の好誼を忘れた事を批難し、つい最近まで第一次欧州大戦に於ける日本の協力を思い出させようとしているのに対し、あるドイツ人が「日本は離婚した女に未練を持っている有様だ」と冷笑した事があつた。これらも日本人は根本に於ては、外交に於ても道義を守るべしとの考えが西洋人に比して遥かに強い事を示している一例とも考えられる。

日本の戦争は主として国内の戦争であり、かつまた民族性が大きな力をなして戦の内に和歌のやりとりとなったり、或いは那須与一の扇の的となったりして、戦やらスポーツやら見境いがつかなくなる事さえあった。

東亜大陸に於ても民族意識は到底西洋に於ける如く明瞭でなかった。もちろん漢民族は自ら中華をもつて誇つておつたものの、今日東亜の大陸に歴史上何民族か判明しない種族の多いのを見て民族間の対立感情が到底西洋の如くでなかったことを示している。かく東洋は王道文明発育の素地が西洋に比し遙かに優れている。

これに加うるに東洋に於ては強大民族の常時的対立が無く、かつ土地広大のため戦争の深刻さを緩和する事が出来た。欧州では強大民族が常に対立して相争いかつ地域も東亜の如く広く

なく、戦争術の発展が時代文明との関連を表わすに自然に良い有様であつた。

覇道文明のため戦争の本場であり、かつ優れたる選手が常時相対峙しており、戦場も手頃である關係上戦争の発達は西洋に於てより系統的に現われたのである。すなわち私の研究が西洋に偏していても「戦争」の問題である限り決して不当でないと思ふ。

私の戦争史が西洋を正統的に取扱つたからとて、一般文明が西洋中心であるとは云うのではない。

第二章 戦争指導要領の変化

第一節 戦争の二種類

国家の対立ある間戦争は絶えない。

国家の間は相協力を図るとともに不断に相争っている。その争いに国家の有するあらゆる力を用うるは当然である。平時の争いに於ても武力は隠然たる最も有力なる力である。外交は武力を背景として行なわれる。

この国家間の争いの徹底が戦争である。戦争の特異さは武力をも直接に使用する事である。すなわち戦争を定義したならば「戦争とは武力をも直接使用する国家間の闘争」というべきである。

武力が戦争で最も重要な地位を占むる事は自然であり、武力で端的に勝敗を決するのが戦争の理想的状态である。しかし戦争となつても両国の闘争には武力以外の手段も遺憾なく使用せられる。故に戦争遂行の手段として武力および武力以外のもの

の二つに大別出来る。

この戦争の手段としての武力価値の大小に依り戦争の性質が二つの傾向に分かれる。

武力の価値が大でありこれが絶対的である場合は戦争は活発猛烈であり、男性的、陽性であり、通常短期戦争となる。これを決戦戦争と名づける。

武力の価値が他の手段に対し絶対的地位を失い、逐次低下するに従い戦争は活気を失い、女性的、陰性となり、通常長期戦争となる。これを持続戦争と命名する。

第二節 両戦争と政戦略の關係

戦争本来の真面目しんめんぽくは武力をもつて敵を徹底的に圧倒してその意志を屈伏せしむる決戦戦争にある。決戦戦争にあつては武力

第一で外交内政等は第二義的価値を有するにすぎないけれども、持久戦争に於ては武力の絶対的位置を低下するに従い外交、内政はその価値を高める。ナポレオンの「戦争は一に金、二にも金、三にも金」といった言葉はますますその意義を深くするのである。即ち決戦戦争では戦略は常に政略を超越するのであるが、持久戦争にあつては逐次政略の地位を高め、遂に政略が戦争を指導するまでも至るのである。

戦争の目的は当然国策に依つて決定せらるるのである。この意味に於てクラウゼウィッツのいわゆる「戦争は他の手段をもつてする政治の継続に外ならぬ」、しかし戦争の目的達成のため政治、統帥の關係は一にその戦争の性質に依るものである。

政治と統帥は通常利害相反する場合が多い。その協調即ち戦争指導の適否が戦争の運命に絶大なる關係を有する。国家の主

権者が将帥であり政戦略を完全に一身に抱いているのが理想である。軍事の専門化に伴い近世はかくの如き状態が至難となり、フリードリヒ大王、ナポレオン以来はほとんどこれを見る事が出来なかつた。最近に於てはケマル・パシャとか蒋介石、フランコ將軍等は大体それであり、また第二次欧州大戦に於てはヒットラーがそれであるが如くドイツ側から放送されているが、それは将来戦史的に充分検討を要する。

政戦両略を一人格に於て占めていない場合は統帥権の問題が起つて来る。

民主主義国家に於てはもちろん統帥は常に政治の支配下にある。決して最善の方式ではないが止むを得ない。ローマ共和国時代は、戦争の場合独裁者を臨時任命してこの不利を補わんとした事はなかなか興味ある事である。

ドイツ、ロシヤ等の君主国に於ては政府の外に統帥府を設け、いわゆる統帥権の独立となっていた時が多かった。

この二つの方式は各々利害があるが大体に於て決戦戦争に於ては統帥権の独立が有利であり、持久戦争に於てはその不利が多く現われる。これは統帥が戦争の手段の内に於て占むる地位の關係より生ずる自然の結果である。

これを第一次欧州大戦に見るに、戦争初期決戦戦争的色彩の盛んであつた時期には、統帥権の独立していたドイツは連合国に比し誠に鮮やかな戦争指導が行なわれ、あのまま戦争の決が着いたならば統帥権独立は最上の方式と称せられたであろうが、持久戦争に陥つた後は統帥と政治の關係常に円満を欠き（カイゼルは政治は支配していたけれども統帥は制御する事が出来なかつた）。これに反し、クレマンソー、ロイド・ジョージに依り

支配せられその信任の下にフォッシュが統帥を専任せしめられた大戦末期の連合国側の方式が遂に勝を得、かくて大戦後ドイツ軍事界に於ても統帥権の独立を否定する論者が次第に勢いを得たのである。

ドイツの統帥権の独立はこの事情を最もよく示している。

フリードリヒ大王以後統帥事項は当時における参謀総長に当る者より直接侍従武官を経て上奏していたのであるが、軍務二途に出づる弊害を除去するため陸軍大臣が総ての軍事を統一する事となっていた。大モルトケが参謀総長就任の時（一八五七年心得、一八五八年総長）はなお陸軍大臣の隷下に在つて勢力極めて微々たるものであった。一八五九年の事件に依つて信用を高めたのであつたけれども、一八六四年デンマーク戦争には未だなかなかその意見が行なわれず、軍に対する命令は直接大

臣より送付せられ、時としてモルトケは数日何らの通報を受けない事すらあつたが、戦況困難となりモルトケが遂に出征軍の参謀長に栄転し、よく錯綜せる軍事、外交の問題を処理して大功を立てたのでその名望は高まつた。国王の信任はますます加わり、一八六六年普墺戦争勃発するや六月二日「参謀総長は爾後諸命令を直接軍司令官に与え陸軍大臣には唯これを通報すべき」旨が国王より命令せられ、ここに参謀総長は軍令につき初めて陸軍大臣の束縛を離れたのである。しかも陸軍大臣ローン及びビスマークはこれに心よからず、普墺戦争中はもちろん一八七〇―七一年の普仏戦争中もビスマーク、モルトケ間是不和を生じ、ウィルヘルム一世の力に依り辛うじて協調を保つていたのである。

しかしモルトケ作戦の大成功と決戦戦争に依る武力価値の絶

対性向上は遂に統帥権の独立を完成したのであった。それでもこれが成文化されたのは普仏戦争後十年余を経た一八八三年五月二十四日であることはこの問題のなかなか容易でなかった事を示している。

その後モルトケ元帥の大名望とドイツ参謀本部の能力が国民絶対の信頼を博した結果、統帥権の独立は確固不拔のものとなった。しかもその根底をなすものは、当時決戦戦争すなわち武力に依り最短期間に於ける戦争の決定が常識となっていたことであるのを忘れてはならぬ。第一次欧州大戦勃発当時の如きは外務省は参謀本部よりベルギーの中立侵犯を通報せらるるに止まる有様であり、また当時カイゼルは作戦計画を無視し（一九一三年まではドイツの作戦計画は東方攻勢と西方攻勢の両場合を策定してあったのであるがその年から単一化せられ西方攻勢の

みが計画されたのである）、東方に攻勢を希望したが遂に遂行出来なかつたのである。

持久戦争となつても統帥権独立はドイツの作戦を有利にした点は充分認めねばならぬが、遂に政戦略の協調を破り徹底的潰滅に導いたのである。すなわち政治関係者は無併合、無賠償の平和を欲したのであるが統帥部は領土権益の獲得を主張し、ついに両者の協調を見る事が出来なかつた。

我が国に於ては「統帥権の独立」なる文字は穩当を欠く。「天子は文武の大権を掌握」遊ばされておるのである。もとより憲法により政治については臣民に翼賛の道を広め給うておるのであるけれども、統帥、政治は天皇が完全に綜合掌握遊ばさるるのである。これが国体の本義である。

政府および統帥府は政戦両略につき充分連絡協調に努力すべ

きであり、両者はよく戦争の本質を体得し、決戦戦争に於ては特に統帥に最も大なる活動をなさしむる如くし、持久戦争に於ては武力の価値低下の状況に応じ政治の活動に多くの期待をかくる如くし、その戦争の性質に適應する政戦両略の調和に努力すべき事もちろんである。しかし如何に臣民が協調に努力するも必ず妥協の困難な場面^{ほうちやく}に逢着するものである。それにもかかわらず総て臣民の間に於て解決せんとするが如き事があつたならば、これこそ天皇の天職を妨げ奉るものである。政府、統帥府の意見一致し難き時は一刻の躊躇なく聖断を仰がねばならぬ。聖断一度び下らば過去の経緯や凡俗の判断等は超越し、真に心の奥底より聖断に一如し奉るようになるのが我が国体、靈妙の力である。

他の国にてフリードリヒ大王、ナポレオン、乃至ヒットラー

無くば政戦略の統一に困難を来たすのであるが、我が大日本に於ては国体の靈力に依り何時でもその完全統一を見るところに最もよく我が国体の力を知り得るのである。戦争指導のためにも我が国体は真に万邦無比の存在である。

第三節 持久戦争となる原因

持久戦争は両交戦国の戦争力ほとんど相平均しているところから生ずるものであり、その戦力甚だしく懸隔ある両国の間には勿論容易に決戦戦争となるのは当然である。今ほとんど相平均している国家間に持久戦争の行なわるる場合を考えれば次のようなものである。

1、軍隊の価値低きこと

後に詳述する事とするがルネッサンスに依り招来せられた傭

兵は全く職業軍人である。生命を的とする職業は少々無理あるがために如何に精鍊な軍隊であつても、徹底的にその武力の運用が出来かねた事が仏国革命まで、持久戦争となつていた根本原因である。フランス革命の軍事的意義は職業軍人から国民軍隊に帰つた事である。実に近代人はその愛国の誠意のみが真に生命を犠牲に為し得るのである。

「十八世紀までの戦争は国王の戦争であり国民戦争でなかったから真面目な戦争とならなかつたが、フランス革命以後は国民戦争となつた。国民戦争に於ては中途半端の勝負は不可能である」との信念の下にルーデンドルフは回想録や「戦争指導と政治」の中に「敵国側の目的はドイツの殲滅にあるからドイツは徹底的に戦わねばならぬ」との意味を強調している。すなわちドイツ参謀本部は、戦争を十八世紀前のものと以後のものとの

區別したが、戦争の性質に対する徹底せる見解を欠いていた。欧州大戦は既にナポレオン、モルトケ時代の戦争と性質を異にするに至った事を認識しなかつた事が、第一次欧州大戦に於けるドイツ潰滅の一因と云われねばならない。

支那に於ては唐朝の全盛時代に於て国民皆兵の制度破れ、爾来武を卑しみ漢民族国家衰微の原因となつた。民国革命後も日本の明治維新の如く国民皆兵に復歸する事が出来ず、依然「好人不当兵」の思想に依る傭兵であり、十八世紀欧州の傭兵に比し遙かに低劣なものでその戦争に於ては武力よりも金力がものを言つた。戦によつて屈するよりも金力によつて屈し得る戦に眞の決戦戦争はあり得ない。かるが故に革命後の統一戦争が何時果つべしとも見えなかつたのは自然である。私どもは元来民国革命に依り支那の復興を衷心より待望し、多くの日本人志士

は支那志士に劣らざる熱意を以て民国革命に投じたのであった。しかるに革命後も真の革新行なわれず、軍閥闘争の絶えざるを見て「自ら真の軍隊を造り得ざる処に主権の確立は出来よう筈は無い。支那は遂に救うべからず」との結論に達したのであった。勿論あの国土厖大な支那、しかも歴史は古く、病膏肓に入つた漢民族の革命がしかく短日月に行なわれないのは当然であり、私どもの判断も余りに性急であつたのであるが、一面の真理はこれを認めねばならない。劣悪極まる軍隊の結果は個々の戦争を金銭の取引に依り決戦戦争以上の短日月の間に解決せらるる事もあつたけれども、それは戦争の絶対性を欠き、その効力は極めて薄弱にして間もなく又戦争が開始せられ、慢性的内乱となつたのである。

孫文、蒋介石に依り革命軍の建設は軍隊精神に飛躍的進歩を

見、国内統一に力強く進んだのは確かに壯観であり我らの見解に修正の傾向を生じつつあったのである。しかも中国の統一はむしろ日本の圧迫がその国民精神を振起せしめた点にある。支那事変に於てはかなり勇敢に戦ったのであるがこの大戦争に於てすらもなお未だ真の国民皆兵にはなり難いのである。数百年来武を卑しんだ国民性の悩みは深刻である。我らは中国がこの際唐朝以前の古に復り正しき国民軍隊を建設せん事を東亜のため念願するのである。

日本の戦国時代に於ける武士は日本国民性に基づく武士道に依つて強烈な戦闘力を発揮したのであるが、それでもなお且つ買収行なわれ、当時の戦争はいわゆる謀略が中心となり、必要の前には父母兄弟妻子までも利益の犠牲としたのであった。戦国時代の日本武将の謀略は中国人も西洋人も三舎を避くるもの

があつたのである。日本民族はどの途にかけても相当のものである。今日謀略を振り廻しても成功せず、むしろ愚直の感あるは徳川三百年太平の結果である。

2、攻撃威力が防禦線を突破し難き事

如何に軍隊が精鋭でも装備その他の關係上防禦の威力が大きく、これが突破出来なければ決局決戦戦争を不可能とする。

第一次欧州大戦當時は陣地正面の突破がほとんど不可能となり、しかも兵力の増加が迂回をも不可能にした結果持久戦争に陥つたのであつた。戦国時代の築城は当時これを力攻する事困難でこれが持久戦争の重大原因となつた。そこで前に述べた謀略が戦争の極めて有力な手段となつたのである。

3、軍隊の運動に比し戦場の広き事

決戦戦争の名手ナポレオンもロシヤに対しては遂に決戦戦争

を強いる事が出来なかつた。露国が偉いのではない。国が広い
ためである。ナポレオンは決戦戦争の名手で数回の戦争に赫々
たる戦果を挙げ全欧州大陸を風靡したが、海を隔てたしかも僅
か三十里のドーバー海峡のため英国との戦争は十年余の持久戦
争となつたのである。但しこれはむしろ2項の原因となるべき
点が多いが、その何れにしろ、日本はソ連に対しては決戦戦争
の可能性が甚だ乏しい。

広大なるアジアの諸国間に欧州に於けるように決戦戦争の可
能性の少なかつた事はアジアの民族性にも相当の影響を与えた
ものと私は信ずるものである。

以上の原因の中3項は時代性と見るべきでない。ただし時代
の進歩とともに決戦戦争可能の範囲が逐次拡大せらるる事は当
然であり、前述の如く一根拠地の武力が全世界を制圧し得るま

でに文明の進歩せる時、すなわち世界統一の可能性が生ずる時である。

1項は一般文化と密に関係があり、2項は主として武器、築城に依つて制約せらるる問題であつて、歴史的時代性とやはり密な関係がある。

以上総合的に考える時は決戦戦争、持久戦争必ずしも時代性があると言えない点があり、同一時代に於てもある地方には決戦戦争が行なわれある地方には持久戦争が行なわれた事があるが、大観すれば両戦争は時代的に交互に現われて来るものと認むべきである。殊に強国相隣接し国土の広さも手頃であり、しかも覇道文明のため戦争の本場である欧州に於てはこの関係が最も良く現われている。決戦戦争では戦争目的達成まで殲滅戦略を徹底するのであるが、各種の事情で殲滅戦略の徹底をなし

難く、攻勢の終末点に達する時戦争は持久戦争となる。持久戦争でも為し得る限り殲滅戦略で敵に大衝撃を与えて戦争の決を求めんと努力すべきであるが、かならずしも常に左様にばかりあり得ないで、消耗戦略に依り会戦によつて敵を打撃する方法の外、或いは機動ないし小戦に依つて敵の後方を攪乱し敵を後退せしめて土地を占領する方法を用いるのである。すなわち会戦を主とするか、機動を主とするかの大略二つの方向を取るものであるが、それは一に持久戦争に於ける武力の価値に依つて左右せられる。すなわち持久戦争は統帥、政治の協調に微妙な關係がある如く、戦略に於ても特に会戦に重きを置き時に機動を主とする誠に変化多きものとなる。

第四節 欧州近世に放ける両戦争の消長

文明進歩し、ほとんど同一文化の支配下に入つた欧州の近世に於ては両戦争の消長と時代の關係が誠に明瞭である。重複をいとわずフランス革命および欧州大戦を中心としてその關係を観察する事とする。

古代は国民皆兵であり、決戦戦争の色彩濃厚であつたが、ローマの全盛頃から傭兵に墮落し遂に中世の暗黒時代となつた。この時代の戦争は騎士戦であり、ギリシャ、ローマ時代の整然たる戦法影を没し一騎打ちの時代となつたのであるが、ルネッサンスとともに火器の使用が騎士の没落を来たし、新しく戦術の發展を見た。しかしにしえの国民皆兵に還らずして傭兵時代となり、戦争は大体持久戦争の傾向を取りフランス革命に及んだのである。この時代の用兵術はフリードリヒ大王に於て發達の

頂点に達し、フリードリヒ大王は正しく持久戦争の名手であった。三十年戦争（一六一八―四八年）には会戦を見る事が多かったが、ルイ十四世初期のオランダ戦争（一六七二―七八年）及びファルツ戦争（一六八九―九七年）に於てはその数甚だ少なかった。スペイン王位継承戦争（一七〇一―一四年）には三回だけ大会戦があったけれども戦争の運命に作用する事軽微であった。またこの頃殲滅戦略を愛用したカール十二世は作戦的には偉功を奏しつつも、遂にピーター大帝の消耗戦略に敗れたのである。

かくてポーランド王位継承戦争（一七三三―三八年）には全く会戦を見ず、しかもその戦争の結果政治的形勢の変化は頗る大なるものがあつた。すなわちフリードリヒ大王即位（一七四〇年）当時の用兵は持久戦争中の消耗戦略中、甚だしく機動主

義に傾いていたのである。

当時かくの如く持久戦争をなすの止むなき状況にあり、しかも消耗戦略の機動主義すなわち戦争の最も陰性的傾向であったのは政治的關係より生じた不健全なる軍制に在ったのであるが、今少しくこれにつき觀察して見よう。

1、傭兵制度

十八世紀の戦争は結局君主が、その所有物である傭兵軍隊を使用して自己の領土権利の争奪を行なった戦争である。しかるに軍隊の建設維持には莫大な経費を要し、兵は賃金のために軍務に服しているが故に逃亡の恐れ甚だしく、しかも横隊戦術は会戦に依る損害極めて多大であつた。これらの關係から君主がその高価なる軍隊を愛惜するために会戦を回避せんとするは自然である。

また兵力も小さいため、遠大なる距離への侵入作戦は至難であつた。

2、横隊戦術

横隊戦術は火器の使用により発達したのであるが、依然火器の使用には大なる制限を受けるのみならず運動性を欠くことが甚だしかつた。しかしながら、専制的支配を必要とする傭兵であつたため、十八世紀中には遂にこの横隊戦術から蟬脱せんだつする事が出来なかつた。

主将は戦役（戦役とは戦争中の一時期で通常一カ年を指す）開始前又は特別な事情の生じた時、「会戦序列」を決定する。この序列は行軍、陣営、会戦等の行動一般を律するものである。会戦のためには、その序列に従い、横広（大王時代通常四列、プロイセンに於ては現に三列）に並列した歩兵大隊を通常二戦列

と、両翼に騎兵を配置し、当時効力未だ充分でなかつた砲兵はこれを歩兵に分属して後方に控置したのである。

盲従的規律を要する傭兵には横隊を捨て難く、しかも指揮機関の不充分はかくの如き形式的決定を必要としたのであるが、行軍よりかくの如き隊形に開進し、会戦準備を整うる事は既に容易の業でなく、またかくの如き長大なる密集隊形の行動に適する戦場は必ずしも多くなく、かつ開進後の整いたる運動は平時の演習に於てすら非常な技術を要する。敵火の下ではたちまち混乱に陥ることは明らかであり、また地形の影響を受くる事は極めて大きい。

殊に前進と射撃との関係を律する事は殆んど不可能に近い。すなわち一度停止して射撃を始める時は最早整然と発進せしむる事は云うべくして行ない難い。砲兵の威力は頼むに足らない。

以上の諸件は攻撃の威力を甚だしく小ならしむるものである。すなわち一方軍が会戦の意志なく、地形を利用して陣地を占領する時は攻撃の強行は至難であつた。

又たとい敵を撃退せる場合に於ても軽拳追撃して隊伍を紊るみだ時は、敗者のなお所有する集結せる兵力のため反撃せらるる危険甚大で、追撃は通常行なわれず、徹底的な戦捷の効果は求め難かつた。

3、倉庫給養

三十年戦争には徴発に依る事が多かつたが、そのため土地を荒し、人民は逃亡したり抵抗したりするに至つて作戦に甚だしい妨害をしたのである。それ以来反動として極端に住民を愛護し、馬糧以外は概して倉庫より給養する事となつた。

傭兵の逃亡を防ぐためにも給養は良くしなければならぬし、

徴発のため兵を分散する事は危険でもあり、殊に三十年戦争頃に比し兵が増加したため、到底貧困な地方の物資のみでは給養が出来なくなつた。

そこで作戦を行なう前に適當の位置に倉庫を準備し、軍隊がその倉庫を距たること三、四日行程に至る時は更に新倉庫を設備してその充実を待たねばならぬ。敵の奇襲に対し倉庫の掩護えんごは容易ならぬ大問題であつた。

4、道路及び要塞

欧州道路の改善は十八世紀の後半期以後急速に行なわれたもので、ナポレオンは相當の良道を利用し得たけれども、フリードリヒ大王当時は幅は広いが（軍隊は広正面にて前進し得た）ほとんど構築せられない道路のみで物資の追送には殊に大なる困難を嘗なめた。

水路はこれがため極めて大なる価値があり要塞攻撃材料の輸送等は川に依らねばほとんど不可能に近い有様で、エルベ、オーデル、両河は大王の作戦に重大関係がある。

十七世紀ボーバン等の大家が出て築城が発達し、各国が国境附近に設けた要塞は運動性に乏しかった軍の行動を掣肘する事極めて大きかった。

以上の諸事情に依って戦争に於ける武力の価値は低く、持久戦争中でも消耗戦略の機動主義に傾くは自然と云うべきである。当時の戦争の景況を簡単に説明する事にしよう。

一国の戦争計画は先ず第一に外交に重きを置き、戦役計画の立案も政治上の顧慮を重視して作戦目標および作戦路を決定し、その作戦実施を将軍に命令する。

攻勢作戦を行なわんとせば先ず巧みに倉庫を設備する。倉庫

は作戦を迅速にするためなるべく敵地に近く設くるを有利とするも、我が企図を暴露せざるためには適当に撤退せしめねばならない。

準備成り敵地に侵入した軍は敵軍と遭遇せば、特に有利な場合でなければ決戦を行なう事なく、機動に依り敵を圧迫する事に勉める。会戦を行なうためには政府の指示に依るを通例とする。

両軍相對峙するに至れば互に小部隊を支分して小戦に依り敵の背後連絡線を遮断し、また倉庫を奪い、戦わずして敵を退却せしむる事に努力する。敵の要塞に対してはその守備兵を他に牽制し、要すれば正攻法に依りこれを攻略する。作戦路上にある要塞を放置して遠く作戦を為す事はほとんど不可能とせられた。

かくして逐次その占領地を拡大して敵の中心に迫り、この間外交その他あらゆる手段に依り敵を屈伏して有利な講和をすることに勉める。

両軍、要地に兵力を分散しているのであるから一点に兵力を集中してそこを突破すれば良いように考えられるが、突破しても爾後の突進力を欠き、却^{かえ}つて背後を敵に脅かされて後退の余儀なきに至り、ややもすればその後退の際大なる危険に陥るのである。一七四四年第二シユレージエン戦争に於てベーメンに突進したフリードリヒ大王が、敵の巧妙な機動戦略のため一回の会戦をも交える事なく甚大の損害を蒙つて本国に退却した如きはその最も良き一例である。（二八〇頁参照）

一八一二年ナポレオンのロシヤ遠征はこれと同一原理に基づ

く失敗であり、この種の戦争では遊撃戦（すなわち小戦）の価値が極めて大きい。

作戦は通常冬期に至れば休止し、軍隊を広地域に宿営せしめて哨兵線をもつて警戒し、この期間を利用して補充、教育その他次回戦役の準備をする。時に冬期作戦を行なう事あるもそれは特殊の事情からするもので、冬期作戦に依る損害は通常甚だ大きい。故に一度敵地を占領して要塞、河川、山地等のよき掩护を欠く時は冬期その地方を撤退、安全地帯に冬営するのが通常である。

ナポレオン以後の戦争のみを研究した人にはなかなか想像もつかない点が多いのである。しかしこの事情をよく頭に入れて置かねばフランス革命の軍事的意義、ナポレオンの偉大さが判らないのである。

第五節 フリードリヒ大王の戦争

フリードリヒ大王が一七四〇年五月三十一日、父王の死に依り王位に就いた時は年二十九で、その領土は東プロイセンからライン河の間に散在し、人口二百五十万に過ぎなかった。当時
奥（オーストリア）は千三百万、フランス二千万、英国は九百五十万の人口を有していたのである。

大王は祖国を欧州強国の列に入れんとする熱烈なる念願のため、軍事的政治的に最も有利なるシュレージエン（当時人口百三十万）の領有を企図したのである。シュレージエンはあたかも満州事変前の日本に対する満蒙の如きものであった。あたかも
よし同年十月二十日ドイツ皇帝カール六世が死去したので、

これに乘じ些細の口実を以て防備薄弱なりしシュレージエンに侵入した。弱国プロイセンに対する奥国女王マリア・テレジアの反抗は執拗を極め、大王は前後三回の戦争に依り漸くその領有を確実ならしめたのである。大王終世の事業はシュレージエン問題の解決に在ったと見るも過言ではない。終始一貫せる彼の方針、あらゆる困難を排除して目的を確保した不撓不屈の精神、これが今日のドイツの勃興に与えた力は極めて偉大である。ほとんど全欧州を向うに廻して行なつた長年月にわたる持久戦争は戦争研究者のため絶好の手本である。仕事の外見は大きくないが、大王こそ持久戦争指導の最大名手であり、七年戦争は正しく軍神の神技と云うべきである。

1、第一シュレージエン戦争（一七四〇—四二年）

大王は十二月十六日国境を越えてシュレージエンに侵入し、

二、三要塞を除きたちまち全シュレージエンを占領し、一月末国境に監視兵を配置して冬営に入つた。

バイエルン侯がフランスの援助に依りドイツ皇帝の帝位を争い、墺国と交戦状態に在つたため、大王は墺国は自分に対して充分なる兵力を使用することが出来ないだろうと考えていたのに、一七四一年四月初め突如墺軍が国境を越えて攻撃し来たり、大王の軍は冬営中を急襲せらるるに至つた。普（プロイセン）軍は狼狽して集結を図り、四月十日モルウィッツ附近に於て会戦を交え普軍は辛うじて勝利を得た。墺軍はナイセ要塞に後退し、爾後両軍相對峙する事となつた。

二三

大王と墺軍の間には複雑怪奇の外交的軀引が行なわれ、墺軍は大王と妥協して十月シュレージエンを捨て巴（バイエルン）・

仏軍に向つたが大王は墺軍の誠意なきを見て一部の兵を率いて
メーレンに侵入し、ベーメンに進出して来た巴・仏軍と策応し
たのである。しかるに墺軍は逆にドナウ河に沿うてバイエルン
に侵入し、ために連合軍の形勢不利となり墺軍は大王に対して
有力なる部隊を差向ける事となつたのである。そこで大王は一
七四二年四月ベーメンに退却し、後図を策する考えであつた。
墺軍はこれを圧して迫り来たり、大王の戦勢頗る危険であつた
が、大王は五月十七日コツウジツツに於てこれを迎え撃ち、勝
利を得たのである。

全般の形勢は連合側に不利であつたが、英国の斡旋で大王は
六月十一日墺軍とブレスラウの講和を結び、シュレージエンを
獲^えた。

2、第二シュレージエン戦争（一七四四―四五年）

大王が戦後の回復に努力しつつある間、奥英両国は仏・巴軍を
圧してライン河畔に進出した。大王はいたずらに待つ時は奥国
より攻撃せらるるを察知し、再び仏・巴と結び一七四四年八月
一部をもつてシュレージエン、主力を以てザクセンよりベーメ
ンに入り、九月十八日プラーグを攻略した。プラーグ要塞は当
時ほとんど構築せられていなかったのである。大王は同地に止
まつて敵を待つ事が当時の用兵術としては最も穩健な策であつ
たが（大王自身の反省）、軍事的に自信力を得た大王は更に南
方に進み、奥軍の交通線を脅威して奥軍を屈伏せしめんとした
が、仏軍の無為に乗じて奥將カールはライン方面より転進し来
たり、ザクセン軍を合して大王に迫つて来た。カールの謀將ト
ラウンの用兵術巧妙を極め、巧みに大王の軍を抑留し、その間
奇兵を以て大王の背後を脅威する。大王が会戦を求めんとせば

適切なる陣地を占めてこれを回避する。大王は食糧欠乏、患者続出、寒氣加わり、遂に大なる危険を冒しつつ、シュレージエに退却の余儀なきに至った。トラウンは巧妙なる機動に依り一戦をも交えないで大王に甚大なる損害を与え、その全占領地を回復したのである。

外交状態も大王に利なく一七四四年遂に大王は戦略的守勢に立つの他なきに至った。そこで大王は兵力をシュワイドニッツ南方地区に集結、敵の山地進出に乗ずる決心をとった。敵が慎重な行動に出たならば大王の計画は容易でなかったと思われるが、大王は巧妙なる反面の策に依り敵を誘致し得て、六月四日ホーヘンフリードベルクの会戦となり大王の大勝となった。この会戦は第一、第二シュレージエン戦争中王自ら進んで企て自ら指揮したほとんど唯一の会戦であり（大王が最も困難な時

戦を求めたのである）、大王が名将たる事を証した重要なものであるが、全戦争に対する作用はそう大した事は無く、敵はケーニヒグレッツ附近に止まり、王は徐々に追撃してその前面に進出、数カ月の対峙となった。けれども大王は兵力を分散しかつ糧秣欠乏し、遂に北方に退却の止むなきに至った。奥軍はこれに追尾し来たり、九月三十日ゾール附近に於て大王の退路近くに現出した。大王はこれを見て果敢に攻撃を行ない敵に一大打撃を与えたけれども、永くベーメンに留まる事が出来ず、十月中旬シュレージエンに退却冬営に就いた。

しかるに奥軍は一部をもつてライプチヒ方向よりベルリン方向に迫り、カール親王の主力はラウジッツに進入これに策応した。そこで大王はシュレージエンの軍を進めてカールに迫ったのでカールはベーメンに後退した。大王は外交の力に依つてザ

クセンを屈せんとしたが目的を達し難いので、ザクセン方向に作戦していたアンハルト公を督励して、十二月十五日ザクセン軍をケッセルスドルフに攻撃せしめ遂にこれを破った。大王はこの日ドレスデン西北方二十キロのマイセンに止まり、カールはドレスデンに位置して両軍の主力は会戦に参加しなかったのである。

カールは再戦を辞せぬ決心であつたが、ザクセン軍は志気阻喪して十二月二十五日遂にドレスデンの講和成立し、ブレスラウ条約を確認せしめた。

3、七年戦争（一七五六―六二年）

第二シュレージエン戦争後七年戦争までの十年間大王は国力の増進と特に前二戦争の体験に基づき軍隊の強化訓練に全力を尽し、自ら数個の戦術書を起案した。かくて大王はその軍隊を

世界最精鋭のものと確信するに至つたのである。この十カ年間の大王の努力は戦争研究者の特に注目すべきところである。

イ、一七五六年

奥国の外交は着々成功し露、スウェーデン、索（ザクセン）、巴等の諸邦をその傘下に糾合し得たるに対し、大王は英国と近接した。

また大王は奥国のシュレージエン回復計画の進みつつあるを知り、一七五六年開戦に決して八月下旬ザクセンに進入、十月中旬頃ザクセン軍主力を降服せしめ、同国の領有を確実にした。ロ、一七五七年

敵国側の団結は予想以上に鞏固きょうこで一七五七年のため約四十万の兵力を使用し得るに対し、大王はその半数をもつてこれに対応することとなつた。大王は熟慮の後ベーメン侵入に決し、冬

営地より諸軍をプラーク附近に向い集中前進せしめた。この前進は当時の用兵上より云えば余りに大胆なものであり種々論評せらるるところであるが、大王十年間の研究、訓練に基づく自信力の結果でよく敵の不意に乘じ得たのである。

五月六日プラーク東方地区で塙軍を破り、これをプラーク城内に圧迫した。プラークは当時既に相当の要塞になっていたので簡単に攻略する事が出来ず、五月二十九日より始めた砲撃も弾薬不十分で目的を達しかねた。ところが塙将ダウンが近接し来たり、巧みに大王の攻囲を妨げるので大王は止むなく手兵を率いてこれに迫り、六月十八日コリン附近でダウンの陣地を攻撃した。しかしながら大王軍は遂に大敗し、止むなくプラークの攻囲を解き、一部をもつてシュレージエン方向に主力はザクセンに退却した。

大王のコリンの失敗はほとんど致命的と云うべき結果であつたのに、更に仏・巴軍が西方および西南方より迫り来つたので形勢愈々急である。幸い塙軍の行動活発ならざるに乘じ大王は西方より迫り来たる敵に一撃を与えんとした。敵は巧みにこれを避け大王をして奔命に疲れしむるとともに塙軍主力はシュレージエンの占領を企図したので、大王も弱り抜いて十月下旬遂にシュレージエンに転進するに決した。その時西方の敵再び前進し来たるの報告に接しただちにこれに向い、十一月五日二万二千の兵力をもつて六万の敵をロスバハに迎撃、これに甚大の損害を与えた。

この一戦はほとんど絶望の涯てに在つた普国を再生の思いあらしめた。しかしシュレージエン方面の状況が甚だ切迫して来たのでただちにこれに転進、途中ブレスラウの陥落を耳にしつ

つ前進、十二月五日有名なロイテンの会戦となつた。

この会戦は三万五千をもつて奥軍の六万五千に徹底的打撃を与えた、大王の会戦中の最高作品であり、大王のほとんど全会戦を批難したナポレオンさえ百世の模範なりとして極力賞讃したのである。奥軍はシュレージエンに進入した九万中僅かにその四分の一を掌握し得、大王は約四万の捕虜を得てシュワイドニッツ要塞以外の全シュレージエンを回復、平和への希望を得て冬営についた。

ハ、一七五八年

マリア・テレジヤの戦意旺盛にして平和の望みは絶え、露軍は昨年東普に侵入退却したが、この年一月二十二日遂にケーニヒグレッツを占領し、夏にはオーデル河畔に進出を予期せねばならぬ。幸いロスバハ、ロイテンの戦果に依り英の態度積極的

となり、仏に対する顧慮は甚だしく減少した。

しかし大王の戦力も大いに消耗、もはや大規模な攻勢作戦を許さない。またいたずらに守勢に立つは大王の性格これを許さぬ。ここに於て大王はなるべく遠く塹軍を支え、為し得ればこれに一撃を与え、露軍の近迫に際し動作の余地を有するを目的とし、四月中旬シュワイドニッツ攻略後主力をもつてメーレンに侵入、オルミュッツ要塞を攻略するに決心した。あたかも一九一六年ファルケンハインのいわゆる「制限目的をもつてする攻勢」であるベルダン攻撃に似ている。

五月二十二日から攻囲を開始したが、敵将ダウンの消耗戦略巧妙を極めて大王を苦しめ、六月三十日四千輜よりなる大王の大縦列を襲撃潰滅せしめた。大王は躊躇する事なく攻城を解き、八月初め主力をもつてランデスフートに退却した。

露軍は八月中旬オーデル河畔に現われスウェーデン軍また南下し来たったので、大王は主力をもつて塙軍に対せしめ、自ら一部をもつて露軍に向い、八月二十五日ズオルンドルフ附近に於て露軍と変化多き激戦を交え、辛うじてこれを撃退した。大王の損害も大きかったが露軍は塙軍の無為を怒り、遠く退却して大王の負担を減じた。

塙軍主力はラウジッツ方面よりザクセンに作戦し、西南方より前進して来た帝国軍（神聖ローマ帝国に属する南ドイツ諸小邦の軍隊）と協力してザクセンを狙い、虚に乗じて一部はシュレージエンを攪乱した。大王は寡兵をもつて常に積極的にこれに当ったが、ダウンの作戦また頗る巧妙で虚々実々いわゆる機動作戦の妙を発揮した。十月十四日大王はホホキルヒで敵に撃破せられたけれども大体に於て能く敵を^よ圧し、遂にほとんど完

全に敵を我が占領地区より駆逐して冬營に移る事が出来た。この戦は両将の作戦巧妙を極めたが、結局会戦に自信のある大王がよく寡兵をもって大勢を制し得たのである。

二、一七五九年

辛うじてその占領地を保持し得た大王も、昨年暮以来奥軍の防禦法は大いに進歩し、特に有利なる場合のほか攻撃至難となつた旨を述べている。大王の戦力は更に低下して最早攻勢作戦の力無く、止むなく兵力を下シュレージエンに集結、敵の進出を待つ事となつた。

六月末露軍がオーデル河畔に出て来るとダウンは初めて行動を起し、ラウジッツに出て来たが、行動例に依つて巧妙で大王に攻撃の機会を与えない。大王は止むなく奥軍を放置して露軍に向い、八月十二日クーネルスドルフの堅固なる陣地を攻撃、

一角を奪取したけれども遂に大敗し、さすがの大王もこの夜は万事終れりとし自殺を決心したが、露軍の損害また大きく、殊に奥軍との感情不良で共同動作適切を欠き、大王に英気を回復せしめた。

九月四日ドレスデンは陥落した。露軍はシュレージエンに冬営せんとしたが大王の巧妙なる作戦に依り遂に十月下旬遠く東方に退却した。大王はこの頃激烈なるリウマチスに冒されブレスラウに病臥中、カール十二世伝を書いて彼の軽拳暴進の作戦を戒め、会戦は敵の不意に乘じ得るかまたは決戦に依り、敵に平和を強制し得る時に限らざるべからずと述べている。

病氣回復後、大王はザクセンを回復せんと努力したが、十一月二十一日その部将フンクがマキセン附近でダウンに包囲せられて降伏し、奥軍はドレスデンを固守し両軍近く相對して冬営

する事となつた。

ホ、一七六〇年

大王の形勢ますます不良、クラウゼウィッツの言う如く敵の過失を発見してこれに乗ずる以外また策の施すべき術もない有様となつた。

ダウンは自ら大王をザクセンに抑留し、驍将ラウドンをしてシュレージエンに作戦せしめた。大王は再三シュレージエンの危急を救わんとしたが、ダウンは毎度巧みに大王の行動を妨げてこれをザクセンに抑留した。しかしシュレージエンの形勢ますます悪化するので大王は八月初め断固東進、八月十日リーグニッツ西南方地区に陣地を占めた。ダウンは大王と前後して東進、ラウドンを合して十万となり、三万の大王を攻撃する決心を取つて更に露軍をオーデル左岸に誘致するに勉めた。大王は

苦境を脱するため種々苦心し色々の機動を試みたが、十四日払暁突如ラウドンと衝突、適切機敏なる指揮に依りこれを撃破した。

リーグニッツの不期戦は風前の灯火の感あつた大王を救つた。大王は一部をもつて露軍を監視、主力をもつてダウンをベーメンに圧迫せんとしたが、露軍と奥軍の一部は十月四日ベルリンを占領したので急遽これが救出に赴いた。

露軍の危険は去つたので是非ザクセンを回復せんとして南下したが、ダウンはトルゴウに陣地を占めたので大王は遂に決心してこれを力攻した。大損害を受け辛うじて敵を撃退し得たがダウンは依然ドレスデンを固守して冬營に移つた。

トルゴウの会戦は一九一八年のドイツ軍攻勢にも比すべきものである。ともに困難の極に達したドイツ軍が運命打開のため

試みた最後の努力である。ただし大王は一九一八年と異なりなお存在を持続し得たのである。

へ、一七六一年

同盟軍はダウンをして大王の軍をザクセンに抑留し、ラウドンおよび露軍をもつてシュレージエンおよびポンメルンに侵入せんと企てた。

大王は一部をザクセンに止めて自らシュレージエンに赴き、ラウドンと露軍の合一を妨げ、機会あらば一撃を加えんとした。が敵の行動また巧妙で、遂に八月中旬五万五千の兵をもつて十五万の敵に対し、シュワイドニッツ附近のブントエルウッツに陣地を占め、全く戦術的守勢となった。

露軍はその後退却したがラウドンは大王の隙に乗じてシュワイドニッツを奪取、奥軍は初めてシュレージエンに冬営する事

となり、北方の露軍また遂にコールベルクを陥してポンメルンに冬営するに至った。

ト、一七六二年

ナポレオン曰く「大王の形勢今や極度に不利なり」と。

しかし天はこの稀代の英傑を棄てなかった。一七六二年一月十九日すなわち大王悲境のドン底に於て露女王の死を報じて来た。後嗣ペーテル三世は大の大王崇拜者で五月五日平和は成り、二万の援兵まで約束したのである。スウェーデンとの平和も次いで成立した。

大王はこの有利なる形勢の急転後、熟慮を重ねてその作戦目標をシュレージエンおよびザクセンに限定した。しかも極力会戦を避け、必要以上にマリア女王の敵愾心の刺戟を避けその屈服を企図したのである。

露援軍の来着を待つて七月行動を起し、シュワイドニッツ南方にあつた墺軍陣地に迫り、これを力攻する事なく、一部をもつて敵の側背を攻撃せしめて山中に圧迫、更に十月九日シュワイドニッツを攻略、ザクセンに向い、ドレスデンは依然敵手にあつたが他の全ザクセンを回復し、一部の兵を進めて南ドイツの諸小邦を屈服せしめた。

英仏間には十一月三日仮平和条約なり、さすがのマリア・テレジヤも遂に屈服、一七六三年二月十五日フーベルスブルグの講和成立、大王は初めてシュレージエンの領有を確実にしたのである。

クラウゼウィッツは大王の戦争を、

一七五七年を会戦の戦役、

一七五八年を攻囲の戦役、

一七五九―一六〇年を行軍および機動の戦役、

一七六一年を構築陣地の戦役、

一七六二年を威嚇の戦役、

と称しているが、戦争力の低下に従つて止むなく逐次戦略を交換して来た。そして状況に應ずる如くその戦略を運用し、最悪の場合にも毅然として天才を発揮し、全欧州を敵として良く七年の持久戦争に堪えその戦争目的を達成した。それには大王の優れたる軍事的能力が最も大なる作用を為しているが、しかし良く戦争目的を確保し、有利の場合も悲境の場合も毫も動揺しなかつた事が一大原因である事を忘れてはならぬ。持久戦争に於ては特に目前の戦況に眩惑し、縁日商人の如く戦争目的即ち講和条件を変更する事は厳に慎まねばならぬ。第一次欧州大戦ではドイツは遂に定まつた戦争目的なく（決戦戦争より戦争に

入ったため無理からぬ点が多い）、戦争後になつて、戦争目的が論じられている有様であつた。そしてこれが政戦略の常に不一致であつた根本原因をなしている。

第六節 ナポレオンの戦争

フリードリヒ大王の時代よりナポレオンの時代へ

1、持久戦争より決戦戦争へ

十八世紀末軍事界の趨勢。

七年戦争後のフリードリヒ大王の軍事思想はますます機動主義に傾いて来た。一般軍事界はもちろんである。

一七七一年出版せられたフェツシュの『用兵術の原則および原理』には「将官たる者は決して強制せられて会戦を行なうやうなことがあつてはならぬ。自ら会戦を行なう決心をした場合

はなるべく人命を損せざる事に注意すべし」とあり、一七七六年のチールケ大尉の著書には「学問に依りて道徳が向上せらるる如くまた学問に依り戦術は発達を遂げ、將軍はその識見と確信を増大して会戦はますますその数を減じ、結局戦争が稀となるであろう」と論じている。

仏国の有名な軍事著述家でフリードリヒ大王の殊遇を受け、一七七三年には機動演習の陪観をも許されたGuibertは一七八九年の著述に「大戦争は今後起らぬであろう。もはや会戦を見ることはないのである」と記している。七年戦争につき有名な著述をした英人ロイドは一七八〇年「賢明なる將軍は不確実なる会戦を試みる前に常に地形、陣地、陣営および行軍に関する軍事学をもつて自己の処置の基礎とする。この理を解するものは軍事上の企図を幾何学的の厳密をもつて着手し、かつ敵を撃

破する必要に迫らるる事無く戦争を実行し得るのである」と論じている。

機動主義の法則を発見するを目的として地理学研究盛んとなり鎖鑰さやく、基線、作戦線等はこの頃に生れた名称であり、軍事学の書籍がある叢書の中の数学の部門に収めらるるに至った。

ハインリヒ・フォン・ビューローは「作戦の目的は敵軍に在らずしてその倉庫である。何となれば倉庫は心臓で、これを破れば多数人の集合体である軍隊の破滅を来たすからである」と断定し、戦闘についても歩兵は唯射撃するのみ、射撃が万事を決する、精神上の事は最早大問題でないと称し、「現に子供がよく巨人を射殺することが出来る」と述べている。

かくて軍事界は全く形式化し、ある軍事学者は歩兵の歩度を一分間に七十五歩とすべきや七十六歩とすべきやを一大事とし

て研究し「高地が大隊を防御するや。大隊が高地を防御するや」は当時重大なる戦術問題として議論せられたのである。

2、フランス革命に依る軍事上の変化

「最も暗き時は最もあかつき暁に近き時なり」と言つたフリードリヒ大王は一七八六年この世を去り、後三年一七八九年フランス革命が勃発したのである。

革命は先ず軍隊の性質を変ぜしめ、これに依つて戦術の大変化を来たし遂に戦略の革命となつて新しき戦争の時代となつた。

3、新軍の建設

革命後間もなく徴兵の意見が出たが専制的であるとして排斥せられた。しかし列強の攻撃を受け戦況不利になつたフランスは一七九三年徴兵制度を採用する事となつた。しかもこれがためには一度は八十三州中六十余州の反抗を受けたのであつた。

徴兵制度に依つて多数の兵員を得たのみでなく、自由平等の理想と愛国の血に燃えた青年に依つて質に於ても全く旧国家の思い及ばざる軍隊を編制する事が出来た。

新戦術

革命軍隊も最初はもちろん従来 of 隊形を以て行動しようとしたのであるが、横隊の運動や一斉射撃のため調練不充分で自然に止むなく縦隊となり、これに射撃力を与えるため選抜兵の一部を散兵として前および側方を前進せしむる事とした。即ち散兵と縦隊の併用である。

散兵や縦隊は決して新しいものではない。奥国の軽歩兵（忠誠の念篤いウンガルン兵等である）はフリードリヒ大王を非常に苦しめたのであり、また米国独立戦争には独立自由の精神で奮起した米人が巧みにこれを利用した。

しかし軍事界は戦鬪に於ける精神的躲避^{たひ}が大きいため単独射撃は一斉射撃に及ばぬものとしていた。

縦隊は運動性に富みかつ衝突力が大きいためこれを利用しようとの考えあり、現に七年戦争でも使用せられた事があり、その後革命まで横隊、縦隊の利害は戦術上の重大問題として盛んに論争せられたが、大体に於て横隊説が優勢であつた。一七九一年仏国の操典（一八三一年まで改正せられなかつた）は依然横隊戦術の精神が在つたが、縦隊も認めらるる事となつた。

要するに散兵戦術は当時の仏国民を代表する革命軍隊に適するのみならず、運動性に富み地形の交感を受くる事少なくなかつ兵力を要点に集結使用するに便利で、殲滅戦略に入るため重要な要素をなしたのである。しかし世人が往々誤解するように横隊戦術に比し戦場に於て必ずしも徹底的に優越なものでなかつ

たし（一八一五年ワーテルローでナポレオンはウエリントンの横隊戦術に敗れた）、決して仏国が好んで採用したものでもない。自然の要求が不知不識しらずしらずの間にここに至らしめたのである。「散兵は単なる応急策に過ぎなかった。余りに広く散開しかつ衝突を行なう際に指揮官の手許に充分の兵力が無くなる危険があつたから、秩序が回復するに従い散兵を制限する事を試み、散兵、横隊、縦隊の三者を必要に応じて或いは同時に、或いは交互に使用した。故に新旧戦術の根本的差異は人の想像するようには甚だしく目立たず、その時代の人、なかんずく仏人は自己が親しく目撃する変化をほとんど意識せず、また諸種の例証に徴して新形式を組織的に完成する事にあまり意を用いざりし事実を窺い得る」とデルブリュック教授は論じている。

革命、革新の实体は多くかくの如きものであらう。具体案の

持ち合わせもないくせに「革新」「革新」と観念的論議のみを事とする日本の革新論者は冷静にかかる事を考うべきであろう。

4、給養法の変化

国民軍隊となったことは、地方物資利用に依り給養を簡単ならしむる事になり、軍の行動に非常な自由を得たのである。殊に将校の平民化が将校行李の数を減じ、兵のためにも天幕の携行を廃したので一八〇六年戦争に於て仏・普両軍歩兵行李の比は一对八乃至一对十であつた。

5、戦略の大変化

仏国革命に依つて生まれた国民的軍隊、縦隊戦術、徴発給養の三素材より、新しき戦略を創造するためには大天才の頭脳が必要であつた。これに選ばれたのがナポレオンである。

国民軍隊となつた一七九四年以後も消耗戦略の旧態は改める

事がなかつた。一七九四年仏軍は敵をライン河に圧して両軍ライン河畔で相對峙し、僅か二三十万の軍がアルサス^{一四}から北海に至る全地域に分散して土地の領有を争うたのであつた。

ナポレオンはその天才的直観力に依つて事物の真相を洞見し、革命に依つて生じた軍事上の三要素を綜合してこれを戦略に活用した。兵力を迅速に決勝点に集結して敵の主力に対し一挙に決戦を強い、のち猛烈果敢にその勝利を追求してたちまち敵を屈服せしむる殲滅戦略により、革新的大成功を収め、全欧州を震撼せしめた。かくして決戦戦争の時代が展開された。

この殲滅戦略は今日の人々には全く当然の事でなんら異とするに足らないのであるが、前述したフリードリヒ大王の戦争の見地からすれば、真に驚嘆すべき革新である事が明らかとなるであらう。ナポレオン当時の人々は中々この真相を衝き難く、

ナポレオンを軍神視する事となり、彼が白馬に乗って戦場に現われると敵味方不思議の力に打たれたのである。

ナポレオンの神秘を最初に発見したのは科学的な普国であった。一八〇六年の惨敗によりフリードリヒ大王の直伝たる夢より醒めた普国は、シャルンホルスト、グナイゼナウの力に依り新軍を送り、新戦略を体得し、ナポレオンのロシヤ遠征失敗後はしかるべき強敵となつて遂にナポレオンを倒したのである。

フリードリヒ大王時代の軍事的教育を受け、ナポレオン戦争に参加したクラウゼウィッツはナポレオンの用兵術を組織化し、一八三一年彼の名著『戦争論』が出版せられた。

6、一七九六―一七九七年のイタリア作戦

一八〇五年をもつて近世用兵術の発起点とする人が多い。二十万の大軍が広大なる正面をもつて千キロ近き長距離を迅速に

前進し、一挙に敵主力を捕捉殲滅したウルム作戦の壮観は、十八世紀の用兵術に対し最も明瞭に殲滅戦略の特徴を発揮したものである。しかしこれは外形上の問題で、新用兵術は既にナポレオン初期の戦争に明瞭に現われている。その意味で一七九六年のイタリア作戦、特にその初期作戦は最も興味深いものである。

クラウゼヴィッツが「ボナパルトはアペニエンの地理はあたかも自分の衣囊のように熟知していた」と云っているが如く、ナポレオンはイタリア軍に属して作戦に従事したこともあり、イタリア軍司令官に任ぜらるる前は公安委員会作戦部に服務してイタリアに於ける作戦計画を立案した事がある。

ナポレオンの立案せる計画は、当事者から即ち旧式用兵術の人々からは狂気者の計画と称して実行不可能のものと見られた

のである。ナポレオンは一七九六年三月二日弱冠二十六歳にしてイタリア軍司令官に任ぜられ、同二十六日ニースに着任、いよいよ多年の考案に依る作戦を実行することとなった。

イタリア軍の野戦に使用し得る兵力は歩兵四師団、騎兵二師団で兵力約四万、主力はサボナからアルベンガ附近、その一師団は西方山地内に在った。縦深約八十キロである。

軍前面の敵はサルジニアのコッリーが約一万をもつてケバ要塞からモントヴィの間に位置し、奥軍の主力はなおポー河左岸に冬営中であつた。

ナポレオンはかねての計画に基づき、両軍の分離に乘じ速やかに主力をもつてサボナからケバ方向に前進し、サルジニア軍の左側を攻撃、これを撃破する決心であつた。当時海岸線は車も通れず、騎兵は下馬を要する処もあつた。海岸からサルジニ

アに進入するためにはサボナから西北方アルタールを越える道路（峠の標高約五百メートル）が最良で、少し修理すれば車を通し得る状態であつた。ところがナポレオン着任当時のイタリヤ軍の状態は甚だ不良で、ナポレオンがその天性を發揮して大活躍をしても整理は容易な事でなかつた。

ナポレオン着任当時、マッセナはゼノバに於ける（ゼノバは當時中立で海岸道不良のため同地は仏軍の補給に重要な位置を占めていた）外交を後援するため、一部をボルトリに出していたのである。ナポレオンは塹軍を刺戟する事を避くるため同地の兵力撤退を命令したが、前任司令官の後任をもつて自任していたマッセナは後輩の黄口児、しかも師団長の経験すら無いナポレオンの来任心よからず、命令を実行せず、かえつてボルトリの兵力を増加し、表面には調子の良い報告を出していた。しかる

に四月に入つて塹軍前進の報を耳にしたナポレオンの決心は變化を來たし、四月二日ニースを發してアルベンガに達し、マツセナに命令するにボルトリを軽々に撤退する事無く、かえつて兵力増加を粧うべき事を命令した。蓋しナポレオンは塹軍の前進を知り、なるべくこれを東方に牽制してサルジニア軍との中央に突進し、各個撃破を決心したのである。マツセナは敵兵増加の徴に不安を抱き、同日は狼狽してこのまま止まるは危険な旨を具申している。

二五

主力をポー川左岸に冬營していた塹軍の新司令官老将ボリユーはゼノバ方面に対する仏軍活動開始せらるるを知り南進を起し、三月三十日にはゼノバ北方の要点ボヘッタ峠を占領して仏国の突進を防止する決心をとつたが、その後仏軍の行動の

活発でないのに乗じ、更に四月八日にはボルトリを占領して敵とゼノバの連絡を絶ち、かつボルトリにあつた製粉所を奪取する事に決心した。同時に右翼の部隊をもつてサボナ北方のモンテノット附近を占領せしめ、サルジニア軍と連絡して要線の占領を確實ならしむる事とした。

一六

行動開始前の四月九日に於けるポー川以南にある部隊の位置、右図の如し。

即ち約三万の兵力が攻撃前進を前にして縦深六十キロ、正面約八十キロに分散しており、しかも東西の交通は極めて不便でボルトリから右翼の方面に兵力を転用するためにはアックイを迂回するを要する。

ボルトリの攻撃にはビットニー、フカツソウイヒ両部隊のう

ち、九大隊を使用してボーリュー自らこれに臨み、モンテノットの攻撃はアルゲソトウ部隊に命令した。アルゲントウは後方に主力を止め、攻撃に使用した兵力は五大隊半に過ぎなかった。これが当時の用兵術である。

ナポレオンは十日サボナに到着、この日ボルトリは奥軍の攻撃を受け同地の守兵は夜サボナに退却す。ナポレオンは十一日更に東方に前進して状況を視察したが、ボルトリを占領した敵は相当の兵力であるが追撃の模様がなない。然るにこの日モンテノットも敵の攻撃を受けて占領せられたが、ランポン大佐はモンテノット南方の高地を守備してよく敵を支えている事を知つた。

ナポレオンはこの形勢に於て先ずモンテノット方面の敵を撃滅するに決心し、僅少なる部隊をサボナに止めてボルトリの敵

に対せしめ、主力は夜間ただちに行動を起して敵の側背に迫る如き部署をした。この決心処置は迅速果敢しかも適切敏捷に行なわれナポレオンを嫉視ないし軽視していた諸将を心より敬服せしめるに至った。ある人は「ナポレオンはこの命令で単に奥軍に対してのみでなく、部下諸將軍連に対しても勝利を得た」と言っている。

かくて十二日、ナポレオンは約一万人を戦場に集め得て、三千の敵を急襲して徹底的打撃を与えた。ナポレオンはこの戦鬪の成果を過信して奥軍の主力を撃破したものと考え、予定に基づき主力をもってサルジニア軍に向い前進するに決し、その部署をした。前衛たる部隊は十三日コッセリア古城を守備していた奥軍を攻撃、十四日辛うじてこれを降伏せしめたが、ナポレオンはこの間敵の部隊北方デゴ附近に在るを知つて該方面に

前進、十四日敵を攻撃してこれを撃破し、再び西方に向う前進を部署した。

しかるにデゴ戦闘後に狂喜した仏兵は、数日の間甚だ不充分なる給養であつたため掠奪を始め、全く警戒を怠つていた所を、十五日ボルトリ方面より転進して来た奥軍の急襲を受け危険に陥つたが、ナポレオンは迅速に兵力を該方面に転進し遂にこれを撃破した。しかも軍隊は再び掠奪を始め、デゴの寺院すらその禍を蒙る有様であつた。

ボーリューは十二日の敗報を受けてもこれは戦場の一波瀾ぐらゐに考え、その後逐次敗報を得るも一拠点を失つたに過ぎないとし、側方より敵の後方に兵を進めてこれを退却せしむる當時の戦術を振りまわして泰然としていたが、十六日に至つて初めて事の重大さに気付き、心を奪われてアレックスサンドリア方面

に兵力を集中せんと決心したが、諸隊の混乱甚だしく、精神的打撃甚大で全く積極的行動に出づる氣力を失った。

ナポレオンは十七日主力をもつて西進を開始したが、コツリーは退却してタナロ川左岸に陣地を占めた。仏軍はケバ要塞を単にこれを監視するに止めて前進、十九日敵陣地を攻撃したが増水のため成功せず、二十一日攻撃を敢行した時はサルジニア軍は既に退却していたが、これを追撃してモントヴィ附近の戦闘となり遂にコツリー軍を撃破した。

サルジニアは震駭して屈伏し二十八日午前二時休戦条約が成立した。

この二週間の間に墺軍に一打撃を与えサルジニア国を全く屈伏した作戦は今日の軍人の眼で見れば余りに当然であると考え、ナポレオンの偉大を発見するに苦しむであらうが、フリードリ

ヒ大王以来の戦争に対比すれば始めてその大変化を発見し得るのである。このナポレオンの殲滅戦略を戦争目的達成に向つて続行し得るところに即ち決戦戦争が行わるる事となるのである。サルジニアを屈したナポレオンは再び奥国に向い前進、ポー川左岸に退却せる敵に対しポー川南岸を東進して五月八日ピアツェンツァ附近に於てポー川を渡り、敵をしてロンバルデーを放棄の止むなきに至らしめ、敵を追撃して十日有名なるロジの敵前渡河を強行、十五日ミラノに入城した。

五月末ミラノを發しガルダ湖畔に進出、ボーリユーを遠くチロール山中に撃退した。

当時の仏奥戦争は持久戦争でありイタリア作戦はその一支作戦に過ぎない。ナポレオンは新しき殲滅戦略により敵を圧倒したが結局ここに攻勢の終末点に達した。殊にマントア要塞は頗

る堅固でナポレオンはこの要塞を攻囲しつつ四回も敵の解囲企図を粉碎、一七九七年二月二日までにマントアを降伏せしめた。

一九一六年ファンケルハインが、いわゆる制限目的を有する攻撃としてベルダン攻撃案を採用しカイゼルに上奏せる際「若し仏軍にして極力これを維持せんとせば恐らく最後の一兵をも使用するの止むなきに至るであろう。若し斯くの如くせばこれ我が軍の目的を達成せるものである」と述べている。一九一六年ドイツのベルダン攻撃はこの目的を達成しかね、ドイツ軍は連合側に劣らざる大損害を受けて戦争の前途にむしろ暗影を投じたのであったが、ナポレオンのマントア攻囲はよくファンケルハインの企図したこの目的を達成したのである。

塹軍は四回の解囲とマントアの降伏で少なくとも十万の兵力を失った（仏軍の損失は二万五千）。マントア攻囲前の塹軍の損

失は二万に達するから、一年足らずの間に塹軍はナポレオンのために十二万を失ったのである。これは当時の塹国としては大問題で、これがため主戦場から兵を転用し、最後にはウインの衛戍兵までも駆り集めたのである。

塹国の国力は消耗し、ナポレオンは一七九七年三月前進を起し、四月十八日レオベンの休戦条約が成立した。

その後の大観

ナポレオンの天才的頭脳が新戦略を生み出し、その新戦略に依ってナポレオンはたちまち軍神として全欧州を震撼した。かくしてフランスはナポレオンに依って救われた。

ナポレオンは対英戦争の第一手段として一七九八年エジプト遠征を行なったが、留守の間仏国は再びイタリアを失い苦境に立ったのに乗じ、帰来第一統領となつて一八〇〇年有名なアル

プス越えに依つて再び名望を高めた。

一度英国と和したが一八〇三年再び開戦、遂に十年にわたる持久戦争となつた。一八〇四年皇帝の位に即き、英国侵入計画は着々として進捗、その綜合的大計画は真に天下の偉観であつた。これは今日ヒットラーの試みと対比して無限の興味を覚える。

海軍の無能によつてナポレオンの計画は実行一歩手前に於て頓挫し、英国は塙、露を誘引して背後を覘ねらわしめた。ナポレオンは一八〇五年八月遂に英国侵入の兵を転じて塙国征伐に決心した。

ドーバー海峡に集結訓練を重ねた約二十万の精銳（真に世界歴史に見なかつた精銳である）は堂々東進を開始して南ドイツに侵入、塙、露両軍の間に突進して九月十七日塙のほとんど全

軍をウルムに包囲降伏せしめた。ナポレオンはドノー川に沿うてウインに迫り、逃ぐる敵を追つてメーレンに侵入したが、攻勢の終末点に達ししかも普国の態度疑わしく、形勢樂觀を許さぬ状況となつたが、ナポレオンは巧みに奥、露の連合軍を誘致して十二月二日アウステルリッツの会戦となり戦争の目的を達成した。

一八〇六年普国と戦端が開かれるとナポレオンは南ドイツにあつたその軍隊を巧みに集結、十六万の大軍三縦隊となりてチュウリンゲンを通過して北進、敵をイエナ、アウエルステートに撃破し、逃ぐるを追つて古今未曾有の大追撃を強行、プロイセンのほとんど全軍を潰滅した。しかもポーランドに進出すると冬が来る。物資が^{ようや}少ない。非常に苦しい立場に陥つた一八〇七年六月二十五日漸く露国との平和となつた。

対英戦争の第三法である大陸封鎖強行のため一八〇八年スペインに侵入したところ、作戦思うように行かず、ナポレオン失敗の第一歩をなした。英国の煽動により一八〇九年奥国が再び開戦し、ナポレオンの巧妙なる作戦は良くこれを撃破したが一方スペインを未解決のまま放任せざるを得ない事となり、またアスペルンの渡河攻撃に於ては遂に失敗、名将ナポレオンが初めて黒星をとった。

この大陸封鎖の関係から遂に一八二二年露国との戦争となり、モスコーの大失敗となった。

一八一三年新兵を駆り集め、エルベ河畔での作戦はナポレオンの天才振りを発揮した面白いものであったが、遂にライプチヒの大敗に終り、一八一四年は寡兵をもつてパリ東方地区に於て大軍に対する内線作戦となった。一七九六年の作戦に比べて

面白い研究問題であり、彼の部将としての最高の能率を発揮したと見るべきである。しかも兵力の差が甚だしく、殊に普軍がナポレオンの新用兵術を体得していたので思うに任せず、連合軍に降伏の止むなきに至った（この作戦は伊奈中佐の『名将ナポレオンの戦略』によく記されている）。

一八一五年のワーテルローは大体見込なき最後の努力であつた。

対墺、対普の個々の戦争は巧みに決戦戦争を行なつたが、スペインに対して地形その他の関係で思うに任せず、対露侵入作戦は大失敗をした。しかも、全体から見てナポレオンはその全力を対英持久戦争に捧げたのである。海と英国国民性の強靱さは天才ナポレオンを遂に倒したのである。

ヒットラーは今日ナポレオンの後継者として立っている。

第七節 ナポレオンより第一次欧州大戦へ

持久戦争では作戦目標が多く自然に土地となるが（持久戦争でも殲滅戦略を企図する場合はもちろん軍隊）、決戦戦争の特徴は殲滅戦略の徹底的運用であり、作戦目標は敵の軍隊であり、敵軍の主力である。

決戦戦争に於ては主義として戦略は政略より優先すると同じく、戦略と戦術の利害一致しない時は、戦術に重点を置くのを原則とする。我々が中少尉時代は盛んにこの事を鼓吹せられたものである。フランス革命前に於ける用兵思想の克服戦が、決戦戦争の末期まで継続せられていたわけである。感慨深からざるを得ない。

決戦戦争の進展は当然殲滅戦略の徹底で基礎をなす。即ち敵

軍主力の殲滅に最も重要な作用をなす会戦が戦争の中心問題であり、その会戦成果の増大に徹底する事が作戦上の最大目標である。

会戦成果を大ならしむるためには敵を包囲殲滅する事が理想であり、それがためモルトケ時代からは特に分進合撃が唱導せられた。会戦場に兵力を集結するのである。即ち分進して軍隊の行動を容易にし、会戦場にて兵力を集結し特に敵の包囲に便ならしめる。

しかるにナポレオンは通常会戦前に兵力を集結するに勉めた。もちろん常にそうではなかったので、例えば一八〇六年の晩秋戦、一八〇七年アルレンスタインに向う前進、およびフロイシュ、アイロウ附近の会戦、一八〇九年レーゲンスブルグ附近に於けるマッセナの使用、一八一三年バウツェン会戦に於けるネーの

使用等は一部または有力なる部隊を会戦場に於て主力に合する事を計ったのである。しかしその場合もフロイシュ、アイロウでは各個戦闘を惹起して形勢不利となり、またバウツェンでも統一的効果を挙げる事は出来なかった。それはナポレオン当時の軍隊は通信不完全で一々伝騎に依らなければならぬし、兵団の独立性も充分でなかった結果、自然会戦前兵力集結主義としなければならなかったのである。

モルトケ時代は既に電信採用せられ、鉄道は作戦上最も有利な材料となり、かつまた兵力増加、各兵団の独立作戦能力が大となったのみならず、プロイセンの将校教育の成果挙り、特に一八一〇年創立した陸軍大学の力とモルトケ参謀総長自身の高級将校、幕僚教育に依り戦略戦術の思想が自然に統一せらるるに至った結果、分進合撃すなわち会戦地集結が作戦の要領とし

て賞用せらるるに至った。

しかしモルトケも必ずしも勇敢にこれを実行し得なかった事が多い。

モルトケ元帥は一八九〇年議会に於ける演説に於て「将来戦は七年戦争または三十年戦争たる事無きにあらず」と述べている。しかし商工業の急激なる進歩は長期戦争は到底不可能と一般に信ぜられ、また軍事の進歩も甚だしく一八九一年から一九〇六年まで参謀総長であつたシュリーフェンは殲滅戦略の徹底に全力を傾注した。シュリーフェンの「カンネ」から若干抜粋して見る。

「完全なる殲滅戦争が行なわれた。特に驚嘆に値するは本会戦が総ての理論に反し劣勢をもつて勝利を得たる点にある。クラウゼウィッツは『敵に対し集中的効果は劣勢者の望み難きとこ

ろである』と云っており、ナポレオンは『兵力劣勢なるものは、同時に敵の両翼を包囲すべからず』と云っている。然るにハンニバルは劣勢をもつて集中的効果を挙げ、かつ単に敵の両翼のみならず更にその背後に向い迂回した」

「カンネの根本形式に依れば横広なる戦線が正面狭小で通常縦深に配備せられた敵に向い前進するのである。張出せる両翼は敵の両側に向い旋回し、先遣せる騎兵は敵の背後に迫る。若し何らかの事情に依り翼が中央から分離する事があつてもこれを中央に近接せしめた後、同時に包囲攻撃のため前進せしむる如き事なく、翼に近接最捷路を経て敵の側背に迫らねばならぬ」

要するに平凡な捷利に満足することなく、重大な危険を顧みず敵の両側を包囲し絶大な兵力を敵の背後に進めて完全に敵全軍を捕捉殲滅せんとする「殲滅戦」への徹底である。

彼はこの思想を全ドイツ軍に徹底するため熱狂的努力を払った。彼の思想は決して堅実とは言われぬ。彼の著述した戦史研究等も全く主観的で歴史的事実に拘泥する事なく、総てを自己の理想の表現のために枉^まげておる有様である。危険を伴うものと言わねばならぬが、速戦即決の徹底を要したドイツのため止むに止まれぬ彼の意気は真に壮とせねばならぬ。彼が臨終に於ける囁^{うわごと}語は「吾人の右翼を強大ならしめよ！」であつた。外国人の私も涙なくして読まれぬ心地がする。タンネンベルグ会戦は彼の理想が高弟ルーデンドルフにより最もよく実行せられたのである。

彼が参謀総長として最後の計画であつた一九〇五年の対仏作戰計画は彼の理想を最もよく現わしている。ベルダン以東には真に僅少の兵力で満足して主力をオアーズ河以西に進め、ラフェー

ル、パリ間には十個軍団を向け、パリは補充六個軍団で攻囲し、更にその西南方地区より敵主力の背後に七個軍団を迂回して全仏軍を捕捉殲滅せんとするのである。殲滅戦の徹底と見るべきである。

第八節 第一次欧州大戦

ドイツで殲滅戦が盛んに唱道せられ、決戦戦争への徹底を来たしている時、日露戦争、南阿戦争は持久戦争の傾向を示したものであるが、それらは皆殖民地戦争のためと簡単に片づけられた。もちろん土地の兵力に対する广大と交通の不便が両戦争を持久戦争たらしざるを得ざらしむる原因となったのであるが、両戦争を詳細に観察すれば正面突破の至難が観破せられる。これは欧州大戦の持久戦争となる予報であつたのだ。ドイツはこ

の戦争の教訓に依り重砲の増加に努力した。着眼は良かったが、まだまだ時勢の真相を把握するの明がなかった。

第一次欧州大戦開始せられると、殖民地戦争の経験に富むキチナー元帥は、戦争は三年以上もかかるように言うたのであるが、一般の人々は誰もが戦争は最短期間に終るものと考え、殊にドイツではクリスマスはベルリンでと信じ、軍隊輸送列車には「パリ行」と兵士どもが落書したのである。

しかるに破竹の勢いでパリの前面まで侵入したドイツ軍はマルヌ会戦に破れて後退、戦線はスイスから北海に及んで交綏状態となり、東方戦場また決戦に至らないで、遂に万人の予想に反し四年半の持久戦争となった。

一九一四年のモルトケ大将の作戦は一九〇五年のシュリーフェン案に比べて余りに消極的のものであった。即ちシュリーフェ

ンが一軍団半、後備四旅団半、騎兵六師団しか用いなかったメツツ以東の地区に八軍団、後備五旅団半、騎兵六師団を使用し、ベルダン以西に用いた攻勢翼である第一ないし第四軍の兵力は合計約二十一軍団に過ぎない。ドイツ軍の右翼がパリにすら達しなかつたのは当然である。

シュリーフェン引退後、連合国側の軍備はどしどし増加するに反してドイツ側はなかなか思うように行かなかつた。第一次欧州大戦前ドイツの政情は満州事変前の日本のそれに非常に似ていたのである。世は自由主義政党の勢力強く、参謀本部の要求はなかなか陸軍省の賛成が得られず（しかも参謀本部の要求も世間の風潮に押されて誠に控え目であつた）、更に陸軍省と大蔵省、政府と議会の関係は甚だしく兵備を掣肘する。英国側の宣伝に完全に迷わされていた。日本知識階級は開戦頃の同盟側

の軍備は連合側より遙かに優越していたように思っていた人が多いようであるが、実際は同盟側の百六十七師団に対し連合側は二百三十四師団の優勢を占めていたのである。同盟側の軍備拡張は露、仏のそれに遙かに及ばなかった。

シュリーフェンの一九一二年私案は仏国側の兵力増加とその攻勢作戦（一九〇五年頃は仏国が守備に立つものとの判断である）を予想して故に先んじてアントワープ、ナムールの隘路通過は期待し難く、従つて最初から敵翼の包囲は困難で一度敵線を突破するを必要と考え、全正面に対し攻撃を加えるを必要（一九〇五年案ロートリンゲン以東は守勢）とした。これがため兵力の増加を必要とし、全既教育兵を動員し、かつ師団の兵力を減ずるも兵団数を大増加すべしと主張した。もちろん主力は徹底的に右翼に使用する。

シュリーフェンは退職後も毎年作戦計画の私案を作り、クリスマスには必ず参謀本部のクール將軍に送り届けたのである。日本軍人もつて如何となす。

自由主義政治の大勢に押されていたドイツ陸軍もモロッコ事件やバルカン戦争並びに仏露の軍備充実に刺戟せられて一九一一年以来若干の軍備拡張を行ない、殊に一九一三年には参謀本部が平時兵力三十万の増加を提案して十一万七千の増加が議會を通過した。これらの軍拡が政治の掣肘を受けず果敢に行なわれたならばマルヌ会戦はドイツの勝利であつたろうとドイツ参謀本部の人々が常に口惜しがる場所である。

しかしドイツ軍部もこの頃は国防の根本に対する熱情が充分でなく、ややもすれば行き詰まりの人事行政打開に重点を置いて軍拡を企図した形跡を見遁す事が出来ない。平時兵団の増加

は固よりよろしいが、応急のため更に大切なのはシュリーフェンの主張の通り全既教育兵の完全動員に先ず重点を置かるべきであつたと信ずる。

モルトケ大将の作戦計画はシュリーフェン案を歪曲したものであるとして甚だしく攻撃せられる。これはたしかに一理がある。若しシュリーフェンが当時まで参謀総長であつたならば、ドイツは第一次欧州大戦も決戦戦争を遂行して仏国を属し戦勝を得たかも知れない（仏国撃破後英国を屈し得たか否かは別問題である）。しかしモルトケ案の後退には時代の勢いが作用していた事を見逃してはならない。

一九〇六年すなわちシュリーフェン引退の年、換言すれば決戦戦争へ徹底の頂点に在つたとも見るべき年にドイツ参謀本部は経済参謀本部の設立を提議している。無意識の中に持久戦争

への予感が兆し始めておったのである。この事は人間社会の事象を考察するに非常な示唆を与えるものと信ずる。特に注意を要するは、作戦計画の当事者が最も早くこれを感知した事である。言論界、殊に軍事界に於て経済的動員準備の必要が唱道せらるるに至ったのは遅れて一九一二年頃からである。しかしそれも固より大勢を動かすに至らず、財政的準備以外は何ら見るべきものが無かった。

「一九一四年七月初旬、内務次官フォン・デルブリュックは当時ロッテルダムに多量の穀物が在ったため、急遽ドイツ帝国穀物貯蓄倉庫を創設せんとした。しかしながらこれには五百万マルクを必要とし、大蔵大臣はこれを支出する事を肯んじ^{がえ}なかった。大蔵大臣はデルブリュックに書簡をもつてこの由を申し送った。曰く『吾人は決して戦争に至らしめないであろう。若し余が貴

下に五百万マルクの支出を承諾するならば、穀物を国庫の損失補償の下に売却すると同じである。これは既に困難なる一九一五年度の予算編成を更に一層困難ならしむるであろう』と。

結局資金は支出されず、予算編成は滞りなく済み、七十五万人のドイツ人は飢餓のため死亡した！」（アントン・チシュカ著『発明家は封鎖を破る』三四―五頁）

モルトケ大將はモルトケ元帥の甥で永くその副官を勤め、陸軍大学出身でなく参謀本部の勤務も甚だ短かった。参謀総長になつたのはカイゼルとの個人関係が主であつたらしい。シュリーフェンの弟子ではない。これがかえつてモルトケをして時代性を参謀本部の人々よりも敏感に感受せしめたらしい。

シュリーフェンの計画はベルギーだけでなくオランダの中立をも躊躇する事なく蹂躪するものであつた。私がドイツ留学中

少し欧州戦史の研究を志し、北野中将（当時大尉）と共同して戦史課のオットー中佐の講義を聴くことにした。同中佐は最初陸大で学生にでも講義する要領で問題等を出して来たが、つまらないのでこちらから研究問題を出して相当に苦しめてやった。ある日シュリーフェンはオランダの中立を犯す決心であつたろうと問うたところ、何故かと謂うから色々理由を述べ、特に戦史課長フェルスター中佐の著書等にシュリーフェンがアントワープ、ナムールの隘路を頻りに苦慮するが、それより前にリエージュ、ナムールの大隘路があるではないか、それを問題にしないのはオランダの中立侵犯の証拠であると詰り、フェルスター課長に聞いて来るように要求した。ところで次回にオットー中佐は契約書にサインを求めるから読んで見ると「貴官と戦史を研究するがドイツの秘密をあばく事等をしない」と云うような

事が書いてあった。オットー中佐はその知人に「日本人は手強い」とこぼしていたそうである。フェルスター中佐の名著『シュリーフェンと世界戦争』の第二版にマース川渡河強行のことを挿入した（四一頁）のはこの結果らしい。今でも愉快的な思い出である。フェルスター氏は更にその後アルゲマイネ・ツァイツングに「シュリーフェン伯はオランダも暴力により圧伏せんと欲したりや」という論文を出した。結局オランダを蹂躪するのではなく、オランダと諒解の上と釈明せんとするのである。

二七

ところが一九二二年モルトケ大将の細君がモルトケ大将の『思い出、書簡、公文書』を出版しているのを発見した。それを読んで見ると一九一四年十一月の「観察および思い出」に「……シュリーフェン伯は独軍の右翼をもつて南オランダを通過せん

とした。私はオランダを敵側に立たしむる事を好まず、むしろ我が軍の右翼をアーヘンとリンブルグ州の南端の間の狭小なる地区を強行通過する技術上の大困難を甘受する事とした。この行動を可能ならしむるためにはリュツチヒ（リエージュ）をなるべく速やかに領有せねばならない。そこでこの要塞を奇襲により攻略する計画が成立した」と記している。

オランダの中立を侵犯しないとせば独軍の主力軍がマース左岸に進出するのにオランダ国境からナムール要塞の約七十キロを通過せねばならず、この間にフイの止阻堡とベルギーの難攻不落と称するリエージュの要塞がある。リエージュは欧州大戦で比較的簡単に（それもこの計画の責任者とも云うべきルーデンドルフが偶然この攻撃に参加した事が有力な原因である）陥落したため、世人は軽く考えているが、モルトケとしては国軍

主力のマース左岸への進出に、今日我らの考え及ばぬ大煩悶をしたのを充分察してやらねばならぬ。

敵は既にアルザス・ロートリンゲンに対し攻撃を企図している事は大体諜報で正確だと信ぜられて来た。ところがロートリンゲンのザール鉱工業地帯のドイツ産業に対する価値は非常に高まっている。もちろん決戦戦争に徹し得れば、一時これを犠牲とするも忍ばねばならないとの断定をなし得るのであるが、持久戦争への予感のあつたモルトケとしてはこれも忍びない。

そこでモルトケ大將は、敵の攻撃に対しメッツ要塞を利用し、いわゆるニードの「袋」^{わな}に敵を誘致して一撃を与え、主力はマース右翼の敵の背後に迫るような作戦を希望したものらしい。あの年の参謀旅行で、敵がロートリンゲンに突進して来るのに、作戦計画の如く主力をマース左岸に進めんとする専習員の案に

対し、モルトケは「その必要はない。マース右岸の地区を敵の側背に迫るべきだ」と講評したとの事である。

二八

しかし無力なモルトケが、断然シュリーフェン伝統の大迂回作戦を断念する勇氣はあり得ない。参謀本部の空氣がそれを許すべくもない。また實際モルトケもそこまで徹底した識見は無かつたであらう。永年の伝統に捉われない自由さから、他の人々より持久戦争に対する予感が強かつたのだが、さりとて次の時代を明確に把握する事も出来なかつたろう。モルトケを特に凡庸の人というのではない。ナポレオンの如く、ヒットラーの如く特に幾億人の一人と云われる優れた人でなければ無理な事である。

一九一四年八月十八日頃のモルトケの煩悶はこの辺の事情を見

透せば自ら解るではないか。敵は予期した通りロートリンゲンに侵入して来た。しかしその態度が慎重でどうもニードの「袋」わなにかかるとどうか。リエージュはその間に陥落する。集中は予定通り出来る。敵の攻勢を待とうか、待ちたいが集中は終る。大迂回作戦を躊躇する事は全体の空気が許さないと云うような彼の心境であつたろう。

不徹底なる計画、不徹底なる指揮は遂にマルヌ会戦の結果となつた。しかし事ここに至つたのは一人のモルトケを責める事は少々無理である事が判つたであらう。時の勢いに見ねばならぬ。

モルトケ大將はマルヌに敗れて失脚し、陸相ファルケンハインが参謀総長を兼ねる事になつた。彼は軍団長の経験すらなき新参者で大拔擢である。ファルケンハインは西方に於て頽勢の

挽回に努力したが遂に成功しなかった。ルーデンドルフ一党からは一九一四年、特に一九一五年ルーデンドルフ等の東方に於ける成功に乘じ、彼らの献策を入れて敢然東方に兵力を転用しなかつた事を攻撃せられる。彼らの云う如くせば、露国に一大打撃を与え戦争全般の指導に好結果をもたらしただであらう。しかし広大な地域を有する露国に決戦戦争を強いる事は、当時恐らく困難であつたろうと判断せられる。

ファルケンハインの失脚に依りヒンデンブルク、ルーデンドルフの世の中となった。ドイツの軍事的成功は偉大なものがあつたが、経済的困難の増加に伴い全般の形勢は逐次ドイツに不利となりつつあつた。ドイツとしては軍事的成功を活用し、米国大統領の無併合、無賠償の主義を基礎として断固和平すべきであつた。政略関係は総て和平を欲していたのにルーデンドルフ

は欧州大戦はクラウゼウィッツの「理念の戦争」であり連合国は同盟国を殲滅せざれば止まないのだから、この戦争に於ける統帥は絶対に政治の掣肘を受くべきにあらずとして政戦略の不一致を増大し、「こうなった以上は最後まで」と頑張つて遂にあの惨敗となつたのである。ルーデンドルフ一党はデルブリュックの言う如く戦争の本質に対する明確な見解を持たなかつたのである。即ちナポレオン以後は決戦戦争が戦争の唯一のものであると断定して、彼らが既に持久戦争を行ないつつある事を悟り得なかつたのである。

一九

しかしあのドイツの惨敗、あの惨忍極まるベルサイユ条約の強制が、今日ナチス・ドイツの生まれる原動力をなした事を思えば生半可の平和より彼らのいわゆる「英雄的闘争」に徹底し

た事が正しかつたとも云えるのである。天意はなかなか人智をもつては測り難いものである。

ルーデンドルフは潜水艇戦術その他彼の諸計画は皆殲滅戦略に基づくものだと言主張している。殲滅戦略、消耗戦略問題でデルブリュック教授と頻りに論争したのであるが、特にルーデンドルフは両戦略の定義につき曖昧である。政治の干渉を排して無制限の潜水艇戦を強行したから殲滅戦略だと言うらしいが、我らの考えならば潜水艦戦は厳格な意味に於て殲滅戦略とは言い難い。

二〇

露国の崩壊によつて一九一八年西方に大攻勢を試みたルーデンドルフはこれを殲滅戦略の断行と疾呼する。その軍事行為の一節を殲滅戦略と云い得るにせよ、ルーデンドルフにはあの戦

略を最後まで徹底して実行し、大陸の敵主力を攻撃し、少なくとも仏国に決戦戦争を強制せんとする決意ではなかったのである。即ち、持久戦争中の一節として殲滅戦略を行なったに過ぎない。フリードリヒ大王が持久戦争の末期に困難を打開せんとして断行したトルゴウ会戦と類を同じゅうする。

ルーデンドルフが一九一八年の三月攻勢の攻勢方面につき、クルール大将の提案であるフランデルン攻勢とサンカンタン攻勢を比較するに当り、戦略上から云えば前者を有利と認めている。しかるにサンカンタン案をとったのは専ら戦術上の要求に依ると称している。

真に仏国に決戦を強いんとするならばサンカンタン附近を突破し、英仏軍を中断して運動戦に導き、敵主力を破る事が戦略上最も有利とする事は云うまでもない。

しかるにルーデンドルフは当時の独軍は既にかくの如き運動性を欠くと判断し、英軍を撃破して英仏海峡沿岸を占領するのが敵の抵抗を断念せしむる公算が大きいから、フランドルン攻勢は戦略上有利と主張したのである。ルーデンドルフは現実には決戦戦争は行なえぬものと考えていたのである。

三月攻勢の目標は英軍を撃破して英仏海峡に突進するにあつた。それで仏軍に対しては攻勢の進展に伴いソムムの線を確保して左側を完全に考える考えであつた。しかるに攻勢初期は予期以上に好結果を得たので、ルーデンドルフは何時の間にも最も初の目標を変えてソムム南岸に兵を進め、更に大規模な作戦に転じようとしたのである。しかしながらこの攻勢は遂に頓挫してしまつた。彼は後に、攻勢頓挫につき「運動戦に到達するこゝとが出来なかつた」と云うておる。結局彼は英仏海峡にも達し

得ず、大規模の運動戦にも転じ得ず、かえって新しき占領地区の左翼方面に不安を来たしたのである。

再度言うが、ドイツ軍事界の戦争の性質に関する見解の固定が、開戦前に予期したと全く異なった戦争状態になつてもなおそれらを悟り得なかつた事が、一九一八年攻勢の指導にまで重大な影響を与えたのである。

かくてドイツは統帥部の「こうなつた以上は徹底的に」と云う主張に引きずられ、軍部も実は自信を失い政治はもちろん信念はなかつたに拘らず、遂に行く所まで行つてベルサイユの屈辱となつたのである。

万人の予期に反して四力年半の持久戦争となつたその第一原因は兵器の進歩である。機関銃の威力は甚だ大きく、特に防禦に有利である。堅固に陣地を占め、決意して防禦する敵を突破

する事は至難である。これに加うるに兵力の増大が遂に戦線は海から海におよび迂回を不可能にした。突破も出来なければ迂回も不可能で、遂に持久戦争になったのである。

これはフランス革命で持久戦争から決戦戦争になったのとは状態を異にしている。即ちフリードリヒ大王の使った兵器も、ナポレオンの使用したものもほとんど同一であつたのであるが、社会革命が軍隊の本質を変化し、在来の消耗戦略を清算し得た事が決戦戦争への変転を来たしたのであつた。

第九節 第二次欧州大戦

持久戦争は勢力ほぼ相伯仲する時に行なわれるのである。第二次欧州大戦でドイツのいわゆる電撃作戦が、ポーランドやノルウェーの弱小国に対して迅速に決戦戦争を強行し得た事はも

ちろん驚くに足らない。英仏軍と独軍はマジノ、ジークフリードの陣地線の突破はお互にほとんど不可能で、結局持久戦争になるものと常識的に信ぜられていた。

しかるに一九四〇年五月十日、独軍が西方に攻勢を開始すると疾風迅雷、僅かに七週間で強敵を屈伏せしめて、世界戦史上未曾有の大戦果を挙げ、仏国に対しても見事な決戦戦争を強行し得たのである。

五月十日攻勢を開始すると、先ず和（オランダ）、白（ベルギー）、仏三国の主要飛行場を空襲して大体一両日の中に制空権を得て、主として飛行機と機械化兵団の巧妙な協同作戦に依つて神速果敢なる作戦が行なわれた。殊に民族的にも最も近いオランダには内部工作が巧みに行なわれていたらしく、空輸部隊の大胆な使用と相俟つて五日間にこれを屈伏せしめる事が出来

た。

ベルギー方面に侵入した独軍また破竹の勢いでマース川の大障害を突破して西進、特にアルデンヌ地方に前進した部隊は仏軍の意表に出でて五月十日既にセダン附近に於てマースを渡河し、マジノの延長線を突破したのである。

三

シュリーフェン以来独軍の主力は右翼にあるものと定まっていたのに、今日はアルデンヌの錯雑地を経て一挙北部フランスに突入した。

奇襲的效果は甚大であつた。セダンの破壊口からドイツ軍は有力な機械化兵団を先頭として突入し、一九一八年三月攻勢にルーデンドルフが考えたようにエーヌ、オアーズ、ソムム等の河や運河を利用して左側背の掩護を確実にしながら主力は一路

西進、たちまちアブヴィルに達した。同地では仏軍の一部が悠
悠鍊兵場で訓練中であつたとの事である。いかに独軍の進撃が
神速であつたかを物語っている。

かくてフランドルとアルトアにあつた英白軍および仏の有力
部隊は瞬く間に包囲せられ、五月二十二日頃にはその運命が決定
した。独軍の包囲圈は刻々縮小せられ、形勢非なるを見てとつた
英軍は匆々^{そうそう}本国への退却を開始した。この情況を見たベルギー
皇帝は五月二十八日無条件で独軍に降伏した。

形勢は更に急転、英仏軍は多数の降伏者を生じ、六月四日に
はダンケルク陥落、遂にこの方面の作戦を終了した。

僅々二週間で和、白両国は降伏。英仏軍の有力なる部隊は撃
滅せられその一部が辛うじて本国に逃げ帰つた。

六月五日には独軍は早くもソナムの強行渡河に成功、仏国の

抵抗意志は急速に低下して到るところ敗退、六月十四日独軍パリに入城、六月二十五日休戦成立した。

ドイツの作戦はまるで神業のようで持久戦争の時代は過ぎ去り、再び決戦戦争の時代到来せるやを信ぜしめる。しかしそれについては充分慎重な観察が必要である。

先ず第一に戦術上の観察を試みよう。独軍の成功は主として飛行機、戦車の威力であつた。第一次欧州大戦當時に比して、この両武器は全く面目を一新しており、殊に飛行機が軍事上の革命を生ぜんとしている事は確実である。しかしこの両武器に對して、しかく簡単に正面は突破せらるべきであらうか。独軍はたちまち制空権を獲得して思う存分仏軍の後方を攻撃した。ために交通は大混乱に陥り、かつ集団して行動する部隊は絶對なる脅威を受けて動作の自由を失つた事は当然である。しかし

戦闘展開を終り準備を終えている軍隊に対する飛行機の攻撃はさして大なる威力を発揮し得るものではない。

戦車は準備なき軍隊、特に狼狽した軍隊に対してはその威力は頗る大きい。けれども地形の制限を受ける事多く、戦場ではほとんど盲啞である。沈着かつよく準備せられた軍隊に対しては左程猛威を逞しゅうし得るものではない。殊に考うべきことは対戦車火器の準備は戦車の準備に比して容易な事である。

戦車が敵陣地を突破し得てもその突破口が敵に塞がれ、続行して来る歩兵との連絡を絶たれる時は、戦車は間もなく燃料つきで立往生する。であるから真に近代的に装備せられ、決心して守備する敵陣地の突破はなかなか容易の事ではない。

マジノ線を仏国人は難攻不落のものと信じていた。しかるに独軍占領後の研究に依れば、マジノ線の築城編成は第一次欧州

大戦の経験を主として専ら火砲の効力に対抗する事だけを考えて、攻者の新兵器に対する考慮が充分払われていなかった。即ち自由主義フランスはドイツの真剣なる準備に対抗する迫力を欠いていたのである。

ドイツ軍は空軍と戦車、それに歩兵の密接なる協力に依つて築城の中間地を突破する方式に出て、フランス軍の意表に出たのである。

殊に自由主義国フランスの怠慢はマジノ線の北端をベルギー国境に託して自ら安心し、迂回し得る陣地であつた事である。いわゆるマジノ延長線は紙上計画に止まり大体有事の日、工事に取リかかる考えであつたが、開戦後は労働力の不足等の關係で大して工事を施されていなかった。またマジノ線に連接してベルギーがリエージュを主体としてマジノ線に準じた築城を完成

する約束であつたが、事實は大して工事が行なわれていなかった。

ドイツ軍は実にこの虚をついたわけである。運動戦となるや独軍の極めて優れた空軍と機械化兵団が連合軍の心胆を奪つて大胆無比の作戦をなし遂げ得た。

あの極めて劣勢なフィンランドが長時日良く優秀装備のソ軍の猛攻を支えた事は今日でもいかに防禦力の大であるかを示している。今度の作戦でもフランデル方面に於て敵の正面に衝突した独軍の攻撃はなかなか簡単には成功しなかつたらしいのである。空軍の大進歩、戦車の発達も充分準備し決心して戦う敵線の突破は至難である事を示している。

第一次欧州大戦では仏、白の戦闘意志は英国のそれに劣らぬものであつたが、今回は余程事情を異にしていたらしい。フラ

ンスの頹廢的気分、支配階級の「滅公奉私」の卑しむべき行為はアンドレ・モーロアの『フランス敗れたり』を一読する者のただちに痛感するところである。

英国の利己的行為は仏、白との精神的結合を破壊していた。数年前ドイツがライン進駐を決行した時、仏国が断然ベルサイユ条約に基づいてドイツに一撃を加うべく主張したのに対し英国は反対し、その後も作戦計画につき事毎に意見の一致を見なかつたと伝えられる。真に二国が衷心一致してドイツの進攻に抗する熱意があつたならば独、自国境の築城は必ず完成されているべきであつたし、今後の作戦についても更に緊密な協同行なわれたであろう。

戦略的に見れば戦力の著しく劣つた仏国は国境で守勢をとるべきであり、軍当局はこれを欲したのである。しかし政略はこ

れを許さない。止むなく有力な主力軍をベルギーに進め、ドイツの電撃作戦に依つて包囲せらるるや、利己主義の英国はたちまち地金を現わして本国へ退却の色を見せる。若し英国が真に戦うならば本国は全く海軍に一任し、あらゆる手段を尽してその陸軍を大陸に止むべきであつた。英国の態度はベルギーの降伏となり、フランスの戦意喪失となつたのは当然である。

かく考えて来る時は無準備でしかも統一と感激なき自由主義国家と、鉄の如き意志に依り完全にしかも深き感激の下に統一せられ、総力を極度に合理的に集中運用せる全体主義国との対立であつて、断じて相匹敵する戦争力の争いではない。即ち時代が決戦戦争となつたのでなく、両方の力の著しき差があの歴史上無比の輝かしき決戦戦争を遂行せしめたのである。

特にこの際我が国民に深き反省を要求するのは、自由主義国

家と全体主義国家の戦争準備に対する能力の驚嘆すべき差である。老大富裕国英仏が、戦後の疲れなお医いやし切れなかつた貧乏国ドイツに対し、ナチス政権確立後僅々数年でかくの如き劣勢に陥つたのである。この事は満州事変後我が国が極東作戦準備につきソ連との間に充分経験した事である。満州事変頃は両国の戦争力相伯仲していたが、僅かに数年のうちに彼我戦力の差に隔りを見た事がその後の東亜不安の根本原因である。

速やかに我らは強力なる統制の下に世界無比の急速度をもつて我らの戦争力を向上せしめねばならぬ。

今日フランスに対しては輝かしき決戦戦争を完遂したドイツも、海を隔てた英国に対しては殲滅戦略の続行が出来なくなり持久戦争になる公算が依然極めて大きい。ドイツが英国に対し殲滅戦略、即ち上陸作戦を強行するためには英仏海峡の制海権

が絶対に必要である。また制海権を得たとしても上陸作戦の困難は極めて大きい。制海権のため海軍力の劣勢なドイツは主として空軍に頼らねばならぬ。我らは常識的に、仏国海岸を占領したなら空軍の優勢なドイツは英近海の海運に大打撃を与え、英国はそれだけでも屈伏するだろうと考えていたが、今日までの結果を見ると飛行機による艦船の爆沈は潜水艦の威力に及ばぬ状態である。英仏海峡は依然英国海軍の支配下にあるらしい。今後果してドイツがこの海峡の制海権を獲得し得るや否やが決戦戦争の能否の第一分岐点である。

昨年九月以降のロンドン猛爆の結果より見て、今日の発達した空軍でもなお空軍による決戦戦争は不可能のようである。

要するにフランス革命に依つて国民的軍隊が生まれ、職業軍時代の病根を断つて殲滅戦略が採用せられ、その威力の及ぶ範

囲に於て決戦戦争が行なわゆる事となつた。しかし兵器の進歩は攻防両者に対する利益は交互的に現わゆる傾向があるものの、大勢は防者に有利となり逐次正面の突破を困難にした。それでも兵力少ない時代は敵翼を迂回包囲する見込みがあつたのである。正面突破の困難増大し、しかも決戦戦争の要ますます切となつて来たドイツが、シュリーフェンの「カンネ」思想を生んだのはこの時代的要求の結果である。

国民皆兵の徹底が兵力を増大し、人口密度大なる欧州の諸国家では国軍をもつて全国境を守備するに足る兵員を得るようになり、遂に迂回を不可能として持久戦争の時代に入つたのである。

毒ガス、戦車等第一次欧州戦争の末期既に敵正面突破のため相当の威力を示して持久戦争から脱け出そうとあせつたが、大

戦後は空軍の進歩甚だしく、これに依つて敵軍隊の後方破壊と直接軍隊の攻撃に依つて敵陣地を突破せんとする努力と、更に進んで敵政治の中心を攻撃する事に依つて敵国を屈伏せんとする二つの考えが生じて来、決戦戦争への示唆を与えつつ第二次欧州大戦となつた。ドイツは飛行機、戦車の巧妙なる協同に依り敵陣地突破に成功して大陸諸国に対し決戦戦争を遂行した。しかしこれは結局相手国がドイツに対する真剣な準備を欠いたためで、地上兵力に依る強国間の決戦戦争は依然至難と考えられる。

第二の空軍をもつて敵国中心の攻撃に依る決戦戦争は、英、独の間に於ける実験により今日なお殆んど不可能である事を実証した。しかし空軍主力の時代が来れば初めて海も持久戦争の原因とはならない。空軍の徹底的発達がこの決戦戦争を予告し、

それも地上作戦でなく敵国中心の空中襲撃に依る事は疑いを入れない。地球の半周の距離にある敵に対し決戦戦争を強制し得る時は、世界最終戦争到来の時である。

第三章 会戦指導方針の変化

第一節 会戦の二種類

戦争の性質に陰、陽の二種あるように、会戦も二つの傾向に分ける事が出来る。

1 最初から方針を確立し一挙に迅速に決戦を求める。(第一線決戦主義)

2 最初は先ず敵を傷める事に努力し機を見て決戦を行なう。(第二線決戦主義)

両者を比較すれば、

三三

第一線決戦主義

- 一、将帥は決戦の方針を確立して攻撃を行なう。
- 二、第一線の兵力強大、予備は少し。
- 三、最初の衝撃を最も猛烈に行なう。
- 四、偶然に支配せらるる事多く奇効を奏するに便なり。

三三

二四

第二線決戦主義

- 一、将帥は会戦経過を見て決戦の方針を決定す。
- 二、極めて有力なる予備隊を設く。
- 三、最後の衝撃を最も猛烈に行なう。

四、堅実にして偶然に支配せらるる事少なく兵力が最も重大なる要素なり。

二五

第二節 二種類に分るる原因

1 武力の韌強性

2 国民性および将帥の性格

攻撃威力が強い、逆に防禦の能力の脆弱な戦闘、換言すれば勝敗の早くつく戦闘では自然第一線決戦主義が採用せらる。例えて言えば騎兵の密集襲撃のようなものである。これに反し防禦が韌強である時は急に勝負がつき難い。みだ妄りに猪突するは危険で第二線決戦主義が有利となる。それ故この二種類はその時代の軍隊の性格に依る事が最も多い。特に兵器が進歩して来れ

ば来る程、国民性や将帥の性格の及ばず影響が小さくなるのは当然である。

古代、兵器が極めて単純であつた時代は、国民性の会戦指導要領に及ばず影響は比較的大であり得た訳である。ギリシヤ人は強大な大集団を作りこれをフアランク스와名付けた。この大集団に依る偉大な衝力に依り一挙に決勝を企図したのである。これに対しローマ人はレギオンと称し比較的小きな集団を編制した。これは行動の自由を利用して巧みに敵に損害を与え、敵を攪乱し、適時機を見て決戦を行なわんとするのである。すなわちギリシヤ人は第一線決戦主義に傾き、ローマ人は第二線決戦主義を好んだのである。第一線決戦主義は理想主義的であり、第二線決戦主義は現実主義的である。

蓋しギリシヤ人は哲学や芸術に秀で、ローマ人は実業に秀でけだている民族性と会戦方式に相通ずるものがあるを見るであらう。田中寛博士の『日本民族の将来』に依れば、古代ギリシヤ人は今日のギリシヤ人と異なり北方民族であつた。

今日段々高度の武装をなし民族性の影響は昔日に比し大となり難いのであるが、第一次欧州大戦初期の両軍作戦を見るに、固より他にも色々の事情はあつたであらうが、ローマ民族に近いフランスは第一第二軍をして先ず敵地に侵入せしめ後方に第四軍等を集結し、戦況に応じて主決戦場を決定せんとする態勢を整えているのに対し、ギリシヤ人に近いドイツは主決戦場を右翼に決定、強大兵団をこの目的に応じて戦略展開を行ない、一挙に敵軍の左側背に殺到せんとしたのである。

今日でもなお民族性が会戦指揮方針のみならず軍事の万般に

わたり相当の影響を与えつつある事を見るのである。

将帥の性格も同じ意味に於て個性を発揮するものと云うべきである。ナポレオンもアウステルリッツの如く第一線決戦を企図した事はある。また当時の縦隊戦術は後述する如く自然第二線決戦主義を有利とするのであるけれども、第二線決戦はナポレオンの最も得意とするところである。地中海民族から第二線決戦の最大名手を出した事は面白いではないか。

また北方民族から第一線決戦の最大名手フリードリヒ大王を出したことは時代の勢いであつたとは言え必ずしも偶然とのみ言えない。

二七

用兵上に民族性が作用する事は当然軍事学上にも同じ傾向となつて現われる。

フオツシュ元帥が伊藤述史氏に言うたように（一四五頁）軍事学もまた当然民族の性格の影響を受ける。帰納的であるクラウゼウィッツと演繹的であるジョミニーは独仏両民族の傾向を示すものと云うべきだ。一八七〇―七一年独仏戦争に於ける大勝の結果、フランスに於てもモルトケ、クラウゼウィッツの研究が盛んになった。一九〇二年のボンナール『独仏高等兵学的方式について』には「ジョミニーの論述する如き一般原則から敷衍ふえんせる戦法の系統は謬妄、危険で絶対に排斥すべきもの」と言っている。しかしフランスでは依然ジョミニー流の思想が相当有力で、殊に第一次欧州大戦の勝利はクラウゼウィッツの排撃派に勢いを与えたようで、一九二三年発行カモン將軍の『ナポレオンの戦争方式』には「一八七〇年以後は普軍に倣う風盛んで、先ずホーエンローネー、ゴルツ、ブルーメー、シエルフ、

メッケル等が研究され、次いでその源泉であるクラウゼウィッツに及んだ。一八八三―八四年にはカルドー少佐が陸軍大学でクラウゼウィッツにつき大講演を行なった。……兎に角一八八三年以来、クラウゼウィッツの主義は我が陸軍大学で絶えず普及せられ、ナポレオンの戦闘方式の完全なる理解に大なる障害を為した」と論じ、ジョミニーの為した如くナポレオンの方式を発見するに力を払っている。

ドイツの有名な軍事学者フライタハ・ローリンググホーフエンは「仏人の思想は戦争の現象を分析するクラウゼウィッツ観察法よりも、ジョミニーの演繹法えんえき、厳密なる形式的方法を絶対的に好んでいる」と評し、ジョミニー流であるワルテンブルグ（『将帥としてのナポレオン』の著者）の研究が独軍に大なる影響を与えなかつた事を喜んでいる。フライタハはクラウゼウィッツ

研究の大家である。クラウゼウィッツの思想は全独軍を支配している事を俟^またない。

我ら日本軍人が西洋の軍事学を学ぶについてはよく日本民族の総合的特性を活用し、高所大所より観察して公正なる判断を下し独自の識見を持たねばならぬ。

第三節 歴史的觀察

民族性、将帥の性格が会戦指揮方針に与える作用も前述の如く輕視出来ないが、兵器の進歩に依る当時の武力の性格の影響は更に徹底的であり、大体は時代性に左右せられる。

横隊戦術、殊にその末期軍隊の性質に制せられて兵器の進歩と協調も失うに至った後の横隊戦術は技巧の末節に走り、鈍重にして脆弱であり、特にその暴露した側面は甚だしい弱点を成

形していた。横隊戦術は第一線決戦主義が最も合理的である。殊に当時猛訓練と軍事学の研究に依つて軍隊の精銳に満腔の自信を持っていたフリードリヒ大王には世人を驚嘆せしむる戦功を立てしめたのである。

第一線決戦の特徴として兵力の多寡は第二線決戦のように決定的でない。フリードリヒ大王時代は寡兵をもつて衆を破る事が特に尊ばれたのである。大王は十三回の会戦中敗北三回で、十回の勝利のうち六回は優勢の敵を破り、一回といえども著しい優勢をもつて戦つた事はない。有名なロイテンの如きは二倍強、ロスバハは三倍の敵を撃破したのである。

しかしかくの如き大勝も既に研究した如く持久戦争の時代に於ては、ナポレオンの平凡なる勝利の程にも戦争の運命に決定的影響を与え得なかつたのである。消耗戦略、機動主義の必然

がそこに存在したのである。

フランス革命に依つて散兵——縦隊戦術となると、この隊形は傭兵に馴致せられた横隊戦術の矛盾を一擲して強韌性を増し、側面に対する感度を緩和した。会戦は自然に第二線決戦式となつたのである。戦場に敵に優る強大な兵力を集結する戦術一般の原則が最も物をいう事となつた。ナポレオンは三十回の会戦中二十三回は勝利を占め、うち十三回は著しい優勢をもつて戦い、劣勢をもつて勝つたのは僅かに三回でしかも大会戦と認むべきはドレスデンのみである。第一線決戦式に比し第二線決戦式は奇効を奏する事が比較的困難であり、ナポレオンの有名な会戦中マレンゴはあやしい勝利であり、特に代表的であるアウステルリッツ（第一線決戦）、イエナでも技術的に見てフリードリヒ大王のロイテン、ロスバハには及ばない。然しナポレオンの勝

利はほとんど常に戦争の運命に決定的作用を及ぼしたのである。モルトケ元帥は幕僚長で将帥ではない。殊にモルトケ時代の普国の戦争には皆卓越せる戦争準備によつて敵国を撃破した。当時の会戦は大体第一線兵団を戦場に向う前進に部署するだけで、実行は第一線司令官に委ね、フリードリヒ大王やナポレオンの会戦のように強烈なる最高統帥の指揮を見なかった。

兵器特に撃針銃の採用進歩は散兵の威力を増加して逐次戦闘正面を拡大して再び横広い隊形となった結果、自然会戦指揮は再び第一線決戦主義に傾いて来たが、シュリーフェン全盛時代までは「緒戦、戦闘実行、決戦」と会戦時期を三区分していたように、やはりナポレオン時代の第二線決戦の風も当時残っていたのである。

シュリーフェン時代となると戦闘正面はますます拡大せられ、

敵の側背を狙う迂回包囲はますます大胆となるべく唱導鼓吹せられ、第一線決戦主義に徹底して来た。会戦の方針は、既に集中決定の時に確立せられ、敵の側背に向い決戦を強行断行するのである。シュリーフェンの「カンネ」の一節に「翼側に於ける勝利を希うためには最後の予備を中央後でなく、最外翼に保持せねばならぬ。将帥の慧眼が広茫数十里に至る波瀾重疊の戦場に於て決戦地点を看破した後、初めて予備隊を移動するが如き事は不可能である。予備隊は既に会戦のための前進に当り、脚下停車場より、更に適切に云えば鉄道輸送の時から該方面に指向せられねばならぬ」と言っており、この大軍の会戦への前進はモルトケ元帥の如く単に方針のみを与えて第一線司令官の自由に委せるのではなく、全軍あたかも大隊教練のように「眼を右、触接左」に前進すべき事を要求している。丁度フリード

リヒ大王の横隊戦術を大規模にした観がある。

第一次欧州大戦初期は前に述べたようにフランス軍の会戦方針はやや第二線決戦的色彩を帯びていたが（勿論徹底せるものではない）、独軍は第一線決戦主義が極めて明確である。シュリーフェン案の如く徹底したものではなかったが、兎に角独軍のベルギー侵入よりマルヌまでの作戦はあたかもロイテン会戦を大々的に拡大した観を呈している。

ところが持久戦争に陥り戦線が逐次縦深を増して来るに従い、会戦指揮の方針は自然第二線決戦主義となつて来た。局部的戦闘では奇襲に依り第一線決戦的に指導せらるる事もちろんであるが、それだけでは縦深の敵陣地帯を完全に突破する事は至難で、その後絶大なる予備隊の使用に依つて会戦の決定を争う事になる。

ドイツが最後の運命を賭した一九一八年の攻撃は五回にわたつて行なわれ、第五回目に敵の攻勢移転にあつて脆くも失敗、遂に戦争の決を見るに至つた。

普通に見れば一回の攻勢が一会戦とも言われるけれども、更に大観すれば三月から八月にわたる全作戦を一大会戦とも見る事が出来る。即ちドイツ軍は多数師団の大予備隊を準備し、数次にわたつて敵の戦術的弱点を攻撃してなるべく多くの敵の予備隊を吸収（即ち個々の攻撃は全軍の見地からすれば一戦闘である）し、敵予備隊の消耗を計つて敵が予備の貯え無くなつた時、自分の方は未だ保存している強大なる予備隊に依つて一挙に敵を突破する方式であつたと見ることが出来る。独軍最高司令部は必ずしもそう考えていなかったし、各攻勢の間隔大に過ぎ（準備上短縮は不可能であつたろう）て、敵に対応の準備

を与え、敵も巧みに予備隊を再建し得て、独軍七月十五日の攻勢には既にその勢い衰えつつあったのに乗じ、全軍の指揮を委任せられたフォッシュ將軍の英断と炯眼けいがんによつて独軍攻勢の側面を衝き、遂に攻守處を異にして連合軍勝利の基を開いたのである。固より独軍の全敗は国内事情によること最も大であるけれども、作戰方面から見れば仏軍があたかも火力をもつて敵をいため、敵の勢力を消耗した好機に乘じ攻勢に転ずるいわゆる「火力主義の攻勢防禦」を大規模にした形で最後の勝利を得たのである。

二八

第一線決戦の名手フリードリヒ大王の傑作ロイテンと第二線決戦の名手ナポレオンの傑作リーニの両会戦につき簡単に述べて参考としよう。

一、ロイテン会戦

ロスバハに仏軍を大いに破ったフリードリヒ大王は戦捷の余威を駆って一挙に奥軍をシュレージエンより撃攘せんとしブレスラウに向い転進した。十二月五日大王はジュミーデ山よりロイテン附近に陣地を占領せる敵軍を觀察し、その左翼を攻撃して一挙に敵を撃破するの決心を固めた。

二九

これがため大王は普軍の先頭がベルン村近くに到着せるとき、これを左へ転廻せしめ巧みに凹地及び小丘阜を利用しつつ我が企図を秘匿してロベチンス村に入り、横隊に展開せしめた。

午後一時大王は梯隊をもつて前進すべきを命じた。

奥軍は普軍の斜行前進によりその左翼を急襲せられ、その

翼をロイテン東方に下げて普軍に対せんとしたのであるが、普軍の猛烈果敢なる攻撃と適切なる砲火の集中により全く対応の処置を失い、たちまちにして潰乱するに到った。

本戦闘は午後一時より四時過ぎまで継続せられたがオーストリア軍の死傷は一万、砲百三十一門、軍旗五十五旒を失い、その捕虜は約一万二千に達した。本戦闘はフリードリヒ大王が三万五千の寡兵をもって六万四千の奥軍を撃破せる大王会戦中の傑作であつて、兵力を一翼に集結し一挙に決戦を強要せる好範例である。

三〇

二、リーニ会戦

一八一五年六月十五日オランダ国境を突破せるナポレオンはネー将軍に一部を授けて英軍に対せしめ、主力（七万三

千）を率いて、ブリュッヘル軍を攻撃すべくリーニーに向い前進した。

ブリュッヘルは三軍団の兵力（八万一千）をもつて、リーニー川の線に陣地を占領し、英将ウエリントンの来援を頼んでナポレオンと決戦せんと企図していた。

ナポレオンはフルイルース附近を前進中詳細なる偵察の後、一部をもつて普軍の左翼を牽制抑留し、右翼中央に対し攻撃を加えて普軍の全力を吸収消耗せしめ、その疲労を待つて予備隊をもつて一挙に止めを刺さんと計画を立てた。

これがため敵の左翼に対してはグローチの騎兵隊をもつて牽制せしめ、敵の右翼に対しては第三軍団をもつてセント・アルマント村を、中央に対しては第四軍団をもつてリーニー村を攻撃せしめ、予備隊として近衛、第四騎兵軍団並びに

後続第六軍団をあてた。

戦闘は午後二時頃より開始せられた。

グローチ元帥は巧妙なる指揮によりプロイセン第三軍団をその正面に抑留するに成功したが、我が左翼方面に於ては第三軍団は、セント・アルマント村の争奪を繰り返し、戦況は極めて惨澹たるものがあつた。

午後五時頃普将ブリュッヘルは待機中の残余部隊をリーニ、セント・アルマント村に進め仏軍の左翼を包囲せんと企図し猛烈なる攻撃を加えてきた。ナポレオンは一部をもつて前線を救援せしめたがなお主力は参加せしめず戦機の熟するを待った。午後七時過ぎ普軍は全くその予備隊を消耗するに至った。あたかもよし、後続第六軍団はこの頃戦場に到着した。ここに於てナポレオンは、砲七十門をもつ

て普軍の中央に対し準備砲撃を加え、近衛の一部、騎兵第四軍団、第六軍団を以ってリーニーに向い中央突破を敢行せしめた。普軍は戦力全く消耗して対応の策なく遂に敗退しブリュッヘルは危うく捕虜とならんとして僅かに逃るる事が出来た。

本会戦はナポレオン得意の中央突破戦法であつて第二線決戦の好範例である。

第四章 戦闘方法の進歩

第一節 隊形

古代の戦闘隊形は衝力を利用する密集集団方式であつた。中世騎士の時代となつて各個戦闘となり、戦術は紊みだれて軍事的にも

暗黒時代となった。ルネッサンスは軍事的にも大革命を招来した。火薬の使用は武勇優れた武士も素町人の一撃に打負かざる事となつて歩兵の出現となり、再び戦術の進歩を見るに至つたのである。

火薬の効力は自然に古の集団いにしえを横広の隊形に変化せしめて横隊戦術の発達を見た。横隊戦術の不自然な停顿と、フランス革命による散兵戦術への革新については詳しく述べたから省略する。

一概に散兵戦術と云うも最初は散兵はむしろ補助で縦隊の突撃力が重点であつた。それが火薬の進歩とともに散兵に重点が移つて行つた。それでもなおモルトケ時代は散兵の火力と密集隊の突撃力との併用が大体戦術の方式であつた。それが更に進んで「散兵をもつて戦闘を開始し散兵をもつて突撃する」時代

にすすみ、散兵戦術の発展の最後の段階に達したのがシュリーフェン時代から欧州大戦までの歴史である。

第一次欧州大戦で決戦戦争から持久戦争へ変転をしたのであるが、戦術もまた散兵から戦鬪群に進歩した。フランス革命当時は、先ず戦術的に横隊戦術から散兵戦術に進歩し、戦争性質変化の動機ともなったのであるが、今度は先ず戦争の性質が変化し、戦術の進歩はむしろそれに遅れて行なわれた。

最初戦線の正面は堅固で突破が出来ず、持久戦争への方角をとるに至ったのであるが、その後砲兵力の集中により案外容易に突破が可能となった。しかし戦前逐次間隔を大きくしていた散兵の間隔は損害を避けるため更に大きくなり、これは見方に依つては第一線を突破せらるる一理由ともなるが、その反面第一線兵力の節約となり、また全体としての国軍兵力の増加は、

限定せられた正面に対し使用し得る兵力の増大となり、かくて兵力を数線に配置して敵の突破を防ぐ事となった。いわゆる数線陣地である。

しかし数線陣地の考えは兵力の逐次使用となつて各個撃破を受くる事となるから、自然に今日の面の戦法に進展したのである。欧州大戦に於ける詳しい戦術発展の研究をした事がないから断定をはばかりが、私の気持では真に正しく面の戦法を意識的に大成したのは大戦終了後のソ連邦ではないだろうか。

大正三年八月の偕行社記事かいこうの附録に「兵力節約案」というものが出てゐる。曾田中將の執筆でないか、と想像する。それは主として警戒等の目的である。一個小隊ないし一分隊の兵力を距離間隔六百メートルを間して鱗形に配置し、各独立閉鎖堡とする。火力の相互援助協力に依り防禦力を發揮せんとするもの

で、面の戦法の精神を遺憾なく發揮しているものであり、これが世界に於ける恐らく最初の意見ではないだろうか。果して然りとせば今日までほとんど独創的意見を見ない我が軍事界のため一つの誇りと言うべきである。

古代の密集集団は点と見る事が出来、横隊は実線と見、散兵は点線即ち両戦術は線の戦法であり、今日の戦闘群戦術は面の戦法である。而してこの戦法もまた近く体の戦法に進展するであらう。

三

否、今日既に体の戦法に移りつつある。第二次欧州大戦でも依然決戦は地上で行なわれ、空中戦はなお補助戦法の域を脱し得ないが、体の戦法への進展過程であることは疑いを容れない。線の戦法の時でも砲兵の採用は既に面の戦法への進展である。

総ての革新変化は決して突如起るものではない。もちろんある時は大変化が起り「革命」と称せられるけれども、その時でさえよく観察すれば人の意識しない間に底流は常に大きな動きを為しているのである。

ソ連邦革命は人類歴史上未曾有の事が多い。特にマルクスの理論が百年近くも多数の学者によつて研究発展し、その理論は階級闘争として無数の犠牲を払いながら実験せられ、革命の原理、方法間然するところ無きまでに細部の計画成立した後、第一次欧州大戦を利用してツァー帝国を崩壊せしめ、後に天才レーニンを指導者として実演したのである。第一線決戦主義の真に徹底せる模範と言わねばならぬ。

しかし人智は儼いはかないものである。あれだけの準備計画があつても、やつて見ると容易に思うように行かない。詳しい事は研究

した事もないから私には判らないが、列国が放任して置いたらあの革命も不成功に終つたのではなからうか。少なくともその恐れはあつたろうと想像せられる。資本主義諸列強の攻撃がレーニンを救つたとも見る事が出来るのではないか。資本主義国家の圧迫が、レーニンをしていわゆる「国防国家建設」への明確な目標を与え大衆を掌握せしめた。

もちろん「無産者独裁」が大衆を動かし得たる事は勿論であるが、大衆生活の改善は簡単にうまく行かず、大なる危機が幾度か襲来した事と思う。それを乗越え得たのは「祖国の急」に対する大衆の本能的衝動であつた。マルクス主義の理論が自由主義の次に来たるべき全体主義の方向に合するものであり、殊に民度の低いロシヤ民族には相当適合している事がソ連革命の一因をなしている事を否定するのではないが、列強の圧迫とあ

らゆる困難矛盾に対し、臨機応変の処理を断行したレーニン、スターリンの政治的能力が今日のソ連を築き上げた現実の力である。第一線決戦主義で堂々開始せられた革命建設も結局第二線決戦的になったと見るべきである。

ナチス革命は明瞭な第二線決戦主義である。ヒットラーの見当は偉い。しかしヒットラーの直感は革命の根本方向を狙っただけで、詳細な計画があつたのではない。大目標を睨みながら大建設を強行して行くところに古き矛盾は解消されつつ進展した。もちろん平時的な変革ではない。たしかにナチス革命であるが大した破壊、犠牲無くして大きな変革が行なわれた。大観すればナチス革命はソ連革命に比し遙かに能率的であつたと言える。この点は日本国民は見究めねばならない。

第二次欧州大戦特に仏国の屈伏後はやや空気が変つたが、国

民が第一線決戦主義に対する憧憬余りに強くソ連の革命的方式を正しいものと信じ、多くの革新論者はナチス革命は反動と称していたのではないか。この気持が今日も依然清算し切れず新体制運動を動やもすれば観念的論議に停頓せしめる原因となつている。日米関係の切迫がなくなれば新体制の進展は困難かも知れない。蓋しけだ困難が国民を統一する最良の方法である。今日ルーズベルトが全体主義国の西大陸攻撃（とんでもない事だが）を餌として国民を動員せんとしてつあるもその一例。リンドバーク大佐がドイツより本土攻撃せられる恐れなしと証言せるは余りに当然の事、これが特に重視せらるるは滑稽である。

第二節 指揮単位

「世界最終戦論」には方陣の指揮単位は大隊、横隊は中隊、散

兵は小隊、戦闘群は分隊と記してある。理屈はこの通りであり大勢はその線に沿って進歩して来たが、現実の問題としてそう正確には行っていない。

横隊戦術の実際の指揮は恐らく中隊長に重点があつたのであろう。横隊では大隊を大隊長の号令で一斉に進退せしむる事はほとんど不可能とも言ふべきである。しかし当時の単位は依然として大隊であり、傭兵の性格上極力大隊長の号令下にある動作を要求したのである。

散兵戦の射撃はなかなか喧噪なもので、その指揮すなわち前進や射撃の号令は中隊では先ず不可能と言つて良い。特に散兵の間隔が増大し部隊の戦闘正面が拡大するにつれてその傾向はますます甚だしくなる。だから散兵戦術の指揮単位は小隊と云うのは正しい。しかしナポレオン時代は散兵よりも戦闘の決は縦

隊突撃にあつたのだから、実際には未だ指揮単位は大隊であつた。横隊戦術よりも正確に大隊の指揮号令が可能である。散兵の価値進むに従い戦闘の重点が散兵に移り、密集部隊も戦闘に加入するものは大隊の密集でなく中隊位となつた。モルトケの欄（一二二頁付表第二）に、散兵の下に「中隊縦隊」と記し、指揮単位を「中隊」としたのはこの辺の事情を現わしたのである。

日露戦争当時は既に散兵戦術の最後の段階に入りつつあり、小隊を指揮の単位とした。しかるに戦後の操典には射撃、運動の指揮を中隊長に回収したのであつた。その理由は、日露戦争の経験に依れば、一年志願兵の将校では召集直後到底小隊の射撃等を正しく指揮する事困難であると云うのであつた。若し真に日本軍が散兵戦闘を小隊長に委せかねるというならば、日本民族はもう散兵戦術の時代には落伍者であると言う事を示すも

のといわねばならぬ。もちろんそんな事はないのであるから、この改革は日本人の心配性をあらわす一例と見る事が出来る。

更に正確にいえば、ドイツ模倣の一年志願兵制度が日本社会の実情に合しない結果であつたのである。欧州大戦前のドイツギムナジウムで中学校に入学するものは右翼または有産者即ち支配階級の子供であり、小学校卒業者は中学校に転校の制度はなかつたのである。即ち中学校以上の卒業者は自他ともに特権階級としていたので、悪く言えば高慢、良く言えば剛健、自ら指導者たるべき鍛錬に努力するとともに平民出身の一般兵と同列に取扱われる事を欲しないのである。そこに特権制度として一年志願兵制度が発達し、しかもその価値を発揮したのである。しかるに明治維新以後の日本社会は真に四民平等である。また近時自由主義思想は高等教育を受けた人々に力強く作用して軍事を軽視す

る事甚だしかった。かくの如き状態に於て中学校以上を卒業したとて一般の兵は二年または三年在営するに對し、僅か一年の在営期間で指揮官たるべき力量を得ないのは当然である。

本次事変初期に於ても一年志願兵出身の小隊長特に分隊長が指揮掌握に充分なる自信なく、兵の統率にやや欠くる場合ありしを耳にしたのである。これはその人の罪にあらずして制度の罪である。

この経験とドイツ丸呑みよりの覚醒が自然今日の幹部候補生の制度となり、面目を一新したのは喜びに堪えない。

しかし未だ真に徹底したとは称し難い。学校教練終了を幹部候補生資格の条件とするのは主義として賛同出来ぬ。「文事ある者は必ず武備がある」のは特に日本国民たるの義務である。親の脛をかじりつつ、同年輩の青年が既に職業戦線に活躍しある

間、学問を為し得る青年は一旦緩急ある際一般青年に比し遙かに大なる奉公の実を挙ぐるため武道教練に精進すべきは当然であり、国防国家の今日、旧時代の残滓とも見るべきかくの如き特権は速やかに撤廃すべきである。中等学校以上に入らざる青年にも、青年学校の進歩等に依り優れたる指揮能力を有する者が^{すくな}尠くない。また軍隊教育は平等教育を一抛し、各兵の天分を充分に發揮せしめ、特に優秀者の能力を最高度に發展せしむる事が必要であり、これによつて多数の指揮官を養成せねばならぬ。在営期間も最も有利に活用すべく、幹部候補生の特別教育は極めて合理的であるが、^{みだ}猥りに將校に任命するのは同意し難い。除隊当時の能力に応ずる階級を附与すべきである。

^{ついで}序に現役將校の養成制度について一言する。

幼年学校生徒や士官候補生に特別の軍服を着せ、士官候補生

を別室に收容して兵と離隔し身の廻りを当番兵に為さしむる等も貴族的教育の模倣の遺風である。速やかに一抛、兵と苦楽をともにせしめねばならぬ。率先垂範の美風は兵と全く同一生活の体験の中から生まれ出るべき筈である。

将校を任命する時に将校団の銓衡會議と言うのがある。あれもドイツの制度の直訳である。ドイツでは昔その歴史に基づき将校団員は将校団で自ら補充したのである。その後時勢の進歩に従い士官候補生を募集試験により採用しなければならぬようになったため、動やもすれば将校団員の氣に入らない身分の低い者が入隊する恐れがある。それを排斥する自衛的手段として、将校団銓衡會議を採用したものと信ずる。日本では全く空文で唯形式的に行なわるるに過ぎない。

私は更に徹底して幹部を総て兵より採用する制度に至らしめ

たい。かくして現役、在郷を通じて一貫せる制度となるのである。

世の中が自由主義であつた時代、幼年学校は陸軍として最も意味ある制度であつたと言える。しかし今日以後全体主義の時代には、国民教育、青年教育総て陸軍の幼年学校教育と軌を同じゅうするに至るべきである。即ち陸軍が幼年学校の必要を感じない時代の一日も速やかに到来する事を祈らねばならぬ。それが国防国家完成の時とも言える。そこで軍人を志すものは総て兵役につく。能力により現役幹部志願者は先ず下士官に任命せられる。これがため必要な学校はもちろん排斥しない。下士官中、将校たるべき者を適時選抜、士官学校に入校せしめて将校を任命する。

今日「面」の戦闘に於ては指揮単位は分隊である。しかして

この分隊の戦闘に於ては分隊が同時に単一な行動をなすのではない。ある組は射撃を主とし、ある組はむしろ白兵突撃まで無益の損害を避けるため地形を利用して潜入する等の動作を有利とする。操典は既に分隊を二分するを認めており、「組」が単位となる傾向にある。

この趨勢から見て次の「体」の戦法ではいよいよ個人となるものと想像せられる。

「体」の戦法とは戦闘法の大飛躍であり、戦闘の中心が地上特に歩兵の戦闘から空中戦への革命であろう。

空中戦としては作戦の目標は当然敵の首都、工業地帯等となる。そして爆撃機が戦闘力の中心となるものと判断せられ、飛行機は大きくなる一方であり、その編隊戦法の進歩と速度の増加により戦闘機の将来を疑問視する傾向が一時相当有力であつ

たのである。しかるに支那事変以来の経験によつて戦闘機の価値は依然大なる事が判明した。今日の飛行機は莫大の燃料を要し、その持つ量のため戦闘機の行動半径は大制限を受けるのだが、将来動力の大革命に依り、戦闘機の行動半径も大飛躍し、敵目標に潰滅的打撃を与えるものは爆撃機であるが、空中戦の優劣が戦争の運命を左右し、依然戦闘機が空中戦の花として最も重要な位置を占むるのではないだろうか。

第三節 戦闘指導精神

横隊戦術の指導精神は当時の社会統制の原理であつた「専制」である。専制君主の傭兵が横隊戦術に停顿せしめたのである。号令をかける時刀を抜き、敬礼する時刀を前方に投出すのはこの時代の遺風と信ずる。精神上から言つてもまた実戦の必要か

ら言つても、号令をかける場合刀を抜く事は速やかに廃止する事を切望する。猥^{みだ}りに刀を抜き敵に狙撃せられた例が少なくな^い。そうすれば指揮刀なるものは自然必要なくなる。日本軍人が指揮刀を腰にするのはどうも私の氣に入らない。今日刀を抜いて指揮するため危険予防上指揮刀を必要とするのである。

フランス革命により本式に採用せらるるに至つた散兵戦術の指導精神は、フランス革命以来社会の指導原理となつた「自由」である。横隊の窮屈なのに反し、散兵は自由に行動して各兵の最大能力を発揮する。各兵は大体自分に向つた敵に対し自由に戦闘するのである。部隊の指揮單位に於てなるべく各隊長の自由を尊重するのである。大隊戦闘の本旨は「大隊の攻撃目標を示し、第一線中隊をして共同動作」せしむるに在つた。そうして大隊長はなるべく干渉を避けるのである。

戦鬪群の戦術となると形勢は更に変化して来た。敵は散兵の如く大体我に向き合ったものが我に対抗するのではない。広く分散している敵は互に相側防し合うように巧みに火網を構成しているから、とんでもない方から射撃せられる。散兵戦術のように大体我に向い合った敵を自由に攻撃したなら大変な混乱に陥る恐れがある。

そこで否が応でも「統制」の必要が生じて来た。即ち指揮官ははつきり自分の意志を決定する。その目的に応じて、各隊に明確な任務を与え各隊間共同の基準をも明らかにする。しかも戦況の千変万化に応じ、適時適切にその意図を決定して明確な命令を下さねばならない。自由放任は断じてならぬ。昭和十五年改正前の我が歩兵操典に大隊の指揮に対し、大隊長の指揮に

つき「大隊戦闘の本旨は諸般の戦況に応じ大隊長の的確かつ軽快なる指揮と各隊の適切なる協同とに依り大隊の戦闘力を遺憾なく統合發揮するにあり」と述べ（第四百八十）更に「……戦況の推移を洞察して適時各隊に新なる任務を附与し……自己の意図の如く積極的に戦闘を指導す」（第五百四）と指示している。この統制の戦術のためには次の事が必要である。

1、指揮官の優秀、およびそれを補佐する指揮機関の整備。
2、命令、報告、通報を迅速的確にする通信連絡機関。

3、各部隊、各兵の独断能力。

3に示す如く、統制では各隊の独断は自由主義時代より更に必要である。いかに指揮官が優秀でも、千変万化の状況は全く散兵戦術時代とは比較にならぬ結果、いちいち指揮官の指揮を待つ暇なく、また驚くべき有利な機会を捉うる可能性が高い。

各兵も散兵に比しては正に数十倍の自由活動の余地があるのである。一兵まで戦術の根本義を解せねばならぬ。今日の訓練は単なる体力気力の鍛錬のみでなく、兵の正しき理解の増進が大問題である。我らの中少尉時代には戦術は将校の独占であった。第一次欧州大戦後は下士官に戦術の教育を要求せられたが、今日は兵まで戦術を教うべきである。

統制は各兵、各部隊に明確なる任務を与え、かつその自由活動を容易かつ可能ならしむるため無益の混乱を避けるため必要最少限の制限を与うる事である。即ち専制と自由を綜合開顕した高度の指導精神であらねばならぬ。

近時のいわゆる統制は専制への後退ではないか。何か暴力的に画一的に命令する事が統制と心得ている人も少なくないようである。衆が迷っており、かつ事急で理解を与える余裕のない

場合は躊躇なく強制的に命令せねばならない。それ以外の場合には指導者は常に衆心の向うところを察し、大勢を達観して方針を確立して大衆に明確な目標を与え、それを理解感激せしめた上に各自の任務を明確にし、その任務達成のためには広汎な自由裁断が許され、感激して自主的に活動せしめねばならない。恐れ戦き、遲疑、躊躇逡巡し、消極的となり感激を失うならば自由主義に劣る結果となる。

社会が全体主義へ革新せらるる秋、とき軍隊また大いに反省すべきものがある。軍隊は反自由主義的な存在である。ために自由主義の時代は全く社会と遊離した存在となつた。殊に集團生活、社会生活の経験に乏しい日本国民のため、西洋流の兵營生活は驚くべき生活変化である。即ち全く生活様式の変つた慣習の裡うちに叩き込まれ、兵はその個性を失つて軍隊の強烈な統制中の人

となつたのである。

陸軍の先輩は非常にこの点に頭を悩まし、明治四十一年十二月軍隊内務書改正の折、その綱領に「服従は下級者の忠実なる義務心と崇高なる徳義心により、軍紀の必要を覚知したる觀念に基づき、上官の正当なる命令、周到なる監督、およびその感化力と相俟つて能くその目的を達し、衷心より出で形体に現われ、遂に弾丸雨飛の間に於て甘んじて身体を上官に致し、一意その指揮に従うものとす」と示したのである。これ真に達見ではないか。全体主義社会統制の重要道德たる服従の真義を捉えたのである。しかし軍隊は依然として旧態を脱し切れないで今日に及んでいる。今や社会は超スピードをもつて全体主義へ目醒めつつある。青年学校特に青少年義勇軍の生活は軍隊生活に先行せんとしてつつある。社会は軍隊と接近しつつある。軍隊は

この時代に於て軍隊生活の意義を正確に把握して「国民生活訓練の道場」たる実を挙げねばならぬ。

殊に隊内に私的制裁の行なわれているのは遺憾に堪えない。しかも単に形式的防圧ではならぬ。時代の精神に見覚え全体主義のために如何に弱者をいたわることの重大なるかを痛感する新鮮なる道義心に依らねばならぬ。東亞連盟結成の根本は民族問題にあり。民族協和は人を尊敬し弱者をいたわる道義心によつて成立する。朝鮮、満州国、支那に於ける日本の困難は皆この道義心微^{かす}かなる結果である。軍隊が正しき理解の下に私的制裁を消滅せしむる事は日本民族昭和維新の新道德確立の基礎作業ともなるのである。

第五章 戦争参加兵力の増加と国軍編制（軍制）

第一節 兵役

火器の使用に依つて新しい戦術が生まれて来た文芸復興の時代は小邦連立の状態であり、平常から軍隊を養う事は困難で有事の場合兵隊を備つて来る有様であつたが、国家の力が増大するにつれ自ら常備の傭兵軍を保有する事となつた。その兵数も逐次増加して、傭兵時代の末期フリードリヒ大王は人口四百万に満たないのに十数万の大軍を常備したのである。そのため財政的負担は甚大であつた。

フランス革命は更に多くの軍隊を要求し、貧困なるフランスは先ず国民皆兵を断行し、欧州大陸の諸強国は次第にこれに倣う事となつた。最初はその人員も多くなかつたが、国際情勢の緊迫、軍事の進歩に依つて兵力が増加せられ、第一次欧州大戦

で既に全健康男子が兵役に服する有様となつた。

第二次欧州大戦では大陸軍国ソ連が局外に立ち、フランスまた昔日の面目がなくなり、かつ陸上作戦は第一次欧州大戦のよう到大規模でなかつたため第一次欧州大戦だけの大軍は戦つていないが、必要に応じ全健康男子銃を執る準備も列強には常に出来ている。

日本は極東の一角に位置を占め、對抗すべき陸軍武力は一本のシベリヤ鉄道により長距離を輸送されるソ連軍に過ぎないために服役を免れる男子が多かつた。ソ連極東兵備の増強、支那事変の進展により、徴集兵数は急速に大増加を来たし、国民皆兵の実を挙げつつある。兵役法はこれに従つて相当根本的な改革が行なわれたが、しかも更に徹底的に根本改正を要するものと信ずる。

国家総動員は国民の力を最も合理的に総合的に運用する事が第一の着眼である。教育の根本的革新に依り国民の能力を最高度に発揮し得るようにするとともに、国民はある期間国家に奉仕する制度を確立する。即ち公役に服せしむるのである。兵役は公役中の最高度のものである。

公役兵役につかしむるについては、今日の徴兵検査では到底国民の能力を最も合理的に活用する事が出来ない。教育制度と検査制度を統一的に合理化し、知能、体力、特長等を総合的に調査し、各人の能力を充分に発揮し得るごとく奉仕の方向を決定する。

戦時に於ける動員は所要兵力を基礎として、ある年齢の男子を総て召集する。その年齢内で従軍しない者は総て国家の必要なる仕事に従事せしめる。自由企業等はその年齢外の人々で総

て負担し得るように適切綿密なる計画を立てて置かねばならぬ。

空軍の発達に依り都市の爆撃が行なわれる事となつて損害を受くるのは軍人のみでなくなつた。全健康男子総て従軍する事となつた今日は既成の観念よりせば国民皆兵制度の徹底であるが、既に世は次の時代である。全国民野火の禍中に入る端緒に入つたのである。

次に來たるべき決戦戦争では作戰目標は軍隊でなく国民となり、敵国の中心即ち首都や大都市、大工業地帯が選ばれる事が既に今次英独戦争で明らかとなつてゐる。

すなわち国民皆兵の眞の徹底である。老若男女のみならず、山川草木、豚も鶏も総て遠慮なく戦火の洗礼を受けるのである。全国民がこの惨禍に対し毅然として堪え忍ぶ鉄石の精神を必要

とする。

空中戦を主体とするこの戦争では、地上戦争のように敵を攻撃する軍隊に多くの兵力が必要なくなるであろう。地上作戦の場合は無数の兵員を得るため国民皆兵で誰でも引張り出したのであるが、今後の戦争では特にこれに適した少数の人々が義勇兵として採用せらるるようになるのではなからうか。イタリアの黒シャツ隊とかヒットラーの突撃隊等はその傾向を示したもののと言える。

義勇兵と言うのは今日まで用いられていた傭兵の別名ではない。国民が総て統制的に訓練せられ、全部公役に服し、更に奉公の精神に満ち、真に水も洩らさぬ挙国一体の有様となった時武力戦に任ずる軍人は自他共に許す真の適任者であり、義務[○]と[○]言う消極的な考えから義勇と言う更に積極的であり自発的であ

る高度のものとなるべきである。

第二節 国軍の編制

フリードリヒ大王時代は兵力が相当多くても実際作戦に従事するものは案外少なくなり、その作戦は「会戦序列」に依り編成された。それが主将の下に統一して運動し戦闘するのであった。今日の師団のような有様であつた。

三三

ナポレオン時代は既に軍隊の単位は師団に編制せられていた。次いで軍団が生まれ、それを軍に編制した。

ナポレオン最大の兵力（約四十五万）を動かした一八一二年ロシヤ遠征の際の作戦は、なるべく国境近く決戦を強行して不毛の地に侵入する不利を避くる事に根本着眼が置かれた。これ

は一八〇六―七年のポーランドおよび東普作戦の苦い経験に基づくものであり、当時として及ぶ限りの周到なる準備が為された。

一部をワルソー方向に進めてロシヤの垂涎すいぜんの地である同地方に露軍を牽制し、東普に集めた主力軍をもつてこの敵の側背を衝き、一挙に敵全軍を覆滅して和平を強制する方針であつた。主力軍は二個の集団に開進した。ナポレオンは最左翼の大集団を直接掌握し、同時に全軍の指揮官であつた。

三四

今日の常識よりせばナポレオンは三軍に編制して自らこれを統一指揮するのが当然である。当時の通信連絡方法ではその三軍の統一運用は至難であつたろう。けれどもナポレオンといえども当時の慣習からそう一挙に蟬脱出来なかつた事も考えられ

る。何れにせよ事実上三軍にわけながら、その統一運用に不充分であつた事がナポレオンが国境地方に於て若干の好機を失つた一因となつており、統一運用のためには国軍の編制が合理的でなかつたという事は言えるわけである。

モルトケ時代は既に国軍は数軍に編制せられ、大本營の統一指揮下にあつた。シュリーフェンに依り国軍の大増加と殲滅戦略の大徹底を來たしたのであるが、依然国軍の編制はモルトケ時代を墨守し、欧州大戦勃発初期、国境会戦等であたかも一八一二年ナポレオンの犯したと同じ不利を嘗めたのは興味深い事である。

独第五軍は旋回軸となりベルダンに向い、第四軍はこれに連繫して仏第四軍を衝き、独主力軍の運動翼として第一ないし第三軍が仏第五軍及び英軍を包囲殲滅すべき態勢となつた。

第一ないし第三軍を一指揮官により統一運用したならばあるいは国境会戦に更に徹底せる勝利となり、仏第五軍、少なくとも英軍を捕捉し得たかも知れぬ。そう成ったならマルヌ会戦のため更に有利の形勢で戦わるる事であつたろう。しかるに独大本営は自らこの戦場に進出し直接三軍を指揮統一することとなさず、第二軍司令官をして臨時三個軍を指揮せしめた。しかるに第二軍司令官ビューローは古参者であり皇帝の信任も篤い紳士の將軍であつたが機略を欠き、活気ある第一軍との意見合致せず、いたずらに安全第一主義のために三軍を近く接近して作戦せんとし、遂に好機を失し敵を逸したのである。

ナポレオンの一八一二年の軍編制や運営につき深刻な研究をしていた独軍参謀本部は、一九一四年同じ失敗をしたのである。一八一二年はナポレオンとしては三軍の編成、その統一司令部

の設置はかなり無理と言えるが、一九一四年は正しく右翼三軍の統一司令部を置くべきであり、万一置いてない時は大本営自ら第一線に進出、最も大切な時期にこの三軍を直接統一指揮すべきであつた。

戦争の進むにつれて必要に迫られて方面軍の編成となつたが、若しドイツが会戦前第一ないし第三軍を一方面軍に編成してあつたならば、戦争の運命にも相当の影響を及ぼし得た事であつたろう。現状に捉われず、将来を予見した識見はなかなか得られない事を示すとともに、その尊重すべきを深刻に教えるものと言ふべきである。

第六章 将来戦争の予想

第一節 次の決戦戦争は世界最終戦争

かつて中央幼年学校で解析幾何の初歩を学んだ。数学の嫌いな私にもこれは大変面白く勉強出来た。掛江教官が「二元の世界すなわち平面に住む生物には線を一本書けばその行動を掣肘し得らるるわけだが、三元の世界即ち体に住む我らには線は障害とならないが、面で密封したものの中に入れられる時は全く監禁せられる。しかし四元の世界に住むものには我々の牢屋のようなものでは如何ともなし得ない」等という語を非常に面白く聴いたものである。

鎌倉に水泳演習の折、宿は光明寺で我々は本堂に起居していた。十六羅漢の後に五、六歳の少女が独りで寝泊りしていたが、この少女なかなか利発もので生徒を驚かしていた。ある夜の事豪傑連中（もちろん私は参加していない）が消灯後海岸に散歩

に出かけ遅く帰って廊下にあつた残飯を食べていた。ところが突如音がして光り物が本堂に入つて来た。さすがの豪傑連中胆を抜かれてひれ伏してしまった。この時豪傑中の豪傑、今度の事変で名誉の戦死を遂げた石川登君が恐る恐る顔を上げて見ると女が本堂の奥に進んで行く。石川君の言によると「柱でも蚊帳でも総てすうと通り抜けて行く」のであつた。奥に寝ていた少女が泣出す。誰かが行つて尋ねて見ると「知らない小母さんが来て抱くから嫌だ……」とて、それからはどうしても一人で本堂に寝ようとはしなかった。この少女は両親を知らず、ただ母は浅草附近に在るとの事であつたが、我らは恐らくその母親が死んだのだろうと話しあつたのであつた。

石川君の実感を詳しく聴くと、掛江教官の四元に住むものとして幽霊の事が何だかよく当てはまるような気がする。宗教の

靈界物語は同じ事であろう。

しかし我ら普通の人間には体以上のものは想像も出来ない。体の戦法は人間戦闘の窮極である。今日の戦法は依然面の戦法と見るべきだが、既に体の戦法に移りつつある。

指揮単位は分隊から組に進んでいる。次は個人となるであろう。

軍人以外は非戦闘員であると言う昨日までの常識は、都市爆撃により完全に打破されつつある。第一次欧州大戦で全健康男子が軍に従う事となったのであるが、今や全国民が戦争の渦中に投入せらるる事となる。

第二次欧州大戦では独仏両強国の間にさえ決戦戦争となったが、これは前述せる如く両国戦争力の甚だしい相違からきたので、今日の状態でも依然持久戦争となる公算が多い。即ち一国

の全健康男子を動員すればその国境の全正面を防禦し得べく、敵の迂回を避ける事が出来る。火砲、戦車、飛行機の綜合威力をもつても、良く装備せられ、決心して戦う敵の正面は突破至難である。

次の決戦戦争はどうしても真に空中戦が主体となり、一挙に敵国の中心に致命的打撃を与え得る事となつて初めて実現するであろう。

体の戦法、全国民が戦火に投入と言う事から見ても次の決戦戦争は正しく空中戦である。しかして体以上の事は我らに不可解であり、単位が個人で全国民参加と云えば国民の全力傾注に徹底する事となる。即ち次の決戦戦争は戦争形態発達の極限に達するのであり、これは戦争の終末を意味している。

次の決戦戦争は世界最終戦争であり、真の世界戦争である。

過去の欧州大戦を世界大戦と呼ぶのは適当でない。西洋人の独断を無意識にまねている人々は戦争の大勢、世界歴史の大勢をわきまえぬのである。

第二節 歴史の大勢

戦争の終結と云う事は国家対立の解消、即ち世界統一を意味している。最終戦争は世界統一の序曲に他ならない。

第一次欧州大戦を契機として軍事上の進歩は驚嘆すべき有様であり、特にドイツおよびソ連の全体主義的国防建設が列強のいわゆる国防国家体制への急進展となりつつある。全体主義は国力の超高速増強を目標とするのであり、「自由」から「統制」への躍進である。

全国力を徹底的に發揮するため極度の緊張が要求せられる。

全体主義はあたかも運動選手の合宿鍛錬主義の如きものであり、決勝戦の直前に於て活用せらるべき方式である。

一地方に根拠を有する戦力が抵抗を打破し得る範囲により自然に政治的統一を招来する。これがため武力の進歩が群小国家を整理して大国家への発展となつた。欧州大戦後、軍事および一般文明の大飛躍は国家の併合を待つ之余裕をあたえず、しかも力の急速なる拡大を生存の根本条件とする結果、国家主義の時代から国家連合の時代への進展を見、今日世界は大体四個の大集団となりつつある事は世人の常識となつた。

昭和十六年一月十四日閣議決定の發表に「ちようこく肇国の精神に反し、皇国の主権を晦冥かいめいならしむる_{おそれ}虞あるが如き国家連合理論等は之を許さず」との文句がある。興亜院当局はこれに対し、国家連合理論を否定するものでなく、肇国の精神に反し皇国の主権を

晦冥ならしむる虞あるものを許さぬ意味であると釈明したとの事である。若し国家連合の理論を否定する事があるならばそれはあまりにも人類歴史の大勢に逆行するものであり、皇国は世界の落伍者たる事を免れ難き事明瞭である。興亜院当局の言は当然しかあるべきである。然し閣議決定発表の文がかくの如き重大誤解を起す恐れ大なるは遺憾に堪えない。

人類文化の目標である八紘一字の御理想に基づき、政治的には全世界が天皇を中心とする一国家となる事は疑いを許さぬ。しかしそれに到達するには不断の生々発展がある。国家連合の時代に入りつつある世界は、第二次欧州戦争に依りその速度を増して間もなく明確に数個の集団となるであろう。その集団はなるべく強く統制せらるるものが、良くその力を発揮し得るのだから統制の強化を要望せらるる反面、民族感情や国家間の利

害等によりその強化を阻止する作用も依然なかなか強い。結局各集団の状況に応じ落着くべきに落着き、しかも絶えずその統制強化に向つて進むものと考えられる。合理的に無理なくその強化が進展し得るものが優者たる資格を得る事となるであらう。

右の如く発展をしながら各集団の間に集散離合が行なわれてその数を減じ、恐らく二個の勢力に分れ、その間の決戦戦争によつて世界統一の第一段階に入るものと想像せられる。二個勢力に結成せらるるまでが人類歴史の現段階であり、戦争より見れば第一次欧州戦争以来の持久戦争時代がそれである。持久戦争と言っても局部的には決戦戦争が行なわれて集団結成を促進するのであるが、武力の活動範囲に未だ制限多く自然に数集団となるわけである。今日はこの意味に於て人類の準決勝時代と言ふべく、この時代の末期である世界が二個の勢力に結成せら

れる時、次の決戦戦争の時代に入り最終戦争が行なわれる事となる。

ラテン・アメリカの諸国は人種的にも経済的にも概して合衆国よりも欧州大陸と親善の気持を持っているにも拘らず、第一次欧州大戦以後は急速に米州連合体の成立に向いつつある事は即ち歴史の必然性である。ドイツは天才ヒトラーにより戦争の中に於て着々欧州連盟の結成に努力し、恩威併行の適切なる方策により輝かしき成果を挙げている。ソ連は最もよく結合の実を挙げ、今日は名は連邦であるが既に大国家とも見る事が出来る。日本はその実力によつて欧米覇道主義の侵略を排除しつつ、一個の集団へ結成せんとしつつあるが、我が東亜は今日最も不完全な状態にある。しかし遠からず支那事変を解決し、必ずや急速に東亜の大同を實現するであらう。現下の事変はその

陣痛である。

これらの未完成の四集団は既にいわゆる民主主義陣営と枢軸陣営の二大分野に分れ、ソ連は巧みにその中間を動いて漁夫の利を占めんとしつつあるが、果してしからばその将来は如何に成り行くであろうか。

今日民主主義、全体主義の二大陣営と言うも必ずしもそれは主義によるのではない。現に民主主義という英、米は全体主義の中国を味方に編入し、殊に全体主義の最先鋒ソ連に秋波を送りつつある。主義よりもむしろ利害関係ないし地理的關係が主である。しかし文明の進展するところ、結局は矢張り主義が中心となつて世界が二分するであろうと想像する。

この見地から究極に於て、王覇両文明の争いとなるものと信ずる。我ら東洋人は科学文明に遅れ、西洋人に比し誠に生温い

生活をして来た。しかし反面常に天意に恭順ならんとする生活を続けたのである。東洋人は太古の宗教的生活を捨て去つていない。西洋は力を尚ぶが、我らの守る処は道である。政治上に於て我らは徳治を理想とするに對し彼らは法治を重視する。道と力は人生に於ける二大要素であり、これを重んじないものはない。問題はその程位如何にある。何れが主で何れが従であるかに在る。この差は今日の日本人には大したものではないと思わるるかも知れない。しかしこれが大きな問題である。今日の日本人は西洋文明を学び、大体霸道主義となつてゐる。あるいは西洋人以上の霸道主義者である。見給え、平気で「油が入用だから蘭印をとる」と高言してゐるではないか。西洋人でも今少しは齒に衣きぬをかけた言い方をするであらう。日本人は一時心も形も全部西洋風となつたのであつた。近時所謂日本主義が横行

して形は日本に還つたが、しかし彼らの大部の心は依然西洋覇道主義者である。八紘一字と言いながら弱者から権利を強奪せんとし、自ら強権的に指導者と言ひ張る。この覇道主義が如何に東亜の安定を妨げているかを静かに觀察せねばならない。

クリステイーの『奉天三十年』には日清戦争当時のことについて「若し総ての日本人が軍隊当局者のようであつたなら、人々は彼らの去るのを惜しんだであろう。しかし他の部類のものもあつた。軍隊の後から人夫、運搬夫等に、そして雑多なる最下級の群が来て、それらは支那人から恐怖の混じた軽蔑をもつて見られた。……彼らは兵士の如く嚴格なる規律の下に置かれなかつた」と述べてある。軍隊は兵卒に至るまで道義的であつたらしい。しかるに日露戦争については「この前の戦争の時に於ける日本軍の正義と仁慈が謳歌され、総ての放埒は忘れられて

いた。戦争者が満州の農民と永久的友誼を結ぶべき一大機会は
今であつた。度々戦乱に悩まされたこれらの農民達は日本人を
兄弟並みに救い主として熱心に歓迎したのである。かくしてこ
の国土の永久的領有の道は拓けたであらう。而して多くの者が
それを望んだのであつた。しかるに日本人の指導者と高官の目
指した処は何であるにもせよ、普通の日本兵士並びに満州に來
た一般人民はこの地位を認識する能力が無かつた。……かくし
て一般の人心に、日本人に対する不幸なる嫌惡、彼らの動機に
対する猜疑さいぎ、彼らと事を共にするを好まぬ傾向が増え、かつ燃
えた。これらの感情はこれを根絶する事が困難である」と記し
ている。

日露戦争では既に兵士のあるものは非道義的に傾いた。今次
事変は如何であらうか。悪いのは一般日本人と兵士だけに止ま

るであろうか。北支の老人は「北清事変当時の日本軍と今日の日本軍は余りに変った」と嘆いているそうである。若し我が軍が少なくとも北清事変当時だけの道義を守っていたならば、今日既に蒋介石は我が戦力に屈伏していただろうか。蒋介石抵抗の根柢は、一部日本人の非道義に依り支那大衆の敵愾心を煽った点にある。「派遣軍將兵に告ぐ」「戦陣訓」の重大意義もここにありと信ずる。

北清事変当時の皇軍が如何に道義を守ったかに関して北京の東亜新報の二月六、七、八日の両三日の紙上に「柴大人の善政、北城に残る語り草」と題し、今なお床しき物語が掲載されている。それを参考までに大略申述するとこんな事である。

(一)、「千仏寺胡同、この北京の北城の辺こそ、我ら日本人が誇りとしてよい地区なのである。

光緒二十六年、つまり明治三十三年の七月二十一日は各国連合軍が北京入城の日であつた。日本軍は朝陽門より守備兵の抵抗を排除して先ず入城、順天府署に警務所を設け、当時公使館附武官であつた柴五郎大佐が警務長官となつた。

柴大佐は後の柴大将であるが、大将の恩威並び行なう善政は全く北京人をして感涙にむせばせたものであつた。

柴長官は先ず安民公署という分署を東西北八胡同と西四牌楼北報子胡同の二個所に設け、布告を發して曰く、

『軍人の住民の宅に入りて捜査するを許さず、若し違反する者あらば住民はその面貌等を記して告発す可し』と。そして清刑部郎中・端華如等をしてその事務を処理させた。

当時の北京は各国軍がそれぞれ駐屯区域を定めていたのだが、

日本軍駐屯の北城地域が最も平和で住民が安居し、ロシヤ、フランス、イギリス等の駐屯区域では兵隊が乱暴するので縊死するもの、井戸に投じ、焼死するものが続出し、そうした区域からの避難民は争って日本軍駐屯の北城区域へ避難して来た。こうした避難民のため、その当時寂びれていた鼓楼大街の如きは忽ち繁華の街となつた程である。

善政というものは比較されて見た時にはつきりとその真価が分る。北清事変で各国の軍隊が各警備の縄張りをきめたこの時ほど西欧の軍隊の野獸的な行為に比べ皇軍の仁愛あふるる軍規と施設の真価が発揮せられた事はあるまい。

この時の日本軍敬慕の北京人の感情は、その後の日露戦争に於て清国をして親日一色ならしめた有力な原動力たり得たのである。……」

(二)、「ここは鼓楼東大街の北である。そして日本軍の善政ゆえに更生した街である。

橋川時雄氏の調査によると、当時の柴大人ツァイターレンの仁政として今も古老の感謝しているところは、大人が警務長官となるや各米倉を開いてその蓄米を廉売し、いわゆる“糧荒”の虞おそれなからしめた事であるそうである。その他に現存している古老が口伝している柴大将についての挿話には次のような話がある。

【古老の話 その一】

その頃柴五郎というお方は日本人ではない。満州旗籍の出身だが日本に帰化したのだ。つまり柴大人がこのような仁政を施すのは故郷へ帰ってきて故郷を愛するためだという噂が専らでした。この話は当時その恩に感じた住民達が半分想像まじりで話した噂だろうが、本当の事として宣伝されたわけである。

【古老の話 その二】

柴大人が職を去つて日本へ帰る日はいやはや大変な事でした。柴公館には、その日朝暗いうちから人がわんさと押しかけて皆餞別の贈り物をしました。その多くは貧民や苦力どもで、皆手に乾鶏等を贈つてその行を惜しんだのです。あの時の有様は今でもありありとこの眼に浮かんで来ます。

【古老の話 その三】

柴大人の威勢というものはその頃は大了たもので、流行歌にまで歌われたものです。つい二十年位までは、この北城一帯では子供らがあんまり悪戯をするツァイターレンライラと母親達は「柴大人来了」（そんなおいたをすると柴大人が来ますよ）と言つてなだめていた程です。

この三つの口伝は橋川氏の集めたものであるが、またもつて

日本軍人柴大人の威徳を偲ぶに充分なるものがあるではないか」
(三)、「宝鈔胡同の柴大人の民心把握の偉大な事蹟をたずねた方がこの際特に意味深いであろう。

満州人敦厚の『都門紀変三十首絶句』というのは多分拳匪の乱を謳ったものらしいが、その中の第七首『肅府』にこういうのがあるそうだ。

桐葉分封二百余、蒼々陰護九松居、
無端燬倣渾間事、同病忼憐道士徐。

この詩にいう道士徐というのは東海に行つた徐福が戦乱に苦しんでいる民衆を慰めているというわけで、柴大人の仁政を謳つたものであると解釈されている。この詩の中には『安民处处巧安排、告示輝煌総姓柴』と云つて、柴長官の告示によつて人民が安心した事も詠よまれている。『拳匪紀略』には、

『日本軍が北城を占領したので、市民は初めて外国兵が北京に入城した事を知ったのは二十三日である。それに便乗して土匪が数百家を荒し尽したが北城は何の事もなかった。こは日本兵が占領していたからで、北城の人民達は皆日本兵の庇護を受けた』

とあり、また『驢背集』という詩集には、

『日本軍の入城に依つて宮城が守られ、逃げる隙なく宮中に残つた数千人のものは日本軍に依つて食を与えられた。宮中には光緒帝も西太后も西巡していて恵妃（同治帝の妃）のみが国璽を守っていたが、柴大人に使を派して謝意を述べ、大人の指示によつて宮中の善後措置を講じた』

という意味の談がある。

誠に当時の日本軍隊の恩威並び行なわれた事蹟は、四十年後

の今なお古老の口から聴く事が出来、残る文書に読む事が出来る。英、仏の乱暴の跡といみじくも正邪のよい対照をなして居るではないか」……

以上は東亜新報掲載記事である。

明治維新以後薩長が維新の功に驕つていわゆる藩閥横暴となつた事が政党政治招来の大原因となり、政党ひとたび力を得るやたちまちその横暴となつて間もなく国民の信を失つた。今日軍は政治の推進力と称せられている。自粛しなければ国民の怨府となるであらう。日本歴史を見れば日本民族は必ずしも常に道義的でなかつた事が明らかである。国体が不明徴となつた時代の日本人は西洋人にも優る覇道の実行者ともなつた。戦国時代の外交は今日のソ連外交にも劣らざる権謀、謀略の歴史であるとも言える。しかし我が国体の命ずる道は道義治国であり、八

紘一字に依る御理想は道義による世界統一である。

アメリカの米州統制もドイツの欧州連盟もソ連の統一も総ては力中心の覇道主義である。悲しい哉、我が日本に於ても東亜の大同につき力の信者、即ち覇道主義が目下圧倒的である。東亜連盟論に対する反対はその現われである。しかし東亜連盟論の急速なる進展は国民が急速に皇道に目を醒しつつある証左である。

力をもつてする方法は端的であり、即効的である。しかし力は力に敗れる。結局道をもつての結合がむしろ力以上の力である。議論はいらぬ。天皇の思し召しがそれである。我らは東方道義をもつて東亜大同の根抵とせねばならぬ。幾多のいまわしい歴史的事実があるにせよ、王道は東亜諸民族数千年来の共同の憧憬であつた。我らは、大御心を奉じ、大御心を信仰して東

亜の大同を完成し、西洋覇道主義に対抗してこれを屈伏、八紘一字を實現せねばならない。

結局世界最終戦争が王、覇両文明の決勝戦であり、東亜と西洋の決勝戦である。この見地から最終戦争の中心は太平洋であろうと信ずるものである。

もちろん我らは道義を中心とするが、しかも力を軽視するものではない。西洋人も道義を軽視しないが、覇道主義者が道を真に信奉する事は至難であるのに、我らが力を獲得するのは決して困難でない。一方東方道義に速やかに目を醒ますとともに一方西洋科学文明を急速に摂取、最終戦争に必勝の体制を整えねばならぬ。

日本に於てさえ道義より力、物を中心としていた時代が多い。覇道は動物的本能であり、王道への欲求、憧憬が人間の万物の

霊長たる所以である。今後も人類は本能の暴露を繰返すであろう。しかし大道は人類の王道への躍進である。王道に対する安心定まった時、人類は心から、天皇の御存在に心からの感謝を覚え、不退の信仰に入り、真の平和が来るであろう。而して日本民族の正しき行ない、強き実行力が人類の道義に対する安心を定めしめるのである。

第三節 将来戦争に対する準備

科学文明の急速なる進歩が最近世界を狭くし、遠からず全世界は王道、霸道両文明の二集団に分るる事となるべく、その日は既に目前に迫りつつある。

その二集団が世界統一のための最終戦争を行なうためには、これに適した決戦兵器が必要である。静かに大勢を達観すれば、

世界二分と決戦兵器の出現は歩調を一にして進んでいる。それは当然である。この二つの間には文化的に最も密接な関係があるのである。即ち、兵器の発達は自然に人類の政治的集團の範圍を拡大し、世界二分の政治的状态成立の時は既に両集團に決戦を可能ならしむる兵器の発明せらるる時である。

この最終戦争に対する準備のため、

1、世界最優秀決戦兵器の創造

2、防空対策の徹底

この二点が最も肝要である。この徹底せる決戦戦争に於ては武力戦が瞬間的に万事を決定するであろう。

今日ドイツが大体制空権を得ているようにみえるが、しかし依然多数の船舶は英国の港に出入している。飛行機による船舶の破壊は潜水艦のそれに及ばぬらしい。あの英仏海峡の制海権

もなかなかドイツに入り難い様子である。これ飛行機の滞空時間が長くない事が第一の原因である。またロンドンを日夜爆撃してもなかなかロンドン市民の抵抗意志を屈伏せしむる事が出来ない。今日の爆弾では威力が足りぬのである。

僅かに英仏海峡を挟んでの決戦戦争すらほとんど不可能の状態で、太平洋を挟んでの決戦戦争はまるで夢のようであるが、既に驚くべき科学の発明が芽を出しつつあるではないか。原子核破壊による驚異すべきエネルギーの発生が、巧みに人間により活用せらるるようになったならどうであろうか。これにより航空機は長時間すばらしい速度をもつて飛ぶ事が出来、世界は全く狭くなる事が出来るであろう。またそのエネルギーを用うる破壊力は瞬間に戦争の決を与える力ともなるであろう。怪力光線であるとか何とか、どんな物が飛び出して来るか知れない。

何れにせよ世界二分となつた頃には、必ず今日の想像し得ない決戦兵器が出て来る事、断じて疑いを容れない。

今日は主として量の時代である。しかし明日は主として質の時代となる。新しき革命的最終戦用決戦兵器を敵に先んじて準備する事が最終戦勝利者たるべき第一条件である。

科学文明に遅れて来た東亞が僅かの年月の間に西洋覇道主義者を追越すため、この予想せらるる革命的兵器出現の可能性が我らに一道の光明を与えるのである。国策最重点の一つはこの科学的発明とその大成に指向せられねばならぬ。これがためには発明の奨励と大研究機関の設備を必要とする。

発明奨励は断じて官僚的方法では目的を達し難い。若し真に優れた天才的直感力を有する人があり、国家がその人物を中核として、その人物に万事を一任して発明の奨励を行ない得るな

らは国家的事業とするも可なりである。しかしそれはほとんど不可能に近い。それで私は資産家特に成金の活用を提唱する。国家は先ず国防献金等を停止する。自由主義時代に於て軍費の不足を補うため国防献金を奨励した事は止むを得ない。また自発的の国防献金は国防思想の徹底向上に効果ある事は否定しない。しかし今日は国防の如き最高国家事業は総て税金に依つて為すべきである。今日は既に軍費が問題でなく国家の生産能力が事を決定する。国防献金もはや問題とならない（但し恤兵^{じゅつぺい}事業等は郷党の心からなる寄附金による事が望ましい）。

資産家特に成金を寄附金の強制から解放し、彼らの全力を發明家の発見と幫助^{ほうじょ}に尽さしめる。国家の機関は發明の価値を判断して發明者には奨励金を与え、その援助者には勲章、位階、授爵等の恩賞をもつて表彰する。一体統制主義の今日、国家の恩

賞を主として官吏方面に偏重するのは良くない。恩賞は今日の国家の実情に合する如く根本的に改革せねばならぬ。信賞必罰は興隆国家の特徴である。

発明は単に日本国内、東亜の範囲に限る事なくなるべく全世界に天才を求めねばならぬ。

しかし科学の発達著しい今日、単に発明の奨励だけでは不十分である。国家は全力を尽して世界無比の大規模研究機関を設立し、綜合力を發揮すべきである。発明家の天才と成金の援助で物になったものは適時これをこの研究機関に移して（発明家をそのまま使用するか否かは全くその事情に依る）、多数学者の綜合的力により速やかにこれを大成する。

研究機関、大学、大工場の関連は特に力を用いねばならない。今日の如くこれらがばらばらに勝手に造られているのは科学の

後進国日本では特に戒心すべきである。

全国民の念力と天才の尊重（今日は天才的人物は官僚の権威に押され、つむじを曲げ、天才は葬られつつある）、研究機関の組織化により速やかに世界第一の新兵器、新機械等々を生み出さねばならない。

次は防空対策である。何れにせよ最終戦争は空中戦を中心として一挙に敵国の中心を襲うのであるから、すばらしい破壊兵器を整備するとともに防空については充分なる対策が必要である。

恐るべき破壊力に対し完全な防空は恐らく不可能であろう。各国は逐次主要部分を地下深く隠匿する等の方法を講ずるのであろうが、恐らく攻撃威力の増加に追いつかぬであろう。また消極的防衛手段が度を過ぎれば、積極的生産力、国力の増進を

阻害する。防空対策についても真に達人の達観が切要である。

私は最終戦争は今後概ね三十年内外に起るであろうと主張して来た。この事はもちろん一つの空想に過ぎない。しかし戦争変化の速度より推論して全く抛り処無いとは言えぬ。そこで私は「世界最終戦論」に於て、二十年を目標として防空の根本対策を強行すべしと唱道した。

必要最少限の部門はあらゆる努力を払って完全防空をする。どれだけをその範囲とするかが重大問題である。見透しが必要である。

その他はなるべく分散配置をとる。そこで「最終戦論」で提案したのは、

第一に官憲の大縮小である。統制国家に於てはもちろん官の強力を必要とする。しかし強力は必ずしも範囲の拡大でない。

必要欠くべからざる事を確實迅速に決定して、各機関をして喜び進んで実行せしむる事が肝要である。今日の如くあらゆる場面を総て官憲の力で統制しようとするのは統制の本則に合しないのみならず、我が国民性に適合しない。民度の低いロシヤ人に適する方法は必ずしも我が国民には適當でない。この見地から今日の官憲は大縮小の可能なるを信ずる。官憲の拡大が人口集中の一因である。

第二は教育制度の根本革新である。日本の明治以後の急發展は教育の振興にあつたが、今日社会不安、社会固定の最も有力な原因は自由主義教育のためである。教育は子弟の能力によらず父兄の財力に依じて行なわれる。その教育は実生活と遊離して空論の人を造り、その人は柔弱で鍛鍊されておらない。勇気がない。勤労を欲しない。しかもこの教育せらるる者の数は国

家の必要との調和は全く考えられていない。非常時に於て知識群の失業が多いのは自然である。あらゆる方面から見て合宿主義時代に全国民が綜合能力を最高度に發揮せしむる主旨に合しない。中等学校以上は全廃、今日の青少年義勇軍に準ずる訓練を全国民に加え、そのうち、適性のものに高度な教育を施し、合理的に国民の職業を分配すべく、教育と実務の間に完全なる調和を必要とする。そうすれば自然都市の教育設備は国民学校を除き全部これを外に移転し得る。都市人口の大縮小を来たすであらう。

第三には工業の地方分散である。特に重要な軍事工業は適当に全国に分散する。徹底せる国土計画の下にその分配を定める。大河内正敏氏の農村工業はこの方式に徹底すれば日本工業のためすばらしい意義を持ち、同時に農村の改新に大光明を与

える。取敢えず今日より建設する工業には国家が計画的に統制を加うべきである。

以上の方法をもつてして都市人口の大縮小を行ない、しかも必要な政治中心、経済中心は徹底せる防空都市に根本改革を断行する。各地方は一旦事ある時、独立して国民の生活を指導し得る如く必要の処置を講ぜねばならない。

右の如く大事業を強行するだけでも自然に昭和維新は進展するであろう。本来大革新は境遇の必要に迫られて自然に行なわれる。軍事革命が当時の軍人の自覚なく行なわれたと同一である。そこには自然に大犠牲が払われた。しかるにソ連革命は全く古来の歴史と異なつてマルクス以来約百年の研究立案の計画により断行せられた。全人類今日なおこれに魅力を感じている。殊に戦乱の中心から離れていた日本にはそれが甚だしい。自称

日本主義者すら心の中にマルクス流のこの理論計画先行の方式にほとんど絶対的の魅力を感じているらしい。

ヒットラーのナチス革命は右両者の中庸である。その天才的直感力に依りて大体の大方針を確立し、その目的達成のために現実の逼迫を巧みに利用して勇猛果敢に建設事業に邁進する。方法は自然にその中に発見せられ、勇敢に訂正、改善して行く。その後を学者連中が理論を立てて行くのである。

何ら組織的準備のない日本の昭和維新は断じてマルクス流に依るべきでない。否やりたくとも計画がない。否でも応でもヒットラー流の実行先行の方式に依らなければならない。それには万人を納得せしむる建設の目標が最も大切である。今日、日米戦争の危機が国民に防空の絶対必要を痛感せしめた。

右のような一年前に空想に過ぎなかった大計画も、今日は国民

尤も^{もつと}と思わしむるに足る昭和維新原動力の有力な一つとなつた。

第七章 現在に於ける我が国防

第一節 現時の国策

速やかに東亜諸国家大同の実を挙げ、その力を総合的に運用して世界最終戦争に対する準備を整うるのが現在の国策であらねばならぬ。明治維新の廃藩置県に当るべき政治目標は「東亜の大同」である。

「東亜大同」はなるべく広い範囲が、なるべく強く協同し、成し得れば一体化せらるる事が最も希望せらるるのであるが、それはそう簡単には参らない。範囲は大アジアと書いても一つの

空想、希望に過ぎない。我が（我が国および友邦）実力が欧米覇道主義の暴力を制圧し得る範囲に求めねばならぬ。東亜連盟の現実性はそこにある。爾後東亜諸民族により時代精神が充分理解せられ、かつ我が実力の増加に依り範囲は拡大せらるるのである。協同の方式も最初は極めて緩やかなものから逐次強化せられる。即ち国家主義全盛時代にも言われた善隣とか友邦とかから東亜連盟となり、次いで東亜連邦となり、遂には全く一体化して東亜大国家とまで進展する事が予想せられる。

近頃、東亜連盟は超国家的思想である。各国家の上に統制機関を設け、その権力をもつて連盟各国家を統制指揮するは怪しからぬ等との議論もあるようである。かくの如きは全く時代の大勢を知らない旧式の思想である。一国だけで世界の大勢に伍して進み得る時代は過ぎ去った。如何にして多くの国家、多く

の民族を統制してその実力を發揮するかが問題である。それゆえ統制はなるべく強化せられねばならぬ。

日満両国間はその歴史的関係によつて相当強度の統制が行なわれている。見方によつては両国は連盟の域を脱して、既に連邦的存在、ある点では大国家的存在とも言える。しかし日華両国は現に東亞未曾有の大戦争を交えている。幸い近く平和が成立したところで急速に心からの協同は至難である。無理は禁物である。理解の進むに従つて統制を強めて行かねばならない。

最初は善隣友好の範囲を遠く出づる事は適當であるまい。霸道主義者は力をもつて先ず条約的に權益ないし両国の権利義務を決定しようとするに反し、我らの王道主義者は先ず心からの理解を第一とせねばならない。法的問題は理解の後に続行すべきである。そこで「東亞連盟」論では、今日はほとんど統制機関

を設けようとしていないのである。

しかしそれは決して理想的状态でない。理解の進むに従い適切に敏活なる協同に要する統制機関を設置すべきである。

「最終戦論」には「天皇が東亞諸民族から盟主と仰がるる日、即ち東亞連盟が真に完成した日であります」と述べている。その頃になれば連盟の統制機関も相當に準備せられているであらう。元来東亞連盟の完成した日は、即ち連邦となる日と言うべきである。あるいは物判りの良い東亞諸民族が、真に王道に依つて結ばれ、王道の道統的血統的護持者であらせらるる天皇に対し奉る信仰に到達したならば、連邦等は飛越えて大国家に一挙飛躍するのではないだろうか。そんな風になれば今日までの科学文明の立ち遅れ等は容易に償い得るであらう。

満州建国間もなく、民族協和徹底のためには東亞新秩序成立

の必要が痛感せられ、東亞連邦、東亞連盟が唱道せられたが、日満間には兎に角、日華間には連邦への飛躍は到底期待し難いので東亞連盟論が自然に採用せられ、昭和八年三月九日協和会の声明となった。私は昭和七年八月満州国を去りこの協和会の声明は知らないでいたが、昭和八年六月某参謀本部部員から「石原は海軍論者なりという上官多し、意見を書いてくれ」と要求せられた。当時私は対米戦争計画の必要を唱えていたからである。それで筆を執った「軍事上より見たる皇国の国策並国防計画要綱」なる私見には、

一、皇国とアングロサクソンとの決勝戦は世界文明統一のため、人類最後最大の戦争にしてその時期は必ずしも遠き将来にあらず。

二、右戦争の準備として目下の国策は先ず東亞連盟を完成す

るに在り。

三、東亜連盟の範囲は軍事経済両方面よりの研究に依り決定するを要す。人口問題等の解決はこれを南洋特に濠州に求むるを要するも、現今の急務は先ず東亜連盟の核心たる日満支三国協同の実を挙ぐるに在り。

と云うている。この文は印刷せられ次長以下各部長等に呈上せられた筈である。恐らく上官が東亜連盟の文字を見られた最初であろう。

協和会の公式声明を知らなかった私はその後の満州国、北支の状況上、東亜連盟を公然強調する勇気を失っていたが、昭和十三年夏病気のため辞表を提出した際、上官から辞表は大臣に取次ぐから休暇をとって帰国するよう命ぜられたので軽率な私は予備役編入と信じ、九月一日大洗海岸で暴風雨を聴きながら

「昭和維新方略」なる短文を草し、満州建国以来同志の主張に基づき東亜連盟の結成を昭和維新の中核問題としたのである。しかるに同年九月十五日の満州国承認記念日に、陸相板垣中将がその講演に東亜連盟の名称を用いられた。更に次いで発表せられたいわゆる近衛声明は東亜連盟の思想と内容相通ずるものがある。実は私は板垣中将が関東軍参謀長時代から東亜連盟は断念しているだろうと独断していたのであったから、これには相当驚かされたのであった。爾後板垣中将は宮崎正義氏の「東亜連盟論」や、杉浦晴男氏の「東亜連盟建設綱領」に題字を贈り、かつ近衛声明は東亜連盟の線に沿うたのである事を発表せられた。

昭和十五年天長の佳辰に発せられた総軍司令部の「派遣軍将兵に告ぐ」には、事変の解決のため満州建国の精神を想起せし

め、道義東亜連盟の結成に在る事を強調せられた。これに誘致せられて中国各地に東亜連盟運動起り、十一月二十四日南京に於ける東亜連盟中国同志会の結成となり、昭和十六年二月一日東亜連盟中国総会の発会式となった。

日本に於ては昭和十四年秋東亜連盟協会なるもの成立、機関紙「東亜連盟」を発行、翌十五年春から運動が開始せられた。在来の東亜問題に関する諸団体は大体活発に活動を見ないのこの協会だけは急速な進展を見、中国東亜連盟運動発展の一動機となったのである。東亜連盟の内容については日華両国の間に未だ完全な一致を見ていないようである。日本が国防の共同というのに中国は軍事同盟、経済一体化に対して経済提携と言っているし、日本が国防の共同、経済の一体化を特に重視しているのに中国は政治独立に特別な関心が見える。しかしこれらは

両国の事情上当然の事と言ふべきである。将来は逐次具体的に強調して来るであらう。兎に角東亜連盟の両国運動者には既に同志的気持が成立している事は民国革命初期以来数十年ぶりの現象である。感慨深からざるを得ない。東亜連盟運動が正しく強く生長、東亜大同の堅確なる第一歩に入る事を祈念して止まない。

第二節 我が国防

現時の国策即ち昭和維新の中核問題である東亜連盟の結成には、根本に於て東亜諸民族特に我が皇道即ち王道、東方道義に立返る事が最大の問題である。国家主義の時代から国家連合の時代を迎えた今日、民族問題は世界の大問題であり、日本民族も明治以来朝鮮、台湾、満州国に於て他民族との協同に於て殆

んど例外なく失敗して来たった事を深く考え、皇道に基づき正しき道義觀を確立せねばならぬ。満州建国の民族協和はこの問題の解決点を示したのである。満州国内に於ける民族協和運動は今日まで遺憾ながらまだ成功してはいない。明治以来の日本人の惰性の然らしむるところ、一度は陥るべきものであろう。しかし一面建国の精神は一部人士により堅持せられ、かつ実践せられつつあるが故に、一度最大方針が国民に理解せられたならばたちまち数十年の弊風を一掃して、東亞諸民族と心からなる協同の大道に驀進するに至るべきを信ずる。

この新時代の道義觀の下に、世界最終戦争を目標とする東亞大同の諸政策が立案実行せられる。しかしそれがためには我が東亞の地域に加わるべき欧米覇道主義者の暴力を排除し得る事が絶対条件である。即ち東亞（我が）国防全からずして、東亞

連盟の結成は一つの夢にすぎない。

東亜連盟の結成が我が国防の目的であり、同時に諸政策は最も困難なる国防を全からしむる点に集中せらるる事とならねばならぬ。国策と国防はかくて全く渾然一体となるのである。いわゆる国防国家とはこの意味に外ならない。

東亜連盟の結成を妨げる外力は、

1 ソ連の陸上武力。

2 米の海軍力、これには英、ソの海軍が共同すると考えねばならぬ。

であるからこれに対し、

1 ソ連が極東に使用し得る兵力に相当するものを備え、かつ少なくともソ連のバイカル以東に位置するものと同等の兵力を満州、朝鮮に位置せしむ。

2 西太平洋に出現し得べき米、英、ソの海軍力に対し、少なくとも同等の海軍力を保持せねばならぬ。

陸軍当局の言うところによれば極東ソ軍は三十個師団以上に達し、約二千台の戦車及び飛行機を持っている。それに対する我が在満兵力は甚だしい劣勢ではあるまいか。この不安定が対ソ外交の困難となり、また一面今次事変の有力な動機となった。而して日ソ両国極東兵備の差は僅々数年の間にこんな状態となったのである。全体主義的ソ連の建設と自由主義的日本の建設の能力の差を良く示している。ナチス政権確立以来数年の間に独仏間の軍備の間に生じた差と全く同一種類のものである。我ら是一日も速やかに飛躍的兵備増強を断行せねばならぬ。アメリカ最近の海軍大拡張はどうであるか。海相は数は恐るるに足らぬ。独自の兵備によってこれに対抗し、断じて心配ないと言う

ているし、また一部南進論者は三年後には米国の製艦により彼我海軍力に大きな差を生ずるから今のうちに開戦すべしと論じている。しかし更に根本的問題は、我らは万難を排してソ連の極東軍備およびアメリカの海軍拡張に対抗せねばならないことになる。ソ連が極東に三十師団を持って来れば我が軍も北満に三十師団を位置せしむべく、ソ連戦車三千台なら我も三千台、また米国が六万屯の戦艦を造るなら我もまたこれと同等の建艦を断行すべきである。

そんな事は無理だと言うであろう。その通り我が国の製鉄能力は今日ソ連の数分の一、米国に比しては更に著しく劣っているのは明らかである。しかし造るべきものは造らねばならぬ。断々乎として造らねばならぬ。この一步をも譲ることを得ざる国防上の要求が我が経済建設の指標であり昭和維新の原動力で

ある。この氣力無き国民は須からく八紘一字を口にすべからず。三年後には日米海軍の差が甚だしくなるから、今のうちに米国をやつつけると言う者があるが、米国は充分な力がないのに、おめおめ我が海軍と決戦を交うると考うるのか。また戦争が三年以内に終ると信ずるのか。日米開戦となつたならば極めて長期の戦争を予期せねばならぬ。米国は更に建艦速度を増し、所望の実力が出来上るまでは決戦を避けるであらう。自分に都合よいように理屈をつける事は危険千万である。

我が財政の責任者は今次事変の直前まで、年額二三十億の軍費さえ我が国の堪え難き所と信じていた。然るに事変四年の経験はどうであるか。

日本が真に八紘一字の大理想を達成すべき使命を持っているならばソ連の陸軍、米の海軍に対抗する武力を建設し得る力量

がある事は天意である。これを疑うの余地がない。国防当局は断固として国家に要求すべし。この迫力が昭和維新を進展せしむる原動力となる。しかしてかくの如き膨大な兵器の生産は宜しく政治家、経済人に一任すべく、軍部は直接これに干与することは却つて迫力を失う事となる。国防国家とは軍は軍事上の要求を国家に明示するが、同時に作戦以外の事に心を勞する必要なき状態であらねばならぬ。全国民がその職分に応じ、国防のため全力を尽す如き組織であらねばならぬ。

以上陸、海の武力に対する要求の外更に、

3 速やかに世界第一の精鋭なる空軍を建設せねばならない。

これは一面、将来の最終戦争に対する準備のため最も大切であるのみならず、現在の国防上からも極めて切要である。

ソ連が東亜に侵攻するためにはシベリヤ鉄道の長大な輸送を

必要とするし、また米国渡洋作戦の困難性は大である。即ち極東ソ領や、ヒリッピン等はソ、米のため軍事上の弱点を形成し彼らの頭痛の種となるのであるが、その反面、ソ、米は我が国の中心を空襲し我が近海の交通を妨害するに便である。それに対し我が国は有利なる敵の政治、経済的空襲目標もなく、敵国に対し、死命を制する圧迫を加える事はほとんど不可能に近い。即ち彼らは片手を以て我らと持久戦争を交え得るのに対し、我らは常に全力を傾注せねばならぬ事となる。持久戦争に非常な緊張を要する所以である。

この見地から空軍の大発達により我が軍も容易にニューヨーク、モスクワを空襲し得るに至るまで、即ちその位の距離は殆んど問題でなくなるまで、極言すれば最終戦争まではなるべく戦争を回避し得たならば甚だ結構であるのであるが、そう

も行かないから空軍だけは常に世界最優秀を目標として持久戦争時代に於ける我らの国防的地位の不利な面を補わねばならない。

ドイツ空軍は第二次欧州大戦の花形である。時に海上に出て、時に陸上部隊に、水も洩らさぬ緊密な協同作戦をする。真に羨ましい極みである。我が国の国防的状态はドイツと同一ではなく、ただちにドイツの如くなり得ない点はあるであろうが、極力合理的に空軍の建設を目標として着々事を進むると同時に、航空が陸海軍に分属している間も一層密接なる陸海空軍の協同が要望せられる。この頃そのために各種の努力が払われているらしく誠に慶賀の至りに堪えない。器材方面では既に密接な協力が行なわれているであろうし、また運用についても不断の研究によつて長短相補う如くせねばならぬ。例えば、東ソ連の航

空基地は満州国境から何れも（西方は別として）余り遠くなく、しかも極東には有利なる空爆目標に乏しいのであるから、対ソ陸軍航空部隊は軽快で特に速度の大なるものが有利と考えられる。海軍は常に長距離に行動せねばならない。かくの如き特長は互に尊重せらるべきだと信ずる。海軍機が支那奥地の爆撃に成功したとて、陸軍機がただちにこれに競争する必要はない。陸海軍の真の航空全兵力を戦争の状態に応じ一分の隙もなく統一的に運用し、陸海軍に分属していても空軍の占める利益をも充分發揮し得る如く全部の努力が払われねばならない。恐らく今日はそうなっている事と信ずる。

防空に関し最終戦争のために二十年を目標として根本的対策を強行すべき事を主張したが、今日はそれに関せず応急的手段を速やかに実行せねばならぬ。

第一の問題は火災対策である。木材耐火の研究に最大の力を払い、どしどし実行すべきである。現に各種の方法が発見せられつつあるではないか。消防につけても更に画期的進歩が必要である。

またどうも高射砲等の防空兵器が不充分ではないか。これには高射砲等の製作の会社を造り急速に生産能力を高めねばならぬ。総て兵器工業は民間事業を特に活用するを要するものと信ずる。各種会社、工場等は自ら高射砲を備えしめては如何。そうして応召の予定外の人にて取扱い者を定めて練習せしめ、時に競技会でも行なえばただちに上達する事請合である。弾丸だけは官憲で掌握しておれば心配はあるまい。有事の場合必要に応じてその配置の統制も出来る。航空部隊を除く防空はなるべく民間の仕事とした方が良いのではあるまいか。

しかし防空全般に関しては今日以上の統制が必要である。防空総司令官を任命（成し得れば宮殿下）し、これに防空に任ずる陸海軍部隊および地方官憲、民間団体等を総て統一指揮せしめる。

持久戦争であるから上述の軍需品の他、連盟の諸国家国民の生活安定の物資とともに東亞連盟の範囲内で自給自足し得る事が肝要である。即ち経済建設の目標は軍需、民需を通じて、統一的に計画せられねばならない事は言うまでもない。

アメリカでさえ総ての物資は自給自足をなし得ないのである。最少限度の物資獲得の名に於て我らの力の現状を無視していたずに外国との紛争を招く事は充分警戒を要する。戦争は最大の浪費である。戦争とともに長期建設と言うも、言うは易く実行は至難である。

ドイツの今日あるはあの貧弱なる国土、恵まれざる資源に在つたとも言える。即ち被封锁状態が彼らの科学を進歩せしめた。資源もちろん重要であるが、今日の文明は既に大抵の物は科学の力により生産し得るに至りつつある。資源以上に重要なものは人の力であり、科学の力である。日、満両国だけでも資源はすばらしく豊富にある。殊にその地理的配置が宜しい。我らが科学の力を十二分に活用し、全国力を総合的に運用し得たならば、必ずや近き将来断じて覇道主義に劣らざる力を獲得し得るであらう。

鉄資源としては日本は砂鉄は世界無比豊富であり、満州国の鉄はその埋蔵量莫大である。精錬法も熔鉱炉を要しない高周波や上島式の如き世界独特の方法が続々発明せられている。石炭は無尽蔵であり、液化の方法についても福島県下に於て実験中

の田崎式は必ず大成功をする事と信ずる。その他幾多の方法が発明の途上にあるであらう。熱河から陝西、四川にわたる地区は世界的油脈であると推定している有力者もあると聞く。断固試掘すべきである。

その他必要な資材は何れも必ず生産し得られる。機械工業についても断じて悲観は無用である。天才人を発見し、天才人を充分に活動せしむべきである。

国家が生産目標を秘密にするのは一考を要する。ソ連さえ発表して来た。国民の統制完全であり、戦争目的第一であるドイツは機密としたが、日本の現状はむしろ勇敢に必要な数を公表し、国民に如何に彪大な生産を要望せらるるかを明らかにすべきであると信ずる。国民の緊張、節約等は適切なるこの国家目標の明示により最もよく実現せらるるであらう。今日のやり方

は動もすれば百年の準備ありしマルクス流である。理論や機構が第一の問題とせられる。いたずらにそれらに遠慮してしかも気合のかからぬ根本原因をなしている。

どんな事があつても必ず達成しなければならぬ生産目標を明示し、各部門毎に最適者を発見し、全責任を負わしめて全関係者を精神的に動員して生産増加を強行する。政府は各部門等の関係を勇敢親切に律して行く。そうすれば全日本は火の玉の如く動き出すであろう。資本主義か国家社会主義か、そんな事は知らない。どうでも宜しい、無理に資本主義の打倒を策せずとも、資本主義がこの大生産に堪え得なければ自然に倒れるであらう。時代の要求に合する方式が必ず生まれて来る。昭和維新のため、革新のための昭和維新ではない。最終戦争に必勝の態勢を整うるための昭和維新である。必勝せんとする国民、東

亜諸民族の念力が自然裡に昭和維新を實行するのである。

この意気、この熱意、この建設は自然に世界無比の決戦兵器をも生み出す。即ち今日持久戦争に対する国防の確立が自然に将来戦争に対する準備となるのである。

第三節 満州国の責務

ソ連が東亜連盟を侵す径路は三つある。第一は満州国であり、第二は外蒙方面より蒙疆地方への侵入、第三は新疆方面である。その中で東亜連盟のため最も弱点をなすものは第三であり、最も重要なものは第一である。満州国の喪失は東亜連盟のためほとんど致命的と言える。日華両国を分断しかつ両国の中心に迫る事となる。満州国は東亜連盟対ソ国防の根拠地である。東亜連盟が直接新疆を防衛する事は至難であるが、満州国のソ領

沿海州に対する有利な位置は在満州国の兵備が充実しておれば間接に新疆方面をも防衛することとなる。

この大切な満州国の国防は、日満議定書に依り日満両国軍隊共同これに当るのである。

満州軍の建設には人知れざる甚大な努力が払われた。これに従軍した人々の功績は満州建国史上に特筆せらるべきものである。しかるに満州軍に対する不信は今日なお時に耳にするところである。たしかに満州軍は今日も背反者をすら出す事がある。しかし深くその原因を探求すべきである。満州軍の不安は実に満州国の不安を示しているのである。満州国内に於て民族協和の実が漸次現われ、民心比較的安定した支那事変勃発頃の満州軍は、恐らく最良の状態にあつたものと思う。その後事変の進むに従い漢民族の心は安定を欠き、一方大量の日系官吏の進出

と経済統制による日本人の専断が、民族協和を困惑する形となり、統制経済による不安と相俟って民心が逐次不安となつて来た。この影響はただちに治安の上に現われ、満州軍の心理をも左右するのである。満州軍は要は満州国の鏡とも見る事が出来る。

支那事変に於ける漢民族の勇敢さを見ても、満州国が真にその建国精神を守り、正しく発展するならば満州軍は最も有力なる我らの友軍である。若し満州軍に不信ならば満州国人の心理に深く注意すべく、自ら満州国の民心を把握していない事を覺らねばならぬ。

満州国の民心安定を欠く時は共産党の工作が進展して来る。非常に注意せねばならない。これがため共産党の取締はもちろん大切であるが、更に大切なのは民心の安定である。元来漢民

族は共産主義に対し、日本人のように尖鋭な対抗意識を持たない。防共ということはどうもピンと来ぬらしい。彼らは共産主義は恐れていない。故に防共の第一義は民心を安定し、安居樂業を与える事である。多くの漢人に対し共産主義の害毒を日本人に対するように宣伝をしてもどうも余り響かないらしい。共産主義が西洋覇道の最先端にある事を明らかにし、国内で真に王道を行なえば共産軍は大して心配の必要なく、民心真に安定すればスパイの防止も自然に出来る。民心が離れているのに日系警官や憲兵でスパイや謀略を防がんとしても至難である。

満州国防衛の第一主義は民心の把握であり、建国精神、即ち民族協和の実践である事を銘心せねばならぬ。

かつて昭和十二年秋関東軍参謀副長として着任、皇帝に拝謁の際、皇帝から「日系軍官」の名を無くして貰いたいとの御言

葉を賜つて深く感激したことがある。これは今日も遺憾ながら実現せられていない。私としては誠に御申訳ないと自責しているのである。

複合民族の国家では各民族軍隊を造る事が正しいと信ずる。即ち満州国では日本人は日満議定書に基づき、日本軍隊に入つて国防に当るのであるが、それ以外の民族は各別に軍隊を編制すべきである。現に蒙古人は蒙古軍隊を造っているが、朝鮮軍隊も編成すべきである（一部は実行せられているが、大々的に）。回々（イスラム）軍隊も考えられる（これは朝鮮軍隊ほど切実の問題ではない）。軍隊は兵器を持つて危険な存在だから、言語や風俗を異にする民族の集合隊は適當と言えぬ。

日本人が漢民族の軍隊に入つて働くのを反対するものではない。しかしそれは漢人の一員たる気持であらねばならぬ。皇帝

が日系軍官の名称を止めよと仰せられた御趣旨もここにあると拝察する。諸民族混住の国に於て官吏は日系、満系、朝鮮系等のあるは自然であるが、軍隊は各民族軍隊を造るのであるから、漢民族の軍隊の中に「日系軍官」なる名称の有せらるるは適当でない。

田舎の満州人警察の中に少数の日系警官を入れて指導する考えらしいが、この日系警官が満州国不安の一大原因となつてゐるのは深く反省せねばならぬ。他民族の心理は内地から出稼ぎに來た人々に簡単に理解せられない。警官には他民族の觀察はほとんど不可能であり、また満州人警官の取締りも適切を欠く。

満州国内匪賊の討伐は実験の結果に依ると、日本軍を用うるは決して適當でない。匪賊と良民の区別が困難であり、各種の誤解を生じ治安を悪化する虞が大きい。満州国の治安は実に満

州軍が主として匪賊討伐にあたるようになってから急速に良くなつたのである。満州国内の治安は先ず主として満州軍これにあたり、逐次警察に移し、満州軍は国防軍に編制するようにすべきである。国兵法の採用により画期的進歩を期待したい。

有事の日は、日本陸軍の主力は満州国を基地として作戦する事自明であるが、その膨大な作戦資材、特に弾薬、爆薬、燃料等は満州国で補給し得るようにせねばならない。満州国経済建設はこれを目途としている事と信ぜられるが、その急速なる成功を祈念する。

糧秣その他作戦軍の給養を良好にするため北満の開発が大切であり、北辺工作はその目的が多分に加味されている事は勿論である。しかし日本軍自体もこの点については更に更に明確な自覚を必要とする。ソ連が五個師団増加せば我もまた五個師団、

十個師団を持つて来れば我もまた十個師団を進めねばならない。それには迅速に兵営等の建築が必要だが、今日までの如き立派なものでは到底間に合わない。

幸い青少年義勇軍の古賀氏の建築研究は着々進んでいるから、これを採用すれば必ず軍の要求に合し得るものと信ずる。浮世が恋しい人々は現役を去るが宜しい。昭和維新のため、東亜連盟結成のため、満州国防完成のため、我らは率先古賀氏のよくな簡易な建築を自らの手で実行し、自ら耕作しつつ訓練し、北満経営の第一線に立たねばならぬ。

新体制とか昭和維新とか絶叫しながら、内地式生活から蟬脱出来ない帝国軍人は自ら深く反省せねばならぬ。

我ら軍人自ら昭和維新の先駆でなければならぬ。それがために自ら今日の国防に適合する軍隊に維新せねばならぬ。北満無

住の地は我らの極楽であり、その極楽建設が昭和の軍人に課せられた任務である。

(昭和十六年二月十二日)

後註

- 一 底本25頁に「ドイツの対仏作戦に於ける軍主力の前進方向」の図がある
- 二 底本27頁、左上に図あり
- 三 底本47頁、左上に図あり
- 四 底本53頁に図あり
- 五 底本64頁に「付表第一 戦争進化景況一覧表」がある
- 六 ここから罫囲み

七　ここで野囲み終わり

八　底本121頁に「付表第二　近世戦争進化景況一覧表」入る

九　底本142頁右上に、持久戦争と決戦戦争の移り変わりを示した図あり

一〇　底本167頁左上に戦争指導に関する表あり

一一　底本173頁に君主の戦争の表あり

一二　底本175頁左上に図あり

一三　底本177頁に地図あり

一四　「アルサス」はママ

一五　底本197頁上に地図あり

一六　底本198頁右上に地図あり

一七　底本214頁上に地図あり

一八　底本216頁右上に地図あり

一九　底本218頁右上に地図あり

二〇　底本219頁左上に地図あり

二一　底本223頁上に地図あり

- 二二 ここから2段組、上段
- 二三 ここで2段組、上段終わり
- 二四 ここから2段組、下段
- 二五 ここで2段組、下段終わり
- 二六 底本232頁右上に図あり
- 二七 底本233頁左上に図あり
- 二八 底本239頁左上に地図あり
- 二九 底本240頁に地図あり
- 三〇 底本241頁に地図あり
- 三一 底本245頁左に図あり
- 三二 底本254頁右上に図あり
- 三三 底本261頁に地図あり
- 三四 底本262頁に地図あり

底本：「最終戦争論・戦争史大観」中公文庫、中央公論社

1993（平成 5）年 7 月 10 日初版

1995（平成 7）年 6 月 10 日 5 版

底本の親本：「石原莞爾選集 3 最終戦争論」たまいらば

1986（昭和 61）年 3 月

※丸括弧中に示したページ数は、底本のそれである。

入力：林孝司@石原莞爾デジタル化同志会

校正：KOKODA @石原莞爾デジタル化同志会

2001 年 8 月 29 日公開

2006 年 5 月 19 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。